

# 大学時報

1993. 1

第228号



人間として

青木 生子 (日本女子大学学長)

二十一世紀にかけて、私たちがいま模索しているものは、あらゆる面での人間らしさの回復と創出であろう。近年、「人間」を冠せた学部・学科名の新設が目立つ。日本女子大学も人間社会学部・人間生活学研究科(博士課程後期)を増設した。ただし、本学の場合はその淵源を建学の精神にもつ。

本学創設(一九〇一年)の意見を天下に公表するために出版された成瀬仁蔵の『女子教育』(一八九六年刊)には、女子を第一に人間として、第二に婦人として、第三に国民(社会人)として教育することが明言されている。人間尊重、個性に応じた全人教育によって、豊かな深い人間形成を目指す教育理念は、時代を先どりしたものであり、未来にわたる不変の真理というべきものであろう。

●年頭所感  
現代の教育の問題——学生の一文から

／西原 春夫（早稲田大学前総長・本連盟会長）

明けましておめでとうございます。

平成五年、一九九三年の年頭に当たり、皆様のご健勝と私大連加盟各大学のご繁栄を心からお祈り申し上げます。

昨年二月、学年末試験の採点をしていたら、次のような答案が出てきました。お気にさわる方もいらっしゃるかもしれませんが、現代の教育のかかえるいろいろな問題が凝縮しているように思われるので、終わるまで読んでみて下さい。答案は、私の出題した課題についてはこれをさておき、と前置きしたうえで、次のように書かれていました。

「私は高校時代に一度先生に激励の言葉をいただき、握手していただいたこともある者です。先生の教え子で、町田市で早稲田塾を経営していらっしゃる〇〇先生をご存じの事と思います。私はその塾の生徒でした。二年前の受験シーズンに、皆のあこがれ、早稲田の総長が突然私達を励ましにやってきました。以来、私はそれまで早稲田に抱いていたイメージが一八〇度変わりました。先生の笑顔、おらかな態度が強く私の印象に残りました。私は××大学を希望していましたが、まさに先生に触発され、早稲田を受けることを決心したのです。

私の通っていた高校は進学校ではなく、早稲田に合格した先輩など、浪人を含めても一人もいませんでした。その上、私は学校でも成績の悪い生徒だったので。いつもつまらない校則や教師の偏見などに腹を立て、職員会議などで要注意人物としてマークされ、学期が終わる毎に両親が学校に呼び出されていました。しかし私自身は不良や非行少女だったわけではなく、普通の健康的な不良娘、といった感じの生徒だったのですが、教師達は私の思考に対して要注意の札を掲げたのでした。私は日本の高校という枠から

大きくハミ出していたのです。人は平等であるはずなのに、校則を破る生徒をまるで戦前のように厳しく体罰で痛めつけたり、人間扱いせず無視をして、ロボットのようリモートコントロールできると信じている教師達。私は彼らと暴力や非行行為による闘いではなく、理論でぶつかりました。結局卒業するまで煙たがられていた私ですが、誰も予想できなかった早稲田大学への合格を果たして、私は不良でも馬鹿でもないんだよ、と証明をしたのです。

そんな様々な思いや願いのこもった私の早稲田合格の火付け役になったのが、名門でもなんでもない、ただの町塾の私達に向かつて、心から頑張れと励ましてくれた西原先生のあの姿だったのです。私は将来、早稲田の名に恥じないよう必ず何かをなし遂げてやろうと思っています。先生に触発されて入ったこの大、これからもずっとこの伝統を守っていきたいです」

この物語を私の側から説明しますと、ある晩町田市で卒業生の会が開かれ、そこに出席した折、教え子の一人だった〇〇先生に会いました。そして帰りがけに自分のやっている塾に寄ってくれと頼まれ、多少躊躇はしたのですが、「早稲田塾」と看板を掲げているのでは、仕方ないと思い、立ち寄ることにしました。行ってみると、夜九時すぎというのに皆が実に一生懸命勉強しているのです。しかもそこには予備校特有の暗さはまったくありませんでした。〇〇先生が「この方は早稲田の総長だよ」と紹介すると、教室中エエツとか、キヤーとか大騒ぎ。私は絶大な拍手に感激して激励の言葉を述べ、近くの生徒と握手をして帰っていったのでした。

私があえてこの一文を紹介したのは、はたしていまの公教育は生徒のかくされた力量を引き出しつくしているのだろうかという、普段からもついていた疑問が、これを契機として一段と強くなったからです。塾だ予備校だと批判する資格が公教育の側にあるのだろうかと思われませんでした。

いまの若者は、いろいろ批判はされているけれども、いったんやる気を起こせば普段からでは想像もつかない大きなことをやってのける力をちゃんと持っている。これを引き出せないのは我々教師、というより我々大人の責任ではないか……。この一文を読んで、水を浴びさせられたように我が身をふりかえったのは、きつと私一人ではないと確信いたします。

# 大学・教員・職員・学生

／山崎

春成

(桃山学院大学学長)

戦後の日本で大学改革が大きな問題となった時期は二度あった。最初は六〇年代末の大学紛争の時期であり、二度目はいまである(もう一つ、戦後すぐの教育制度改革の時期を挙げるべきかもしれない)。

大学紛争の時期、改革の提起者は学生・院生だった。それに突き上げられて教員も反応せざるを得ず、大学改革がところによっては熱っぽく論じられた。しかし、大学のあり方への学生の異議申し立てが大学解体というところまで舞い上がって空中分解してしまうとともに、教員の側の改革論議も立ち消えになった。紛争が大学教職員に与えた衝撃は、様々な程度と形で長く残り続けたが、大学そのもの

はあまり変わらなかった。

あの時期、なぜ大学紛争が野火のように全国に広がったのか。あれから二十年以上を経て、全く違った文脈からではあれ、大学改革が問題となってきたいま、これは改めて検討されるに値する問題であろう。様々な要因の中でも重要な一つとして、そのときすでに進行中であつた大学の大衆化、つまり高度経済成長を背景とした大学進学率の急上昇、それに呼応した大学の急速な量的拡大、それに伴う学生の資質や意識の変化などに対して、戦後の大学改革が制度の表層だけの変更にとどまって、その内実は教育内容においても、管理運営においても、旧態



依然たる保守的体質のままだったという、そのズレが挙げられるであろう。学生は変わっていつているのに、大学は変わらないというズレである。

大学紛争後、大学の大衆化はさらに進み、大衆化した学生の資質や意識は、日本の社会の急速な変化を反映して、さらに変化した。一方、大学は、戦後ずっと続いた量的拡大の時期にいや応なしに終止符を打たざるを得ないという大きな転機を迎えている。そこに、紛争の大嵐に見舞われても、それが一過性のものであったために先送りすることができた大学改革の課題が、違った文脈で改めて浮上することになったのである。

大学紛争の時期に大学改革の最も戦闘的な(あるいはむちゃくちゃな)担い手だった学生は、いまはとみに非政治化し、脱イデオロギーが進んで、大学四年間は受験勉強の重圧から解放されてもっぱら遊び楽しむモラトリアムの時期となっている。彼らの間には、大学教育に対する様々の不満がないわけではない。大ありかもしれない。しかし、それは底流として存在するにとどまっています、それが大学や教師に対する批判・異議申し立て・改革要求として表出されることはほとんどない。そういう意味では学生は、いま、大学改革のアクターとしては、全く後景

に退いている。

いま大学改革の主導者となっている、あるいは主導者たらざるを得ないのは、大学、もっと限定して端的に言えば、大学の運営の責任を負っている理事者・管理者層である。大学紛争の時期とはまさに様変わりである。

この層が大学改革を課題として取り組まなければならなくなっているのは、一つには大学本来の使命である教育・研究を現状のままに放置してはおけないという社会的要請と、教育・研究の責任者としての自主的判断との両方からきている。しかし、もう一つ、特に私学においては、経営の観点が大学改革への極めて重要な駆動力となっていることも否定しがたい事実である。

大学が提供する教育サービスの買い手・顧客である学生の供給源としての十八歳人口が持続的に減少するという、経営体としての大学にとっての市場条件の根本的变化に、大学は直面している。いわば大学は、成長産業から一転して、構造不況産業と化しつつあるわけだ。そういう大きな変化が差し迫っていることが、教育サービスの買い手・消費者としての学生という、かつては異端的だった学生観を広めることにもなってきた。そこから大学は「教育をし

てやる」というような権威主義的な姿勢を改めて、  
買手・顧客のニーズへの対応を考えて、その教育  
サービスの内容や技術の改善、イノベーションに努  
めなければならぬという議論も強まってくる。

そういう意味では、受動化して改革のアクターた  
る位置から引き下がったかみえる学生が、実は陰  
の主役として大学改革を方向づけているともいえる  
であろう。

しかし、いまの学生をいったいどういう特性の社  
会集団として理解するのか、彼らの自分自身に対す  
る位置づけはどうか、彼らの大学に対する期  
待・欲求はどうか、といった点になると、教員  
の側にもあまり突っ込んだ認識はないように思われ  
る。大量化した学生は、大学への進学率が三パーセ  
ント程度だった戦前の時期の学生に比べれば、当然  
に極めて多様であって、それを概括的に論ずるのは  
難しい。

かつて私が学生であったころ、河合栄治郎編の  
『学生と教養』『学生と読書』など、「学生と……」  
というタイトルのシリーズ（『学生叢書』）があつて、  
学生に広く読まれた。軍国主義の風圧が日増しに強  
まるそのころだったからこそ、戦間的リベラリスト  
河合が学生に熱い期待をかけて、学生に向けたこの

「教養のすすめ」のシリーズを編んだり、『学生に  
与う』という警世の書を世に問うたりしたのでらう  
が、それはもう遠い昔の話である。いまは学生向け  
教養シリーズのようなものは全くお呼びではなくな  
ってしまった。当時の学生に人気があった哲学者三  
木清が『現代学生論』を書いたのもそのころのことだ  
が、風俗論的現代学生論はともかく、三木のような一  
つの知識人論としての学生論のような切り口は、い  
まではとても成り立たない。学生の変容が進んでい  
るいま、掘り下げた現代学生論が欲しいところだ  
が、それはなかなか望みがたいことであろう。

他方で大学の教員も、大学の大量化に伴って大量  
化・多様化している。学生・教員両方の大量化・多  
様化によって、大学における教員・学生関係も変わ  
らざるを得ない。

大学紛争の時期に塾を見直そうという動きが（小  
さなものではあったが）あったことを思い出す。塾と  
いってもいまの進学塾ではない。幕末の私塾、そこ  
における卓越した師と少数の弟子との間の全人格的  
な触れ合いのもとに成り立つ濃密な師弟関係を、い  
まに生かしたいというのである。それは大衆化が進  
行し、索漠たるものとなっている教員・学生関係へ  
の反省として意味はあったと思う。しかし、しよせ

ん、昔をいまになすよしもがなであって、私塾的な教師・学生関係を高等教育の原点として評価することは有意義であっても、それをいまの大規模化した大衆化した大学に生かすことは不可能に近い。時は流れ去って、取り戻すことはできない。温古は知新のためのものでなければならぬ。

しかし、いまの教員と学生との教育的関係の溝を埋める責任は、教員の側にあることは明らかである。学生の質の低下をいくらグチっても、なんの役にも立たない。ところが大学の教員はそれぞれが一国一城の主の趣があり、それぞれの学問観・教育論・大学論をもって容易には譲らないから、「大学冬の時代」がしきりといわれる状況を、その意識の片隅においても受け止めていない教員は少なからうが、教員集団が、例えば学生Ⅱ消費者主権論的な大学論で足並みがそろい、教育サービスの向上・改善に精を出すというようなことは、なかなか難しい。教員の意識改革の必要が繰り返し語られ続けるという現状が、それを証明している。

大学紛争という非常事態のときでさえも、大学という組織がおよそ危機管理などということは縁遠いシステムだったこともあって、教師集団の足並みはなかなかそろわなかった。まして、いまはまだ、忍

び寄る危機の段階である。しかし、突発的な危機ではないだけに、少ないけれども時間はまだある。その時間をいかに有効に使って、それぞれの大学の志す改革の方向に教員集団をまとめ、動かしてゆけるか。それが大学の浮沈を決するであろう。

最後に。大学は教師と学生だけで成り立つものではない。大学が学生に教育そのほかのサービスの良質のものとして提供するためにも、大規模化した大学の管理運営を適切に行ってゆくためにも、職員の働きが不可欠である。それは、特に私学についていえることであろう。

大学紛争の時期はまた、大学における職員の位置づけについて、教員と職員の関係について、これまで隠されていた問題が、紛争に触発されて浮かび出てきた時期でもあった（少なくともいくつかの大学においては）。しかしそれも、うやむやのうちに持ち越されているようである。多難な将来に向かって大学の改革を構想する場合に、これらの持ち越しになっている問題をどのように明確化してゆくか。また、大学の教育や管理運営について教員に勝るとも劣らない識見をもつ職員をどのようにして育成してゆくか。それは、極めて重大な課題といわねばなるまい。

◎座談会◎

# 2000年の大学・学問・社会

——「将来構想」の再構想への課題——



香 山 健 一 (学習院大学教授)

御 前 進 (龍谷大学教授)

古 木 宜志子 (津田塾大学教授)

司会/内 田 満 (早稲田大学教授)

——敬称略・大学名ABC順——

内田 今日日は二十一世紀へ向けての大学の  
問題についてお話し合いいただこうというこ  
とでお集まり願いました。

ここ数年來、世界的に世紀的な大変化が起  
こっております。また国内で大学を囲む条件  
の変化も激しく、予想されております学生入  
口の急激な減少をも視野に入れながら、教育  
や教員のあり方についての問い直しも進めら  
れています。その中で多くの大学では、「将来  
構想」が文書にして提出されています。そう  
いった問題を整理しながら、時流に棹さすの  
ではなく、原点を確認し、将来を見据えた議  
論を試みたいと思います。

「二〇〇〇年の大学・学問・社会」という  
タイトルになっておりますが、二十一世紀に  
入るまでに我々の責任の中で、どういうこと  
をなすべきか、何を考えるべきかを確認する、  
いいかええますと、大学の「現実と夢」の間の  
諸問題を考えてみたいと思います。

## 二十一世紀の世界と大学

内田 最初に、二十一世紀の世界と大学に  
ついて、どんなイメージをおもちかお伺いし  
たいと思います。御前先生いかがですか。

## ●二十一世紀に四つの問題がある

御前 二十一世紀中に人類、あるいは世界が解決しなければならぬであろうという問題が、四つあると思います。

第一に環境問題。これについては説明を要しないと思います。

第二は、体制ないしは生産関係の問題です。ソ連型計画経済、いわゆる二十世紀社会主義が破綻したことをもって、市場経済の勝利と喧伝する向きもありますが、ひるがえって市場経済を顧みてみますと、これまでの資本主義の歴史は市場の暴力を人為的・計画的にどうやっておさえこむかを追求してきた歴史であつたと思います。市場原理が貫徹するままに任せておくと、極端な富の集中や恐慌、さらには帝国主義戦争をまで引き起こし、純然たる資本主義体制ではやっていけなかつたという歴史です。いままた、環境問題や民族問題、それに世紀末的な退廃現象の深刻化という形で、市場経済の限界性が突きつけられています。二十世紀型社会主義がダメだということです。それでは市場経済を原理とする資本主義体制でというわけにはいくまいという問題です。

## 第三にあげたいのは、民族ないし人種問題

です。最近、国際化ということが盛んに言われていますが、いま重要になってきているのは、国と国との関係ではなくて、国民相互、民族と民族、人種間でどうつき合い、協力していくかという問題です。国際というより、民際、民族際、人種際ですね。生活慣習や宗教の違いを乗り越えてということだけでなく、資源や生産物の分配問題をも含めて、世界的規模で社会生活をうまくやっていく方法をみつけなければなりません。

最後に、国際秩序の維持システムをどうするかです。冷戦構造と呼ばれてきたもの、またそれ以前のシステムに替えて、上記三つの課題を解決しつつ人類が共存していくのにふさわしい国際秩序をどのように構築し、維持していくかという問題です。

現在の推移をみながら、本当にこれらの課題が解決されるのかと考えると、ペシミスチックな気分にならざるをえない面もありますが、少なくとも解決の見込みが立たないことには二十一世紀における人類の安泰を展望できないのではないのでしょうか。

内田 香山先生はどのようにお考えですか。

## ●重要なことが三つある

香山 私は学校法人の代表としてではなく、研究者・教育者としての立場から、大学に焦点を合わせて自由に意見を申し上げたいと思います。二十一世紀の世界・社会・大学というものを考えるときに、最低三つ重要なことがあると思います。

第一は、御前先生も言われたことですが、地球が急速に小さくなってきたために生じた変化だと思えます。我々がこれから教育しようと思っている世代は、ますます小さくなる地球の上で活躍してもらわなければいけないと思うのです。

学習院大学は新渡戸稲造先生が一八八四年に留学されました、ジョンズ・ホプキンス大学と提携校の関係を結んでいます。新渡戸さんはちょうどいまから一〇八年前に留学されて、『武士道』という本をお書きになり、日本の文化を紹介するという仕事の先駆者となりました。同時代のクラスメートにはウィルソン大統領がいらっしゃいますが、「我願わくば太平洋の架け橋とならん」という言葉を残されたわけですね。

ボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学

みさき すずむ氏



へまいましたる際にも触れたことですが、時差があり、しかも直行便が飛ぶようになりましたから、いまや成田を出発した日時と大差のない時間に向こうへ着けるようになりました。つまり太平洋は、もはや新渡戸さんが考えておられたような大洋ではなく、むしろ小さな湖か池のようなものになってきたのではないか。そうなるてまいますと、いままであちらこちらにあった壁が邪魔をしてくると思っています。その壁はベルリンの壁だけではなくて、いろいろなものがあると思いますが、その異文化間の障壁を取り除くことが必要になってくる。

第二に、そうなりますと、次の時代の青少

こうやま けんいち氏



年に活躍してもらうには我々が可能な限り、二十一世紀の時代の問題を予見しながら、それに必要な資質を準備しなければいけないということになるだろうと思います。そこでいままで以上に異文化間のコミュニケーション能力をもった人材を育てなければいけないということが、出てくるだろうと思うのです。大学がやはり文化センターとなって、様々な文化を横につなぎ、縦の蓄積をして、いままでと違った重要な役割を果たさなければならぬと思っております。

第三に、大学がこれから挑戦すべき課題は、従来の理論・知識・情報のストック、あるいは学問体系では対応できないような未知の新

しい問題だということです。大学は過去のストックを大事にすると同時に、想像力と創造力の二つを大切にしなければならぬ時代に入っているのではないかと思います。その意味ではさつき言われたような、政治システム・経済システム、国際関係・環境・生態系・生命とか、自然科学・人文科学・社会科学の全分野にわたって、相当のルネッサンスといえますが、あるいはリフォーメーションが必要になってきていますが、残念ながら日本の大学改革のテンポは、変化に追いついていないと思います。どうやってわずか八年か九年の間に、時代の要請に合わせられる国際競争力のある大学にするか、日本の私学の重要な課題ではないでしょうか。

内田 いま、香山先生がいわれましたのは、地球が小さくなって、ますます異文化間のコミュニケーションが重要になってくるということですね。この問題に一番先駆的に取り組んでこられたのが津田塾だと思いますが、古木先生いかがでしょうか。

●来し方を振り返る必要もある

古木 先生方のおっしゃったことに共通の

国際化とか、地球が小さくなったとかいう点については全く同感で、二十一世紀にはさらに世界との接触が繁く、深くなっていくことを想定して大学の役割も考えるべきでしょう。

西暦二〇〇〇年に津田塾はちょうど創立百周年を迎えますので、今は将来構想をいろいろ練っているところですが、こういう節目には来し方を改めて振り返る必要もあると思います。

一八八二年、津田梅子は十八歳になる直前に帰国していますが、十一年間アメリカで育つたため、一〇〇年ぐらゐ前の世界にタイムスリップしたようなショックを受けたようです。



ふるぎ よしな氏

私はアメリカの大学院に二年と、その後ケンブリッジ大学に二度、二年半滞在しましたが、アメリカやイギリスの大学から帰ってきた、日本の大学を見るたびに、似たようなタイムスリップを経験するんです。日本の大学が果たしてきた役割を考えると、です。大雑把な言い方をしますと、日本の大学が誇れるのは非常に高い水準のワークフォースをつけたということぐらゐではないかと思うのです。

言い換えれば、よきリーダーをつくったかという点、それは非常に少ないと思いますし、よきシチズンを育てているかどうかという点も大変疑問です。比較していくと、アメリカの



うちだ みつる氏

大学のほうが、よきシチズンをたくさん育てているという気がします。大学教育を受けた人の社会奉仕、環境についての意識、異人種への寛容度、政治に対する発言などにそのことが窺えると思います。

それからイギリスでは大学に行く人が日米に比べ、非常に少ないわけですが、いろいろな分野でよきリーダーをつくっているように思います。優秀な人材が大学に留まる率が高いのもその一例で、大学人として羨ましく感じる点です。一方、エリート養成に重きを置いてきたことに対する反省もあり、四十以上のポリテクニカル・カレッジを大学に昇格させようという動きがあります。二十一世紀の夢を語ろうというときに、少し水を差すようですが、日本の大学が、いつまでもワークフォースを誇るような大学であっていいののか、とまず反省させられます。

異文化のコミュニケーションに関して申し上げますと、「一番先駆的に取り組んできた」といわれると面映いのですが、津田塾は創立の背景そのものにこの課題があったといえます。その後の展開は、いわばこの課題に沿って時代に対応してきたものとみていいでしょう。

たとえば、英文学科でも、文学・語学に留まらず、一九六三年にアメリカ研究、六八年に国際関係といった専攻を設けました(後者は、翌六九年、学科として独立)。こうした試みの最近の例としては、英文学科の中にコースとしてコミュニケーションを設け、その中で日本語教員の養成も始めたことです。世間一般に文化の「入超」が反省されてきたという時勢もありますが、英語教育の長い歴史のなかで培われたディシプリンを日本語教育に生かせる、という積極的な理由もあります。つまり、コミュニケーションを両方から歩み寄り形にすることに、いくらかでも貢献できないかということです。

一方、忘れてならないことは、英語の教育学習の歴史がおよそ一世紀半になりますが、成果からみますと、まだ満足できる状態にはほど遠いことです。ちょっと前の話になりますが、イギリスの『ガーディアン』紙にこんな記事が載っていました。日本の大学には七〇〇人以上も英語の教師がいる。にもかかわらず日本人の英語は、大変お粗末な状態だということです。これは日本の大学に勤めているイギリス人が書いたものでしたが、確かに

英語や英文学を専攻している人口を考えますと、能動的にコミュニケーションできる日本人は、大変少なく、私も現状には悲観的です。こうした卑近な例をとってみても、残念ながら日本の大学が十分に機能を果たしてきたとはいいがたいですね。

---

### いま日本の大学は 次の段階に進むべきときにある

---

内田 十五、六年前になりますが、フィリピンのマニラにあります、ドウ・ラサルという大学で教えているときに、近くのある大学を訪ねて、大変親近感を感じたことがあります。大規模な大衆的な大学で、たくさんの学生がいたからです。香山先生と古木先生がおっしゃいましたように、確かに日本の大学が研究・教育の水準や物的条件の総合的ありようからみて、アメリカやイギリスの大学に比べて遅れていることは否定できません。しかし、ある意味では、それは二十世紀の日本の大学が通るべきプロセスだったのではないかと思うのです。あるレベルまでかなり広い層を引き上げることが日本の大学のいままでの役割だったのではないかという気が

します。二十一世紀に向け、外的な条件では、学生数が減ってきます。そういうことと同時に、ここまでレベルを引き上げてきましたので、いまは次の問題を考えなければいけない段階ではないのかと思います。

早稲田がよく批判されますのは、大教室に学生を集めて行う講義があるということですが、しかし学生数を各大学が減らしてしまつたら、日本全体のレベルは停滞してしまふ。ですから、ある程度は、やむを得ない条件でもあったんですね。それをあまりマイナスに評価してしまつと、次の段階が出てこないのではないか。私はアメリカで、学生数が一五〇〇人程度の大学で教員と学生がお互いみんな顔見知りでファーストネームで呼び合える大学と、大規模なロサンゼルスのカリフォルニア大学の両方の大学での講義を経験しましたが、アメリカでもいろいろ組み合わせられているのです。アメリカも大衆的な教育をせざるを得なかった側面もある。ですから、すべてを是認するという意味ではありませんが、必要な側面もあつたのではないか。古木先生が津田梅子が帰られたのは一八八二年とおっしゃいましたが、それは、早稲田ができた年です。早

稲田も一〇年を経過し、当時の建学の先達の志を踏まえながら、次の段階へ進むべきときがきている、という思いが強くなりました。

先ほど来のお話で、一つは世界との関係ですが、同時に考えなければならぬのはいうまでもなく、国内での役割です。香山先生は、異文化間のコミュニケーションという、今まで経験しなかつた問題に直面すると言われました。他方で、国内的には、二十一世紀になると、日本は世界の最高齢国になります。

これは人類史上日本人が初めて経験することです。高齢化問題は避けて通れない問題で、二十一世紀に入る前にそういう問題について学生にいろいろな経験、勉強をさせる必要があるという気がします。御前先生は、環境という問題をおっしゃいましたけれど、話を少し展開していただけませんか。

### 人類的課題の認識を土台に

御前 二十世紀における文明形成の根っことなつた価値は、自我・個人の解放というこゝとであつたといつていいと思います。今日の環境問題は、飢えとか物欲という面で自我を解放しようとした足掻きの結果だといえます。

個人主義・自由主義か、社会主義かというよな体制づくりも、支配・被支配、搾取・被搾取のような人と人の関係という面から個人の解放を追究する足掻きであつた。

このような視点から二十世紀を振り返つてみますと、二十世紀文明は、人間中心主義を基本にもつ西洋型の発想に基づいたものであつたといえるでしょう。ところが東洋には、これとは根本的に異なる発想がある。たとえば仏教は、「和」を基本において発想しますが、これは自然に対して人間を、他者に対して自己を、原点においてする発想とは原理的に異なります。「和」を追究すれば自我を抑制しなければならなくなる。そこで、「無私」が価値をもち、自我追究は「我執」にとらわれた足掻きだということになります。

ところで、先に二十一世紀の課題として四つ問題をあげましたが、それは実は、こうした人類的課題を認識することが、大学の社会的役割とか存在意義とかを云々する際の土台でなければならぬ、ということを言いたかつたわけですね。この課題を前にして、では大学が一体どのような役割を果たさうのか、果たすべきかと自問するとき、我田引水的に

なりますが、一つの帰結として、二十世紀文明の落とし子であるとも言えるこれらの課題を解決するには、西洋的な価値観を問い直しながら判断し、実践できる人間を育成しなければならぬ、という大学にとつての課題が浮かび出てきます。

昨年、大学設置基準が大綱化されて、各大学で教学理念を定めて特色化をはかれるということになったとき、龍谷大学では、この課題の追究こそ仏教系大学の使命だということ、「人間・科学・宗教」をスローガンとする教学理念を定め、建学の精神をそういう形で現代に展開していこうということになりました。こうした面での研究・教育で一定の役割を果たすことができれば、西洋中心に展開してきた世界のなかで経済大国化した唯一の東洋の国、日本の国際的貢献にも連動すると思えます。

内田 最近医学のほうで、東洋医学と西洋医学の融合の試みがありますね。いまのお話の仏教的な考え方を西洋の考え方と結びつけることもその方向での一つの課題でしょうか。そういう問題について、香山先生はどうお考えになりますか。

## 発信能力を重視した研究・教育

香山 異文化間のコミュニケーションが非常に重要になるということを示し上げましたが、その中身は非常に多種多様で、日本文化の伝統についての認識、それについての説明能力、発信能力も要求されると思うのです。それを比較して、異質なものを理解できる能力がなければ、異文化間コミュニケーションはできないと思います。そういう点では文字どおり、二十世紀末の世界の大学も日本の大学も、転換期を迎えていると思います。明治以来の日本の大学は、基本的には当時の先進国であった西洋文明の輸入と受信に主たるエネルギーを投入してきたと思います。

私学を先頭に日本の大学が転換しなければいけないのは、従来の外来文化の輸入摂取はもちろん続けていかなければならないことです。しかし、結果的に教師も外来文化の輸入業者になりがちです。学生に対しては画一的に対応してしまい、学生を受信専門に追いやつて、発信させない。ですからディベーター能力がない、発信能力がない。日本人同士であっても、異文化理解力をもった人間とそ

うでない排他的な人間の間に、激しい文化摩擦が起こりますが、これは、過渡期には避けられない摩擦だと思えます。

そういう点でいいますと、受信専門の研究・教育から、かなり発信能力を重視した研究・教育に転換しなければいけないでしょう。また内田先生がおっしゃったように、明らかに高等教育の量的拡大というのは、日本がサミットの中でナンバートゥーになるうえに貢献したのは間違いないのです。しかし、そのために支払ったコストという問題に、いま々は直面している。これからは量的な拡大という従来の惰性を追いかけるのではなく、質的な競争、つまり質の充実ということに、相当大胆に舵を切らないといけないところへ来たのではないか。質ということになると、その中にまたいろんな要素があると思います。従来の工業化と近代化の発展パターンから考えますと、人間も量産が一番低コストですから、義務教育から始まって、なるべく人と違ったことを言わない、考えない、別行動をしない人間を量産するという方向で来たと思うのです。それがこれからの時代にはむしろマイナスに働いてくる。集団とか画一性

を強調するよりも個を重視し、個性が発揮できるという条件をつくつていかなければならないと思えます。何か違うものがあると、心理的にも落ち着かないという状態は、はなはだ不健全で、これからの時代には適応できなくなるでしょう。教授会でもそうだと思うのです。違う意見が出ると、なんとなく空気がとげとげしくなるのは、もう二十一世紀にはとても通用しない教授会の体質だと思えます。(笑)むしろディベーターを楽しみ、好み、異論を徹底的に議論するようなさわやかな空気ができることが重要だと思えます。怠惰や無能が、教授会という集団の画一的・閉鎖的な壁で保護されているようではダメだと思えます。

守旧派の妨害を乗り越えて、日本の教育システムを根本から変えないと、政治的なリーダーシップも、産業界のリーダーも、あるいは我々自身が再生産している教育者も研究者も、いまのままではダメなのではないでしょうか。一種の成功の悲劇みたいなもので、いままで成功したやり方は確かに量産とか、あるいは積極的に外来文化を摂取したということによる成功なんです。逆にその成功がこ

れから命とりになるかもしれないという赤信号がついているのではないか。また、日本独自のシステムや伝統文化についての説明能力、発信能力がないという状況は、小さくなっていく地球の中で、大変危ない状況をつくってしまうことになるのではないかと心配です。

内田 津田梅子が帰国してから一〇年。いわば津田梅子がアメリカ滞在のときに考えていたことが、いまもお我々の問題です。さらに深刻なのは、国際的に経済的・学問的・社会的プレッスンがあまりにも見えないということだと思っております。そういうことに一番取り組んでおられた津田塾は、どのようにお考えになっているのでしょうか。

---

### 発信能力は姿勢の問題

---

古木 ます「個性」についてひとこと。梅子が塾を始めたときの開校の式辞に、「知性と性格の力を備え、自分で思考できる女性を育てる」と明言しています。これは、非常に小規模だったから難を免れたわけで、いまのように何千人という大学で、そういうことを目的に掲げていたら、つぶされていたであろうと

思います。個性の重視、信念をもつこと、自己表現、を女性に促す大変革的なことを言っていたわけですから。当時「革命的」であったこの目標は、男女を問わず、いまも目指すべきゴールですね。

香山先生も指摘のとおり、日本人の発信能力は大変乏しいですね。先ほどのイギリス人の記事が言わんとしているのも、このことだと思います。発信能力は俗にいう語学力だけではなく、姿勢の問題でもあります。自分の考えを話す、議論をする、といったことは大学のような場でこそ鍛えられるはずですが、これがあまり行われていませんね。発信能力がないと、個人レベルの交渉から、自分たちの文化の紹介、ひいては「国益」まで他人の手に委ねられることになりかねません。

一九九一年末、アメリカで、日本の女流作家の短編集が二冊出ましたが、どちらもアメリカのマイナーな出版社のもので、アメリカ人が選び、訳しています。口頭でも、出版の形でも、日本人が発信している分量は、情けないくらい少ない。そういうことからみても、コミュニケーション能力をつけないと、将来国際的な壁とか民族間の壁がとりはらわれた

ときに、よき世界のシチズンになれないだろうと思います。

最近、PKOで貢献、貢献といっていますが、もつと大きな貢献は平時の、様々なレベルでのコミュニケーションにあるのではないのでしょうか。そういう能力と姿勢を鍛えるということも、二〇〇〇年に向けての努力目標といえますね。

---

### 新型の学問の発展、方向

---

内田 香山先生と古木先生のお話の中に出てくる新型の学問を具体的に学問として発展させる場合、どういう方向の学問で、課題を担っていくとお考えでしょうか。

御前 香山先生がおっしゃった日本文化なり仏教文化なり、東洋や日本についての研究はなされてきたけれども、それを世界に通用するように普遍化し、発信し切れていない、という問題は重要ですね。言語学をコアにした異文化コミュニケーション学のようなものを育てていかなければならないと思います。

内田 単に、言葉ができるというだけでは不十分ですね。結局日本の文化・社会・歴史についての研究がないと話す内容がありません

ん。一番欠けている一つは、地元の研究ですね。私自身は、早稲田に四十年も通っていますけれども、早稲田のある新宿区の研究は、ほとんどありません。日本の数々の大学がそれぞれの地域を研究すれば、これは大変な日本研究になります。学問の全体の組み立てを変えなければいけないのではないのでしょうか。

いままでは、日本よりアメリカやヨーロッパのほうを勉強していました。しかし、そのエネルギーを日本の研究にもっと大きく傾けませんか、発信型の学問はできてこないのではないかと思えます。そういう発信型の学問について、香山先生はどういう構想をおもちでしょうか。

香山 内田先生がいわれたことは、非常に大事だと思えます。なぜ目が自分の大学の地元・周辺の地域社会に向かないかということは、これまで議論されていることとかかわる本質的な問題だと思えます。日本語とか日本の文化・歴史というものを絶えず比較をしながら考えていくゆとりがなくて、これまで目が西欧に向いてしまっていた。自分の属する地域社会をしつかり観察していけば、より深く理解できることが理解できないという結

果になります。

これからはどの国も、輸入したり、模倣したりしてやっつけていけるような時代ではありませんから、それぞれの現実の観察対象をしつかりと分析し、知識の本来の仕事である生産活動をしないと、流通業だけでは大学はもたないのではないかと思えます。

内田 学問を生産するということですね。

### 大学は学問の生産基地に

香山 生産基地にならなければいけないと思えます。そのためには身近なところでやるべきことはたくさんありますね。臨時教育審議会の委員をやっておりましたときに、日本の大学設置基準というのは、先進国の中で例外的で、思い切った規制を緩和する必要がありますと言いつけてまいりました。また、知的な発信能力をもった人材を育てるために、専門教育のスタート時期が、日本の大学は遅過ぎると思えます。早くするものは早くしていく。例えば、アメリカの政治を専攻したいと思つて入ってくる学生にとって、最初からアメリカの政治とか日米関係についての専門的な講座を受ける機会があることは重要ですが、他

方で、その学生にとっては、アメリカ文学を学ぶことも必要でしょう。それが文字どおりのリベラルアーツです。ところが、そうではないカリキュラムになっているものですから、それを相当思い切つて変えていく必要があると思えますし、学部、学科編成も時代に合わなくなっている点が多いだろうと思つて、そのあたりから変えていくことが、当面の二十一世紀に対する責任です。

それから、生産基地になるためには、生産能力のチェックが必要です。研究者としての業績とか、教育が本当に学生に対してきちつと行われているのかということや自己点検・評価するようなシステムを、ほかから強制されることなくつくりあげていくことです。生産には品質管理が必要なわけです。量が拡大してくる中で、大学は教育機関としても研究機関としても、怠惰に流された面があるのではないかという気がします。

内田 大学は、教授会が中心ですから、どうしても過去を背負っていて、なかなかそこから抜け切れないところがあると思うのです。古い話ですが、一九二九年にシカゴに社会科学研究棟という新しい研究室ができました。

その構想をしたのが当時のシカゴの政治学の中心のメリアムですが、異なつた分野の人が隣り合つて研究室をもつという仕組みにしました。研究室をタコツポにしないためです。

経済学・社会学・政治学・人類学といった、いろいろな分野の人が隣り合はせに研究室をもつことによつて、学問の異花受精を促すことを考えたわけです、新しい学問をつくるために。そういうのがシカゴ大学の二十世紀の中間期の学問の花盛りを招いたかと思ひます。津田塾の場合はリベラルアーツということで、割合と裾野を広くつた学問を進めておられますね。

**古木** 一つ残念なのは、リベラルアーツを学芸学部と訳されていることによる誤解がございますが、大学院を含めて学生数二五〇〇名の小規模ななかで、時代の要請に応えるよう、内容にはバラエティをつける努力はしてまいりました。私の属する英文学科を例にとりますと、一学年二四〇名の学生のために現在、英米文学、英語学、イギリス文化、アメリカ文化、コミュニケーションの五つのコースを設けております。いずれも「英語」をベースとして展開してきたもので、これから充

実させていかなければならない点もいろいろありますが、このシステムを成り立たせているのは、多分に教員の運用の仕方にあると思ひます。専任教員は一年生の基礎セミナーから大学院まで担当すること、縦の関連を認識させられますし、文化と文学、語学とコミュニケーションの相互乗り入れて、コース間の横に繋がるディシプリンを重んじるよう心がけています。

ですが、大学の紹介になりますと、学部、学科までしか紹介されませんし、「文学」と名のつく学科は急速に人気を失つていく傾向です。

### 龍谷大学の試み

**御前** その点で、私どもでちよつとおもしろい試みをやっています。深草キャンパスにある、経済・経営・法学部のどの学部の学生でも受講できる学部共通コースを設けているのです。偏差値中心に選択した学生がほとんどで、経済学をやりたくて経済学部に来たわけではないのだから、学生の興味やニーズに沿つて、主体的かつ系統的に学修できるようにしようという発想からできたものです。た

たとえば、経済学部の学生がアメリカに興味をもつなら、アメリカ経済論や経済史だけでなく、言語や政治・文学・自然環境、さらに現地実習などの履修も認め、卒業要件単位にみえてやつていいじゃないか、だが経済学部だけではそういうカリキュラムをまかないきれない、ということから始まったのです。

旧大学設置基準の制約下でしたので、思いどおりにいかない面もあったのですが、三学部と一般教育の先生方が共同して、本学で実際コースと位置づけている国際関係コース、また技能コースとして英語および情報科学コース、の三つのコースを開設しました。一九九二年度、初めての卒業生を出しました。まだ一回きりで統計としての信憑性はありませんが、追跡調査では、コース特性が買われて就職できたとみられる形跡が出ています。

**内田** 大学の入試にも問題があると思ひます。結局、科目が断片化してしまい、アメリカのことを勉強していても、アメリカ文学を読んだことのある学生は、めつたにいません。フランス文学を知らずにフランスの政治を議論する、それではとても深みのあるもの見方、考え方が出てきません。これには科目の

設置にも問題があった。それを今後、大学設置基準の大綱化の中でどう生かせるかということだと思っています。そういうことを前提にして、今度は教育の問題について、論じ合いたいと思います。

香山 デイビートの能力があり、個性をもった人間をつくるためには、量産型ではなくて、多品種、少量生産のシステムでないと無理だと思っております。しかしここまで高等教育人口が増えていますから、全部を手づくりにするというわけにはいかない。大教室でのマスプロダクションの教育と、それから小人数の教育と、両方うまく結びつけていかないといけないと思います。

もう一つは、大学が国際文化交流のネットワークのセンターになっていくためには、キャンパスが、かなりの程度ミニ国際社会になる必要があるだろうと思っております。日本の学校全体を見て、どこまでミニ地球になっているかということを考えて、そこがまだ遅れている。

内田 遅れていますね、学生も教員のほうも。

香山 教員のほうもそうですね。大学の授

業は半期制に切り替えていくべきであると私は、ずっと思ってきましたが、日米外交史を例にとりまして、日米外交史を日本の外交史の専門家が前期に講義する。後期はアメリカの日米外交史の専門家に来てもらって、彼らの目でネイティブの言語で講義してもらおう。そういう研究者の相互乗り入れについてもっと積極的に私学が先頭に立つべきであると思えます。

企業はインテリジェントビル・ブームですね。大学の建物が一番インテリジェントビルに遠いような状況にあるというのは残念なことです。学生が常時パソコン・ネットワークを利用してきたり、あるいはCNNの受信装置がついたテレビをキャンパスのいろいろなところで見ることができたり、アジア太平洋地域の国々の放送が聞けるように整備していくことも非常に大事だと思えます。

#### ミニ国際社会のキャンパス——津田塾

内田 大学のキャンパス自体をミニ国際社会にという方向を先進的に目指してこられたのは津田塾だと思っております。そういった背景で、古木先生は、大学が二十一世紀までに準備すべき新しい方向性について、どうお考えでしょうか。

古木 梅子は、プリンマー大学在学中の一八八九〜一八九二年にアメリカの友人たちの協力を得て、日本女性のために奨学金を設けましたが、そういう先例も幸いして、塾では学生の留学を促したり、海外で学位を取った教員を採用したり、というようなことになり早くから行ってきたと思います。学生や教員の海外との交流が他の大学でも盛んになってきたことは喜ばしいことですが、意外に遅れているのが国内の大学間の交流とか、情報交換だと思っております。ネットワークを生かした情報の交換や人的交流が、もっとフレキシブルに行われるようになればいいですね。

国際化を叫ぶのに、各大学は村単位というところがあるのは、とても残念です。いざれ望ましい交流ができるかと考えた場合、逆に大学の個性を尊重するということですが、さらに大切になってくると思います。近年ファッションの流行のように、いろいろな大学で「国際」とか、「文化」とかという名のついた学科が設けられてきましたが、画一化の印象を受けますね。それぞれの大学が伝統に根ざし

た分野を究めていくなかで交流してこそ高度の交流になると思われませんか……。

### コミュニケーションとのかかわり

**内田** 龍谷大学は滋賀県の瀬田で、コミュニケーションと結びつきを基礎にされた大学づくりをされたと、うかがっています。コミュニケーションとのかかわりをもった大学づくりという点で、どんなことを基礎に置かれたのでしょうか。

**御前** 滋賀県と大津市の誘致を受けて瀬田キャンパスを開設する際に、地域交流センターをつくってほしいという要望があったんです。どういふものをつくろうかといういろいろ協議した結果、一九九二年四月、REC(龍谷エクステンション・センター)を発足させました。産・官・学の共同研究と教育開放の拠点と位置づけています。一九九三年度中には専用ビルを建設することも決まっています。

やり始めたばかりですが、さっそく成果をあげた一例があります。産・学共同研究で、金属とダイヤモンドをくっつける技術を開発したのです。世界的な評価に値することらしくて、担当した先生方が外国に講演に回った

り、新聞で大きく取り上げられもしました。

**内田** 最後に、いい残したことが、おっしゃっておきたいことがありますね。

### 二十一世紀のキャンパスづくり

**香山** キャンパスのことですが、二十一世紀の大学のキャンパスをイメージすると、人の面では外の社会よりはるかに様々な文化・民族を背景にする人たちと出合える場であることが一つ重要な点だと思います。もう一つは、急速に十八歳人口が減少していくという状況の中で、高齢化が進んでいきますから、同学齢層だけが、しかも日本語だけをしゃべって集まっているというのではなく、多様な世代が一つのミニ社会をつくっているというように、積極的にもっていく必要がある。これは単に十八歳人口減少に対応するための経営戦略ということだけではなくて、大学の社会的使命といえますか、責任が生涯学習にまで大きく広がってきたと思うのです。これまでは量的拡大に対応するのに精一杯で、社会的な生涯学習への需要というものは、もっぱら大学外のカルチャーセンターが吸収する形だったわけですが、大学が本格的に乗り出し

ていかなければならない分野だと思えます。環境としてのキャンパスは、現状よりも文化の香りや、風格ある緑のキャンパスをと、学習院ではいっています。

**内田** 学習院は都内で一番そういう特徴をもっていますね。

**香山** 伝統文化の遺産を個性として發揮していかなければいけませんから。しかし今後改善していかなければならない点は、緑がただ量的に多いというだけで不十分です。例えば、ある場所には日本庭園的な風雅があるとか、ある場所は国際林の性格をもたせるとか工夫が必要ですね。

また、研究機関としての役割は、いままでよりもっと重要になってくると思います。学習院大学の場合には東洋文化研究所が戦後造られ、これがアジア太平洋地域研究で地道な成果を上げてきています。箸を使っているエリアが経済発展しているといわれている中で、国際政治のレベルでも市場経済のレベルでも東西文化の融合が必要で、そういった研究機関を重視しながら、知的ネットワークを組むことをやらなければいけないのではないかと。

古木 私も生涯教育について感じるところがあります。ときたま五十歳近くの女性が学部学生として入ってきます。息子二人が大学に入ったから今度は自分が、というわけで普通の受験生と同じ試験を受けて入ってくるんです。ケンブリッジには主にそういう中年で大学にはいる、または復学する女性を受け入れるカレッジがあります。

公開講座でも「女性学」などは大教室が埋まるほど人が集まります。また最近、板橋区で日本語教員を養成する講習の受講者を募ったところ、定員の十倍を越す応募者があつたようですが、これも中年の女性が多かつたそうです。もつと社会とかかわりたい、もつと新しいものを吸収したい、という元気な中年の女性が大変多いんですね。そういう欲求を満たすという意味でも、香山先生がおっしゃったように、大学がそういう人たちを取り入れて多様化・活性化を計り、開かれていくべきでしょうね。

アメリカのキャンパスでは、あらゆる年齢の人が、勤めるかたわら、あるいはある時期仕事をやめて大学に戻るといふことをしており、出入りが自由で、学生も刺激を受けます。

地域との自然な連帯も生まれる。そういうメリットもありますね。

### これからの研究のあり方

御前 今後、二十一世紀の課題や社会的ニーズへの対応を意識した改革が進むことになると、どうしても新しいテーマが追われがちになると思います。そのなかで、古いタイプの研究と言いますか、現在では売れっ子にならない研究を、どのように保護し残していくかということが非常に大切な問題だと思えます。

私自身は、教育プロジェクトとしての研究会を盛んに行い、そういう研究者にも参加していただくことがよいのではないかと考えています。そうすることによって、新奇を追わず一事を深く究めることから得られる洞察力を教育に反映させられるし、他方では自分の研究を、現代の課題や学生のニーズに結びつける目をもってもらえる。そうでないところ、そういう研究は研究者の好みだけで行う世離れしたものとなり、研究者というよりマニアになつてしまうのではないのでしょうか。教育を考える場では、社会や学生のニーズを配慮し

ないわけにはいきません。

内田 今日のお話を整理させていただきました。まず、発信型の学問といえますか、創造力を持った学問を目指した大学、それが一つの二十一世紀へ向けての課題。それから、そのためには大学自体が個人的な大学でなければ、つまり、お互いがまねをし合っている、学問がダイナミックに発展しないということですから、そこで、個性ある大学づくりというのが二番目の課題かと思えます。三番目は、いまの変化の中で国際社会にどう対応するかというところですけれども、その場合に大学自体が国際社会であるべきだということです。四番目は、最後に議論いただきました地域社会との関係です。単に地域と結びつくというだけではなくて、成熟した地域社会と、最近のはやり言葉ではありますが、共生する大学が特に高齢化との関連で、二十一世紀へ向けての課題ではないかと思いました。

全体として二十一世紀へ向けての大学の宿題がかなり明確になり、また展望が開けてきたのではないかと思えます。どうも長時間ありがとうございました。

(一九九二・十一月二十五日 私学会館)

米学生援助総額三〇八億ドルに

米大学協会の調査によると、一九九一年度の学生援助は総額三〇八億ドル、前年度より七・九％増となっている。資金別内訳と受給者数は別表のとおりであるが、援助額は大学経費と同率で増額したものの、所得収入の増加が不十分のため大学での就学費用負担は容易でない。不況のせいもあって奨学金希望者が増えており、対応して受給者もペル給費金は前年度より一八％増となったが、支給額は一四〇ドル減少した。

これに対し貸費奨学金は受給者が四％増、貸与額も四十九ドル増えている。

八〇年代を通じて学生援助の資金源として増え続けているのは大学自身からの援助である。九一年度は前年度より一〇％増の六十億ドルに達し、学生援助全体に占める割合は一〇％から二〇％へと飛躍。一方、連邦政府分は八二％から七四％へと落ち込み、州政府分は六％と変わっていない。

(The Chronicle of Higher Education 一九九二年九月十六日号より)

'92—'93年度米大学就学費用

一九九二—九三年度の米大学学費は州立大が一〇％、私立大が七％それぞれアップをみた。物価上昇率は九二年九月現在、前年度比三％増、寮費等を含めた平均就学費用は別表のとおりとなっているが、資料は米大学協会への二一—一大学からの回答に基づき、各大学の学生数に応じて加重平均されている。

(The Chronicle of Higher Education 一九九二年十月二十一日号より)

米大学学生援助資金内訳

(1991-92年度)

種別	金額	構成比
ペル給費金	52.4億ドル	17.0%
連邦政府大学プログラム補助	20.3	6.6
連邦政府各種貸費金	137.2	44.6
復役軍人奨学金	9.1	2.9
その他連邦政府補助	9.5	3.1
州政府奨学金	19.3	6.3
大学等奨学金	59.9	19.5
計	307.7億ドル	100%

米大学奨学金受給者・平均交付額

(1991-92年度)

種別	受給者数	1人あたり平均交付額
ペル給費金	4,027千人	1,302ドル
学生貸費金	3,854	2,761
大学等勤労学生補助	841	940
連邦政府教育機会補助給費	728	570
連邦学生補助ローン	670	2,915
連邦パーキンスローン	660	1,248
連邦父兄ローン	348	3,234
州政府奨学金	1,648	1,210

米4年制大学学費上昇率推移

年度	公立	私立
1982-83年度	+20%	+13%
1983-84	+12	+11
1984-85	+8	+9
1985-86	+9	+8
1986-87	+6	+8
1987-88	+6	+8
1988-89	+5	+9
1989-90	+7	+9
1990-91	+7	+8
1991-92	+12	+7
1992-93	+10	+7

(注)1987-88年度より学生数によって加重平均。

米4年制大学平均就学費用(寮生)

(1991-92年度)

費目	公立	私立
授業料・諸費用	2,315ドル	10,498ドル
書籍・学用品	528	531
寮費・食費	3,526	4,575
交通費	497	487
その他	1,205	936
合計	8,071ドル (6,473)	17,027ドル (14,621)

(注)①合計欄のカッコ内は、通学生の場合、主に寮費と交通費の差による。  
②公立の州外からの学生は、授業料が平均3,668ドル加算される。

# 私立大学における広報活動（総論）

／甲藤 善彦（立教大学就職部長）

はじめに

「私立大学における広報活動」について書けという編集者からの急なお達しが、電話で休日の自宅に届いた。

私が広報課に籍を置き、大学の広報業務に携わったのは一九七七（昭和五十二年）年から一九八五（昭和六十年）年に至る八年間で、すでにその業務を離れてから約八年が経過した。

この間、大学を取り巻く環境も大きく変化したし、大学内においても様々な「改革」が行われてきたので、私は課された「命題」を論ずる資格にいささか欠けるとは思うのだが、日ごろ考えていることを三点に要約して記し、私大連盟への責任を果たさせていただくこととした。

## 一 望まれる正当な位置づけ

「高度情報化社会」といわれる現代、広報活動を大学の重要な機能として認知しない連盟傘下の大学人は、昨今、おそらく皆無ではあろう。

しかし、大なり小なり「恥の文化」と「儒教倫理」の影響を受けつつ暮らしてきた同胞が、教職員の多数を占めるわが国の私立大学において、広報活動に対する正当な位置づけがなされているかどうかを改めて考えてみると、残念ながら必ずしも樂觀は許されない。

「広報」というまでもなく「宣伝」とは異なり、その果たす役割は「大学の内実や将来計画を正確に広く知らせること」といえよう。したがって「何を、どのよう



に、「どこへ」知らせるべきかを十分に吟味し、姑息な手段を用いず、大局的な立場で昂然と実行されなければならない。

ところで民主教育協会誌『IDE・現代の高等教育』が、「大学の広報」を特集したのがいまからちょうど十年前、一九八二（昭和五十七）年のことであった（三三三三号）。

その編集後記には「大学にとってまさに未開の分野である、広報問題をとりあげた」（傍点筆者。以下同）と記されている。確かにこの時点における「大学の広報」に関する文献は、私の知る限りにおいては徳永清氏の『大学広報入門』（ジャーナリズム出版会）、土橋俊一氏の『慶應義塾における広報活動』（慶應義塾大学職員紀要）ぐらいしか見当たらなかった。

そして文部省が大学入試センターと共催して、全国の国公私立大学入学広報担当者呼びかけて「大学入学広報セミナー」を初めて実行したのが、一九九〇（平成二）年十一月のことであった。同セミナーの「開催趣旨」には、次のような一文が掲載されている。「大学における情報提供の必要性を周知するとともに、進学志望者や高等学校にとって有用かつ、良質な情報提供を行うことができるよう質的な面での向上を図ることを目的とする」

右の論断からすると、大学は進学志望者や高等学校に十分な情報を提供していなかったし、ましてや有用かつ良質な情報を与えてこなかったということになる。これは大学に

とって由々しき問題である。

私のような私大信奉者からすると、「官尊民卑」の体質を温存しながら文教政策を推進してきた文部省が、一部の国立大学を除く官立高等教育機関の衰退現象に歯止めをかけようと、躍起になって「良質な広報活動を私大に学べ」という運動を展開しているように思える節もないわけではない。

いずれにしてもわが国は、文教政策上も、大学の広報活動に対する正当な位置づけを、少なくとも昭和の時代まではないがしろにしてきたきらいがあるといえよう。

一方、それぞれの建学の精神を掲げ、「親方日の丸」とは、いかに私立大学は、高学歴志向の風土にあって「新制」の高等教育機関として自立するために、学園紛争に象徴されるような大学経営の「危急存亡の秋」を乗り越えてきた。その過程において、おのずと広報活動にも力を注いできたわけであるが、大学財政悪化による「ない袖は振れない」実情の中で、広報予算の重点配分などということは、残念ながらもならなかったこともまた事実である。

さて、間もなく二十一世紀。私立大学の構成員たちは一部に残存する「広報は大学の副次的機能」という考え方を払拭して、改めて「広報は大学を大学たらしめるための第一義的機能」という考え方に立つことが望まれよう。

「私立大学における広報活動」が、「第一義的機能」とし

て、正当に位置づけられんことを切望してやまない。

## 二 原点はホスピタリティ

「何を、どのように、どこへ」広報するかという課題に対しては、それぞれの私立大学がその理念・規模・校風等の違いによって、取り組み方に異なりがあるであろう。

そこで私の考える大学広報の対象や目的について記す前に、いわば「広報の心」とでもいおうか、広報活動を行うに際しての「姿勢」について私見を呈しておきたい。

昨年十一月三十日付読売新聞朝刊は、一九九二年度も開催された前記の「大学入学広報セミナー」に触れて、『宣伝』に終わらない大学情報を」と題する記事を掲載している。そして「セミナーでも一致したことだが、今後は『広告宣伝からの脱皮』を目指すべきだろう」「どんな学生がほしいのか、どう育てていくつもりか、きちんと伝わるようにしてほしい。大学にはその責任がある」と結んでいる。

しごく当たり前のこうした指摘がいまさらなされるゆえんは、どこにあるのだろうか。

結局のところ、広報の受け手から見ると、大学の広報活動全般に対する不信があるということであろう。このことは、まず謙虚に自戒すべきであると思う。

大学人が「こんなことまで知らせなければ理解できないの

か」、しかたがないから知らせてやる」式の権威主義に墮していたり、「百里の道も遠しとせず」式の旧態依然たるエリート幻想に支配されていたり、あるいは内容がさしたる価値をもたないものを「目立つように誇大に伝える」式の宣伝主義に侵されていたりしたのではないだろうか。

すなわち、大衆化した現代の大学にあつて、広報すべき対象者のニーズを誤認したり、「広報の心」「姿勢」に本来内在必なければならぬはずのホスピタリティの大切さに気づかずに、文字どおり「暖かく親切にもてなす心」「歓待の精神」に欠けていたりしたからではないだろうか。

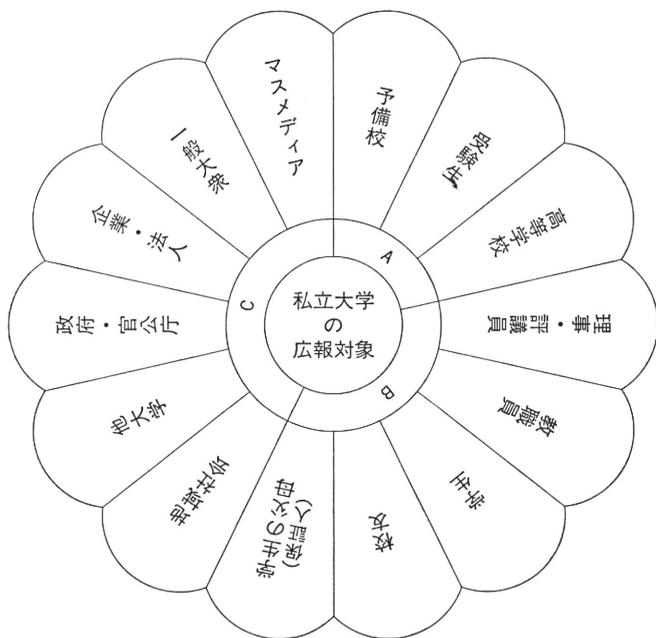
「何を、どのように、どこへ」を検討する前提には、当然にも「なんのために広報するのか」という基本的立場、言葉を換えていえば「広報のアイデンティティ」が確立されていなければならぬはずである。

そしてその原点に、私はホスピタリティという概念を据えるべきであると思うのだが……。

## 三 対象と目的

私立大学に在職する人間として、私はその広報対象を、一般的に見て次の図のごとく考えている。

A群に属する対象は、いうまでもなく進学志望者である。したがって当然にも、「受験生」の中には「社会人入試」志望



者、帰国子女や日本国籍をもたない進学志望者が含まれる。

B群に属する対象は、いわば「身内」の人たちであるが、私立大学の「没個性化」が指摘されている現在、UI（ユニバーシティ・アイデンティティ）の確立のためにも、学内や校友会活動活性化のためにも、十二分に大切にされなければならない対象である。

C群に属する対象は、「学外支持者」として大学への支援を期待したい人たちである。

これらの対象には、ことに就職、募金、新学部・学科の設立、冠講座、人的資源の活用と採用、国際学術・学生交流、大学間の切磋琢磨等々、大学のステイタスを向上させるために、ぜひとも協力を仰がなければならない人たちが含まれている。

私は図示した十四の花弁(広報対象)が、どれを欠いても大輪(大学の社会的評価)は咲かない(成就しない)と思っている。

なぜならば、大学の社会的評価は、入試の偏差値に代表されるような一面的評価ではなく、相乗作用によって得られる総合的なものであり、したがって大学の特徴や内実、新企画等を、あらゆる機会に、あらゆる場所で、あらゆる方法で、これらの広報対象に周知させることが、大学のレーゾンドールを決定すると思うからである。

広報の目的は、ひと言で言うところ、「大学の正当な理解と評価を得るための活動」と言えよう。

# 学生向け広報活動の現状と展望

—— 本学広報紙『早稲田ウイークリー』『新鐘』の紹介を中心として

／今井 半 (早稲田大学学生生活センター事務部長)

本大学を構成している教職員・学生及びこれをバックアップしている校友の数は、およそ次のような数になる。

- ・教職員数約三六〇〇人(非常勤講師・臨時職員等を含む)
- ・学生数約五万一〇〇〇人(大学院学生・高等学校生徒等を含む)
- ・校友約三十九万人

このような大世帯になると、広報活動により相互の意思疎通を図ることは、必要であるとともに、大変難しいことでもある。とりわけ学生数が五万人を超えたとすると、これはもう、一つの大都市といって言い過ぎなら、小さな街といってよく、ましてや、キャンパスがいくつかに分散しているとすると、相互の意思疎通を図ること

はますます難しくなってくる。大学から学生への情報の伝達は、その方法・内容・タイミングなどに工夫を凝らさないとよい効果は上げられない。

学生の履修等に関する情報は、その中で最も大切なものの一つであるが、これらは各学部において、主に掲示板を通して行われている。学生はこれを見落とすと、履修・卒業等にかかわる重要な情報を失うことになりかねない。しかし、これらの情報は重要ではあるが、事務的であり、面白みに欠けることは否めないであろう。

このような情報のほかに、学生に知っておいてほしい情報、学生が知っておいたほうがよい情報、知っているのと得をする情報など、様々な形で情報があふれる。例えば、大学内にどのような事件があったか、いまどういこう



とが起こっているか、どのような催し物があるかなどである。このような情報をより多くの学生に、的確に伝えていくためにはどうすればよいか、学生向け情報紙のキーポイントといえよう。

大学が広報の対象とするのは、教職員・学生・校友・学生の父母・受験生・卒業生を採用する会社等・官公庁・近隣住民及び一般社会人など多種多様である。この中で対象として特に重要なのは、いうまでもなく教職員と学生とであり、次いで校友及び学生の父母ということになるだろう。現在、本学では、これらの人々を対象にして、主に次のような情報紙が発刊されている。

・教職員……『CAMPU S NOW』（広報課発行）、『カレント』（広報課発行）、『早稲田フォーラム』（教育研究助成課発行）、各種「研究所報」（各研究所発行）など。  
・学生……『早稲田ウィークリー』（学生生活センター発行）、『新鐘』（学生生活センター発行）、『らいぶとびあ』（図書館発行）、各学部発行の「学部報」など。

・校友……『早稲田学報』（校友会発行）など。  
・父母……『早稲田ウィークリー』（父母号）など。

しかし、これらは大学の中で発行されている情報紙（印刷物）の中でほんの一部に過ぎない。ちなみに、本学において定期的に発行されている印刷物（学外・学内向けすべてを含み、学生が発行しているものは除く）は、ざっと二一〇種類にも上っている。

本稿では、この中の学生を対象とする情報紙のうち、学生

生活センターを発行箇所とする『早稲田ウィークリー』（以下『ウィークリー』と略す）と『新鐘』について紹介しようと思う。

### 『早稲田ウィークリー』について

一九六六（昭四十二）年、本学において、一五〇日に及ぶいわゆる「第一次早大紛争」が起こった。これは、学費改定、第二学生会館の管理・運営問題に端を発するものであった。この紛争を契機として、大学と学生とのコミュニケーションを図りたいとの考えから、当時の村井常任理事（後、第十代総長）より、学生向け広報紙を発行させよとの指示があった。同年三月二十日、校友課（いまはない）を発行所として、『早稲田』（『ウィークリー』の前身）が発行され、四月五日に第二号、四月十一日に第三号が発行され、学生向け週刊紙として地歩を固めていった。本紙が『早稲田ウィークリー』と紙名を変えたのは一九七三（昭四十八）年である。

創刊号一面のトップ記事は、「学園の今後の課題——大浜信泉総長 村井資長常任理事に聞く——」というインタビュー記事であった。この中でインタビューが——このたびの紛争について総長の所信を述べていただきたい——という質問をしているが、これにこたえて、大浜総長は次のように述べている。「今回の事態は、大学の歴史上の一大不祥事といわなければなりません。大学としては大きな犠牲を払ったわけですが、他面、学ぶべき点、反省を要する点も少くないと思います。早急に真理探究の場、最高の教育の府として社会的

使命に照らして、反省と再検討の上、改善すべき点は改善につとめ、ふたたびかかる事態を招くことのないよう万全を期したい」

第二面以降は、「学生諸君、父兄の皆さんへ」という見出しで、各学部の学部長が今回の紛争について、それぞれの立場からの考えを述べている。

二号・三号についても、「これからの諸問題(1)・(2)——各学部長に聞く——」と題して、今回の紛争についての各学部長の考えが披瀝されている。また、二・三・四号には「当面の課題(その一〜三)」として、今回の紛争に関して、大浜総長の考えが述べられている。

これらの見出しを見ればわかるように『ウィークリー』(当時は『早稲田』)は、まさに「第一次早大紛争」の落とし子ということがいえよう。

『ウィークリー』は今年(一九九二年)末で、発行回数六八四号を数えている。今年度になってからすでに二十四号が発行されているが、それらのトップ記事の中から主なものを拾ってみると、次のようになる。これらを見ると、まさに世の移り変わりを大学の中にも感ぜざるを得ない。

- ・学部学生のための海外夏期プログラム 今夏に実施、現在応募受付中(第六六二号)
- ・文学部キャンパスに新しい「顔」 戸山図書館オープン(第六六四号)
- ・著名OB・OG迎え大盛況!! '92ワセダ・カルチャー・トーク(第六六八号)

・緑を守れ 大自然の中で植林活動(第六七一号)

・バルセロナ五輪代表決まる 校友含め、ワセダから11人

(第六七三号)

・「グルメ」な企画が盛り沢山 もうすぐ早稲田祭! (第六七九号)

・平山郁夫氏へ名誉博士の学位(第六八〇号)

・二十一世紀の東京はこうなる!? 都市の新しいパラダイム  
理工・尾島研究室(第六八二号)

『ウィークリー』は、毎号一万五〇〇〇部刷っている。このうち学生が持つていくのは、推定約八〇〇〇部くらいであろう。編集担当者に聞いてみると、いかに発行部数を伸ばすかということについて、なかなか苦労も多いようだ。五万人の学生に対して八〇〇〇部(二六%)は、まだまだ伸びる余地があるはずである。そのへんの事情をもう少し詳しく探ってみると、①現在、各学部事務所のカウンターやラウンジ、図書館等学生がよく出入りする場所に置いているが、置き場所を少し変えただけでも伸び率が違ってくる。つまり、発行部数の伸びは置き場所にも関連する。②大学からの「お知らせ」的なものが多くなると紙面が面白くなくなるため、伸び率が落ちてしまう。学生の興味をそそりそうな企画を立てるのにけっこう苦労する。連載ものなどを取り入れて、定着した読者層を確保するよう努力している。③掲載記事に対して、各箇所からの要望と編集者との間に乖離が生じ、あとで記事の扱いが小さいなど、不満をぶつけられることがある。

④発行が週刊というのは、専任職員が編集しているとけっこう多忙である。また、ワセダにかかわる出来事・事件などは一般の新聞などに出る場合も多いので、それを記事にするとの間の抜けたものになってしまう。⑤大学発行のものであるので、企画の内容や記事が硬くなり、学生にとって面白くなくなるということもなってしまう。

学生が手にとりやすいものを作るため、編集担当者は日ごろから知恵を絞っている。当センターとしても、編集者にてきるだけ若い専任職員をあて、その周りに学生職員を配し、彼らの意見を十分吸収できるような体制をとっている。

### 『新鐘』について

『ウイークリー』とは別に、学生・教職員などを対象とした学園コミュニケーション誌『新鐘』も、学生生活センターから発行している。これはB五判雑誌形式の情報誌で、大学を取り巻く多くの人々の『交歓の場』として、読者に親しまれる学園誌を目指している。創刊号は一九六三（昭三十八）年五月一日で、『ウイークリー』より歴史は古い。創刊号の編集後記に、『新鐘』発行のいきさつが次のように述べられている。

「学生部には、学生生活課と奨学係があって、学生諸君に通知すべき事項は、その都度、掲示板によって通知しているが、事項が繁雑なため、文書報道の必要性が痛感されていた。そこでその方法として『学生部便り』の発刊が企てられたのであるがしかし伝達事項のみを印刷・通知するのは、

余りに無味乾燥なので、その外に、学生生活に関する記事を豊かに盛り、教授と学生との交歓の場を提供してはどうかということになり、当初、計画していた広報的なものをやめて、学園誌的なものに拡大されることになった。（中略）

学園には、三万余の学生が学び、公認サークルのみでも、一三九を数え、これが他に類例をみないほど、多彩にして旺盛な活動を行っている。われわれは早稲田教育を考える場合、これらのサークル活動の意味を不問に付することは許されない。しかし従来、これらの活動は他に余り知られることなく、放置されていたが、この小誌の発刊を機会に、これらの現況を学友諸君に伝え、サークル活動の推進に役立つことを願っている。（後略）」

さて、このような動機により発行された『新鐘』（創刊号）の内容はどんなものであったろうか。その目次によってこれを見てみよう。

論壇 解放の方向……………栗田直躬（文・教授）

随筆 学生の健康管理……………佐口卓（商・教授）

私生活 私の学生時代……………星川長七（法・教授）

思い出すままに……………国分保（文・事務主任）

考えることなど……………谷資信（理工・教授）

座談会 日本の山々と自然美

わけだかいわい

学生の会

学生にすすめたい本

大学便り

中南米三国の印象……高橋昭子（文卒・東急航空勤務）  
早大総合教養講座案内

学生部より

創刊号は二十一ページであり、当初年一回発行であったが、しだいにページ数が増え、軌道に乗ってくると、最多ページ数は一五〇ページ前後になることもあった。そのせいか、一九八七（昭和六十二）年発行の三十六号から年二回の発行となり、ページ数も八十ページを最多とするようになった。

『新鐘』最新号は、一九九二（平四）年に第四十六号が発刊されたが、その内容を目次で見ると、次のようである。

特別寄稿

大学が変わる時／井沢元彦（七七年法卒・作家）

ワセダの夢／森まゆみ（七七年政経卒・地域雑誌

『谷・根・千』編集人）

壇論 パソコンを使ってみると／新谷敬三郎（文・名誉教授）

ワセダ・カルチャー・トーク あっという間に四十四歳

（講演記録）／川崎徹（七〇年政経卒・CMディレクター）

青春グラフィティ 船でまわった六カ国／後藤絵里（九二年政経卒・朝日新聞記者）

CHALLENGE 大きな旅の片隅で／佐々木可織（二

文三年）

BOOKSブックス

インタビュー／ピーター・フランクル

新鐘ブックガイド・文庫で読む青春小説20冊／山村文人

（八六年・教育卒）

講演 スーダンで出会った早稲田／ムサ・ムハメッド・オ

マル（駐日スーダン大使）

OB最前線 証券マンになって今／信夫哲夫（九〇年・政

経卒）

フリー・エッセイ ああ労働露国よ／松村岳志（経研修士

二年）

ワセダ・ストリート

『新鐘』の編集にあたって、いくつかの問題点が指摘される（そして、これらの問題は多くの場合、『ウィークリー』における問題点とも一致する）。

①編集委員会が有効に機能していない。現在は、学生生活センターの編集担当者が企画したものを、各学部の学生担当教務主任（または副主任、いずれも教員）からなる編集委員会に検討してもらっているが、教務主任といえども、普段から『新鐘』の企画について考えているわけではないので、いきなり提案される企画案に適切な助言が得られるとは限りません。そのため編集委員会が往々にして形式的なものになってしまふ。

②『新鐘』で紹介する（特徴ある）学生を発掘すること、また、いい記事を書いてくれる教職員・学生を見つけることが、現体制では難しいこと。

③編集担当者としては、センスある学生アルバイトを使

い、彼ら（若者）の意見を聞きながら、学生（読者）の興味を喚起しそうな紙面を作りたいと考えているが、このような学生をうまく見つけることが困難である。

④『ウィークリー』とも共通する点であるが、軟らかい紙面にして学生の求めているものに近づいていくか、硬い（アカデミックな）紙面にして、学生をこちら側に引きつけていくか（両面とも必要なのであるが）、この接点を求めるのが難しい。前者に偏れば、大学発行のものとしては品位がなくなるし、後者に偏れば、学生が手にとる部数は確実に減っていく。例えば、学生に企画を出させると、「ダメな教授ベスト10」、あるいは「早大生はこんなにモノを知らない」などという企画が出てくる。このような企画を面白おかしく取り扱えば、読者層が増えてくることはわかっているが、大学発行の刊行物としてこのような内容のものはふさわしくない。

したがって、大学発行の学生向け情報誌となると、学生の興味やニーズにどの程度こたえ、しかも、大学として学生に与えたい情報・内容をどの程度盛り込んでいくかを、編集委員会の中で共通認識としてもつことが必要になってくる。そうでないと、毎号毎号記事の内容が変動し、腰の座った紙面が作れなくなってしまう。ただし、この編集方針は、世の中や学生気質の移り変わりを考慮して、何年かおきに見直す必要はあるだろう。

四、五年前に就職した先輩職員が、新入職員について「彼らは何を考えているのか全くわからない。断絶を感じる」と

言ったことがある。我々が「若者」とひとくくりにとらえている人たちの中にも、ジェネレーション・ギャップがあるのだ。このようにスピーディに移り変わる世相の中で、活字離れしていく学生を活字に引きつけながら、しかも内容が充実していて、よく読まれる紙面を作るとは、並たいていのことではない。よく読まれる興味本位の内容と、ぜひ学生に読ませたいコクのある内容という、この矛盾した要素にどう整合性を与えていくのが、今後の大きな課題であろう。

本学のように大学が大きくなると、大学の伝えたい情報を的確に教職員や学生に伝えることは、なかなか難しくなってくる。編集者にすら伝わってこない情報があるのだから、無理からぬことである。一方、各箇所においても広報について工夫を凝らしている。このような全学的情報（本学の場合、定期刊行物だけでも二一〇種類に及ぶ）を編集者が把握することは不可能である。このようなことを勘案すると、全学的に見て効果的な広報活動を行うためには、全学的な視野からの「広報検討委員会」のようなものを設置し、そこでの検討が必要になるのではないか。

年間二一〇種類を超える情報が飛び交う本学において、それらをすべて収集している箇所がないというのも問題である。まず、このへんの対策から始めて、先に述べた「広報検討委員会」（仮称）の設置、そこでの大学の広報のあり方の検討、このような動きの中から適正な広報のあり方の展望が開けてくるのではないだろうか。

# 校友向けの広報活動を考える

／室谷

道義

(関西学院総務部校友課長)

はじめに

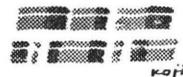
大学の最近の動向の一つとして、募金事業や、校友(以下同窓の意味)・父母を中心とする保証人等を対象とする業務体制見直しへの関心が高まっている。この背景には、大学を取り巻く厳しい経営環境への一種の経営戦略的意図すらうかがえる。ここでは、このような背景を踏まえながらも、大学と校友の関係を大学の行政とのかかわりの中でとらえながら、校友向けの広報活動について考えてみたい。

大学と校友

大学の評価は、教職員・学生だけでなく、校友を含む

これらすべての活躍の総和で決まるものである。最近、各大学において自己点検・評価制度設置への動きが散見できるが、大学に対する社会からの評価の要因に、卒業生への評価が占める比重は大変大きいような気がする。

日本の場合、大学と校友の関係は、主として校友会(同窓会)組織を通じて行われる場合が多い。その協力のあり方は、校友会活動の事務局機能を大学の行政組織の中で大学が直接分担する大学と、施設などに限定した援助関係にとどまっている大学(この場合でも、大学組織の中に校友担当部署を別に有する場合とそうでない場合がある)等に大別できよう。大学と校友の関係は各大学の歴史と深く関係しており、そのあり方も異なり、校友の規模も数千名の大学から数十万名に及ぶ大学まで様々であ



KOJI

る。いずれにしても、大学が維持・発展される限り、社会における重要な大学の支持基盤になりうるはずである。もし大学間で格差があるとすれば、本来は、他大学との比較においてどれだけ独自性を主張し続けているかということになるのであるが、残念ながらごく特定の大学を除いてはそうでないのが、今日の私立大学の状況である。むしろ、大学が日常の活動視野の中で、校友との協調関係維持・拡大にどれだけ積極的に努力してきたか、ということがはるかに比重をもつ。このことは、校友に関するデータの把握率やデータの保守体制、広報活動のあり方とも大いに関係している。

最近、記念事業等への寄付金依頼の体験談の中で、校友からの意見として、「四年間在籍しただけで一生寄付につきまといられるのは不愉快である」というたぐいの話や、逆に、利用できる場所があれば大学に取り入ろうとすることさえあるという話を聞く。これらの事例は、校友のロイヤリティ、大学の魅力とサービスのあり方、さらには大学における教育・研究のあり方等への一種の問題提起とも受けとれる。校友にとって大学とは何かという問いかけに対して、どこまで大学は明確に応えられるであろうか。年々増加する校友が大学に強い関心を持ち続け、気軽に大学に立ち寄れるような環境と、校友本人やその家族の人生にとって大きなよりどころとなれるような風土を醸成するというあり方が、今日大学に求められているのではないか。

### 本学における校友課の誕生

関西学院は、一九八九年に創立一〇〇周年を迎えたが、募金担当事務局として財務部に募金課が設けられた。この募金課を受け皿にして、日常の教育・研究等振興資金のために募金事業を行う教育振興会業務、保証人・保護者で構成される後援会業務、一般寄付業務等いくつかの担当部署に分散していた業務、及び全くいまままで統一的な窓口がなかった校友に関する業務、その他まだ手がつけられていない事業活動に関する業務等を分掌的に束ねた形で、総務部に校友課が一九九一年七月に新設された。設置の趣旨は、創立一〇〇周年記念募金事業の体験を通して、学院がいまままで気づかなかつた貴重な経験やデータ等を、さらに今後に生かしていこうということである。

特に校友に関しては、これまで学院として一元化した窓口もなく、同窓会はあくまで外郭団体であるというように、大変割り切った見方が支配的であった。校友課誕生からわずか一年六カ月、校友を視野に入れた行政はほんの一步を踏み出した程度であるが、校友の学院への関心は好転し始めたといえる。ここで、本学の校友向け広報活動の現状の一部を事例として紹介する。

学院では、校友向けの機関誌の発行は同窓会の本部事務局で行っており、学院自体その手段を有していない。同窓会で

は春・秋二回に分けて『母校通信』を発行し、従来、春号は新入会員を含め校友全員を対象に、秋号は終身会費納入者に限定して配布してきた。ページ数は予算の関係で特別な場合を除き、広告を含め約三十七ページ未満で、このため学院の動向に関する記事の掲載はごく少数に限られ、しかもタイムリーな効果は少なかった。創立一〇〇周年記念の募金事業を機に募金課が窓口となり、同窓会の協力のもとで、『母校通信』（春号）のページ数を約五十ページ余りに増し、約半分のページに学院の動向と、募金事業への協力記事の掲載とその手続き書類の同封を行うことになり、封筒のデザイン新や、封入・封緘及び郵送経費を学院で援助することになった。同窓会では、春号で余った予算を秋号に投入してページ数はそのまま校友全員へ送付する方針をとった。こうした関係は、校友課が設けられ一段と強化され、今日では広報室が学院側の記事を提供している。同窓全員が対象となったので、学院の情報のみならず、校友データの保守が進展するというメリットも生じている。

『母校通信』以外にも、学生団体発行物も含め各種広報誌や機関誌を校友課で入手・選定し、校友の集いや会合を対象に、学院グッズの援助とともに、宅配便で送ることも日常化した。その数も四月から十二月まででダンボール箱二〇〇個分を超えている。また、学院が抱える課題や推進中のプロジェクトに関する資料パネル（写真や図説）やビデオ等も活用

している。これらの方策に併せて、教学や経営の責任者をはじめ、できるだけ多くの教職員を校友の集いやイベントに参加するよう働きかけを行い、人的交流による直接訴える広報活動の展開も手づくりで推進している。

今後の課題は、校友の情報を入手し、それを通じて学内の活動が校友の活動と連帯し、活性化するような関係をつくり出すことが期待されている。

### 校友と広報活動

校友向け広報活動といっても、目的により種々なものが考えられる。マスメディアを利用する場合、効果も大きいが経費が高いため、常時とはいかない。しかし校友を通してスポンサーを紹介してもらうとか、マスコミ関係で校友の支援が得られるならば、大学のアピールしたいことを取材という形で紹介してくれることもある。大学が単独では実現不可能な企画やイベントも、各業界に顔がきく校友がいれば、ときとして可能となる。校友を介し、大学が社会とうまくかみ合うわけである。そのためには、校友データの把握率やその保守体制への大学のかかわり方は重要である。

校友データの活用にあたっては、データの更新と保守の面では利用する回数が多いほど、その内容が正確になる。しかし、校友のデータは量的に規模が大きいため、郵送費を含む経費の問題は広告掲載対策を含め考慮する必要がある。その

ため、定期的に校友全員を対象とする機関誌を広報活動の基礎に置くべきである。こうした方策に加え、校友の各種会合やイベントの日程に合わせ、そのときどきの大学の情報を人的交流に合わせてタイムリーに提供していく。教職員の参加や、必ず教学・経営の重責にある人の出席も配慮すれば、会合も盛り上がり、次回に好影響を与えよう。

ところで、高等教育の大衆化、教育機会の多様化が進展した結果、大学教育の優位性が薄らいだといえる。また、建学の当初から独自の建学の精神を掲げ、特色ある教育・研究活動を展開してきた私立大学も、時代が変わり社会情勢の変化に伴い、創設時の気風が薄れ、あるいは特色を失ったとの批判が多くなり、高等教育の量的繁栄に大きな役割を果たした私立大学は、皮肉にもその存在の意味さえ今日問われている。校友の大学に対する思いや関心は様々であり、建学の精神の受け止め方も少しずつ変色する。創設期の校友の母校愛と今日のそれとは大きな差が見られる。また、人生八十年といわれるように、大学で修得した知識や技能が一生を通じて人生の支えになる時代ではなく、生涯にわたって補強し、学習しなければならぬ時代が到来している。

大学が、校友にもう一度共通の今日的基盤を再構築できるような働きかけや、校友の生涯にかかわる学習プログラムを提供できれば、大学・校友双方の協調関係は、一段とグレードの高いものになるであろう。

今日の校友向け広報活動は、校友の大学への関心を高め、ややもすればその財政的支援の取り付けに走りがちであるが、もう少し掘り下げて考えれば、校友を大学行政の視野の中で意識することを通じて、校友にいつまでも大学の魅力を持続させるといふ具合に、大学の新しい創造に影響を与えるような広報活動が、これから求められるのではないか。そのためには、校友会活動で蓄積されているデータを基に、校友のデータベースを築き、一種の校友システムによる大学と校友の間にネットワークを整備し、これを利用して大学・校友双方の情報往来させながら、大学構成員と校友相互の人的交流・相互支援を推進し、さらに社会に独自の根を大きく下ろした大学の経営支援システムの育成が大学行政に期待される。

## 結 び

圧倒的に学内を視野の中心に置いてきた大学の広報活動が、校友を視野に入れるとき、大学の實力が試されることになる。独自の個性の回復を求められている私立大学の新しい大学づくりを、校友行政とともにどこまでバックアップできるかは大きな課題である。これからの大学経営は、その組織力が大きな比重を占める。校友行政や広報活動も組織の縦割りが見え、大学にあって、どこまで横断的に学内協力を引き出せるかが、その成否を左右するといえよう。

# 教学改革に根ざした学生募集広報

／東 勇吉（法政大学広報課主任）

## はじめに

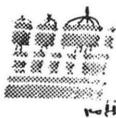
いままきに入試シーズン。大学関係者、とりわけ入試広報の担当者にとっては、志願者の応募状況が気がかりで胃の痛みを感じながらの毎日ではないかと思う。一年間の広報活動の成果が試される時である。

しかし、学生募集広報活動のよしあしが、志願者数の増減に本当に関係するのだろうか。よい広報活動・悪い広報活動というのがあるのだろうか。学生募集広報はいつごろから行われ、現在どのようなことが展開されているのか。そして、構造的な日本の人口動態（若年者人口の減少・高齢化社会）、国際化、急速な科学技術の進歩という新しい時代の転換期において、これからの学生募集広報活動はどのように変わっていくのだろうか。これらについて以下に見ていきたい。

## 学生募集広報の歴史と現状

学生募集広報といっても、単に受験生や高校教員を対象に入試にかかわることだけを行うのではなく、大学の教育内容、施設、学生生活、就職など大学のすべてについて知らしめる活動を指すのが一般的である。そして、それは受験関係者だけでなく、在学生・父母・卒業生・一般社会など、総合的な広報活動をすることによって、学生募集に効果的に反映される、ということはいままでは常識となっている。

しかし、この常識とて二十年前には存在しなかった。それまでの学生募集活動は、入試日程の告知を新聞に掲載するとか、受験雑誌にわずかの広告をする程度であった。進学相談会の前身である「私立大学展」が初めて開催されたのが昭和三十九年と聞いている。学生募集広報



を専門に行う部署もなく、庶務課や学生課などの付随的な仕事だった。

昭和三十五年には約二十一万人だった大学・短大入学者が、平成四年には約七十九万人と三・七倍にも膨れ上がった。高校卒業生の大学志願率は二六%から五一%へと上昇。

いわゆる大学大衆化の時代である。このような中で、国公立大学では、共通一次試験の導入、大学センター試験への移行、分離・分割試験の実施とたび重なる入試改革が行われた。このような、猫の目入試改革は、コンピュータの発達により大量の情報処理が可能になったことによるが、受験産業の模擬試験でもコンピュータが活躍、「偏差値」という怪物を生み出すこととなった。受験校の輪切り、大学の序列化現象をもたらすことになる。そこへきて十八歳人口の急減である。「大学冬の時代到来、サバイバルだ」と広告代理店や受験産業が自分たちのサバイバルをかけてはやしたてる。このような状況を背景として、学生募集広報活動に拍車がかかる。いまではほとんどの大学に広報課・入試センターといった学生募集広報業務を専門とするセクションがあり、大学経営の戦略基地と位置づけている大学も少なくない。大学間競争は、国公立・私立を問わず熾烈になるばかりである。

広告も、従来の新聞・雑誌からラジオ・テレビ、電車・駅、電話・ファクシミリとあらゆる媒体を使うようになった。

受験雑誌は広告の氾濫で、学習記事や受験情報記事が少なく、受験生にそっぽを向かれています。売れないから広告で発行するという悪循環で、自ら墓穴を掘っている感がある。受験雑誌のほかに週刊誌・一般誌はまだしも、漫画や少女雑誌への広告掲載も最近の傾向としてある。広告対象が受験生ばかりでなく中学生・小学生といった低年齢層への移行も顕著である。

進学相談会への参加も入試広報活動の大きなウエートを占めている。以前、九州の進学相談会に参加したとき、地元の人々に、「法政大学なんか、こんなところまで生徒集めに来なくてもいいんじゃない」と言われ、進学相談会は「生徒集め」としかとらえられていないんだということを改めて知らされたことがあった。相談会は、受験生や高校教員と直接会って、大学の正しい情報を提供する好機であり、地方の受験生に対するサービスの一環でもあると考えているのだが。

全国各地で開催される相談会のほかに、大学独自の学内相談会を行うところも多くなった。ここでは、個別面談や入試担当教員からの勉強アドバイス、模擬講座、在学生からのアドバイスなどと、それぞれに趣向を凝らしている。志望校の学風を肌で感じられ、施設・設備を自分の眼で確かめることができる、受験生には好評である。

浪人生が減少し現役生が中心となる今後の受験生動向を反

映して、高等学校訪問を活発に展開する大学が多くなった。

広報・広告形態も多様である。校風の似た大学による連合広告、地域ごとに作っている大学広報組織による連合広告などもあるが、各大学独自の広報・広告活動に重点が置かれている。創設して間のない大学は校名をアピールする、硬派なイメージの大学は女子学生の確保に力を注ぎ、校名を変えたり、学風とは相異なるようなポスターや大学紹介パンフレットを作成し、イメージの刷新を図ったりしている。

なかでも、入試制度改革を行い、受験生の確保に努めている大学が多いのが目につく。受験科目数の減、複合受験、同一学科の複数受験、地方試験の実施、大学入試センター試験の導入など受験科目・受験機会の複数化の工夫をしているところ。公募制推薦・一芸一能・自己推薦・スポーツなど推薦入試の拡大などなど、アラカルト・ユニーク入試と、百花繡爛といった状況である。

### 入試広報の目的・効果

入試広報活動は、本来、大学の教育方針と一体となって進められなければならないが、生徒集めを主眼とした、広告や印刷物、入試改革のほうが先行しているきらいがないだろう。入試広報の目的としては、志願者数の増加を図ることが一義的にはある。それは私学としては財源的にも当然のこと

と言えるが、それ以上に、学風や教育内容を知ったうえで、その大学で学びたいと思っている学生を受け入れるための広報活動が重要ではないかと考えている。

広報や広告をすることで、その効果というものはたしてあるもののだろうか。

昭和五十五年のことになるが、法政大学で奨学金留学生制度と夏期海外研修セミナーの制度ができ、ことあるごとに、国際交流プログラムの広報を行ったことがある。当時はまだ「国際」のついた大学や学部もそう多くはなかったこともあるが、某社が行った五十七年のイメージ調査では、「国際交流の盛んな大学」の一位に法政大学がなった。最近の調査ではずっと後位にあることからすると驚異である。一つの例ではあるが、広報・広告はそれなりに効果は大きい。大学は学問の府であり、真理探究の場であるから、内容に偽りがあってはならない。教育内容や教育方針をありのまま積極的に知らせることは重要なことである。

最近の広報・広告活動で感じることには、大学の個性や特色が見られない、ということがあつた。どの大学も似たようなパンフレットを作り、似たようなキャッチコピーを駆使しているように感じる。「国際化」「情報化」「二十一世紀」などが最たるもので、外国人教師が二名いれば、「国際化」している大学というのもある。このような画一的な広告の主な原因

は、外部業者任せで原稿作成や印刷物発行をしていることか  
らくる弊害のような気がする。

また、効果的な広報活動は、広報担当部署だけで済むので  
はなく、教員を含めた全学的な意思形成の中で進められなけ  
ればならない。そのための、広報委員会の設置やユニバーシ  
ティ・アイデンティティ（UI）活動を積極的に推進してい  
る大学も少なくない。対象を無視して学内の評価だけを気に  
した広報誌の作成や、独りよがりの広報・広告をなくすため  
にも必要なことと言えよう。

### これからの大学と学生募集

いままで見てきたように、各大学で多種多様な学生募集や  
広報活動を展開している。いくつかの問題点はあるとして  
も、ありとあらゆる知恵を絞っているのが現状である。これ  
は言うまでもなく、構造的な十八歳人口の減少を背景として  
いる。平成四年度の二〇五万人をピークに急減し、今年の零  
歳児が大学受験を迎える平成二十二年には一二万人と、八  
三万人も減少する。志願率や進学率がいままで以上にアップ  
し、臨時定員増分をカットしたとしても、現在の大学・短大  
がそのまま存立するには絶対数が不足することになる。

進学率が上がればそんなに心配することはない、と楽観す  
る向きもあるが、七〇%以上の進学率になると、相対的な大

学の質の低下を招くことになり、高等教育・大学のあり方そ  
のものを根底から考えざるを得ないことになる。そのため  
に、いまのうちから質の高い学生を確保し、レベルの維持に  
努めている大学も多い。

学生募集広報や入試改革を、志願者の増減という現象面だ  
けでとらえてはならない。広報活動や入試改革は、教学改革  
の一環と位置づけることが大切である。よい学生を集めるた  
めには、中身の濃い、よい教育をしなければならぬ。もし  
てそのことが満足度の高い就職となり、卒業生の社会での活  
躍が大学の評価につながる。

教学改革としては、時代に即応した学部学科の創設、既存  
学部学科の見直し・統廃合、大学院教育の充実、カリキュラ  
ム整備、教員スタッフの充実、講義・授業形態の見直し、な  
どが主な柱となろう。

このほかに大学を活性化させる方策として、資格関係科  
目・講座の充実、生涯教育の推進、公開講座等による大学の  
開放、スポーツや学生課外活動の強化、女子志願者の進学増  
をかんがみて女子に好まれる大学づくりなど、魅力ある大学  
づくりを積極的に進める大学こそが、二十一世紀において  
も、公共性と永続性を勝ちとっていく「大学」として残って  
いると言っても過言ではないだろう。

# 一般社会向けの広報活動

—量より質への転換を—

大石 準一（関西大学教授）

大学の広報活動について論ずる前に、広報という概念の定義、広報と広告の違いなどについて考えてみる必要がある。

## 一 大学広報の原則

広報という言葉は、もともと第二次世界大戦後にわが国に導入されたPR (Public Relations) の訳語として登場した。一九四七年に、当時の連合軍総司令部(GHQ)が、わが国の民主化政策の一環として中央官庁や地方自治体に対してパブリック・リレーションズ・オフィス(PRO)の設置を指示した。しかし、わが国の各官庁では、初めて耳にしたパブリック・リレーションズという言葉が理解できず、地方によって様々な名称の組織が

誕生した。いわく広報課(室)・報道課(室)・広報(公)聴課(室)といった名称がつけられていた。このようにして、まず官公庁から導入されたPRは、一九四七年に広告代理店・電通の夏期講習会において、その機能や役割が紹介され、経営政策や経営哲学の一つとして、広く民間企業に採用されるにいたったのである。

PRの定義を『PRの手引き』(日経文庫)から引用すると、「企業、政府、組合などの組織体が顧客、従業員、株主などや一般大衆との間に健全かつ生産的な関係をつくらうとする活動で、自分をまわりの環境に適応させるとともに、自分をまわりに説明するものである」としている。そして、この対話関係は、相互交流(ツーウェイ・コミュニケーション)の原則に立ち、公共の利益と真



実性に裏打ちされたものでなければならぬのである。広告と広報は、この三原則の点で大きな違いがある。

広告が情報の一方的な流れであるのに対し、広報は自己とそれを取り巻く人びととの対話関係を重視し、諸環境の変化をいち早く施策に反映させることが要求されるのである。また官公庁であれ企業であれ、その存在には社会的責任があることを自覚し、公共の利益に合致したコミュニケーション活動でなければならぬはずであるが、広告についてはその基準が甘いと言わねばならない。さらに、真実性に裏打ちされた情報であることも広報の大原則である。都合の悪い情報は流さず、有利な情報だけを流す広告との大きな違いはこの点にある。

アメリカにおける近代的PRの創始者であり、PRをビジネスとして確立したことで有名なアイビー・リーは、一九〇六年に「原理の宣言」を公表している。彼は、公衆に企業活動の正確な情報を伝えることの重要性を強調して、ペンシルバニア鉄道の事故に際し、それまでは事故が起きるとその事実をひた隠しにすることが通例であったのに、記者団を現場まで連れてゆき、すべての事実を公開することでPRに成功したと伝えられている。

大学広報においても、このPR三原則、つまり「相互交流」「公共福祉」「真実」に基づくことが要求されよう。もしこの三原則に一つでも欠けるものがあれば、それは単なる広

告活動であると思なすことができる。

## 二 大学広報は入試広告に偏っていないか

最近の各大学の広報活動は確実に拡大し、多様化してきた。国・公・私立を問わず、ポスターや広報紙誌、大学や学部紹介のパンフレット、ビデオや映画などはごく当たり前、新聞の全ページ広告やテレビの集中スポットも珍しくはなくなり、その費用たるや莫大な額に上るものと推測される。しかし、そこで訴えている情報や表現を見ていると、ほとんどが美しいキャンパスに最新の機器が整備され、学生たちが楽しそうに授業や課外活動に取り組み、まさにレジャーランドをそのまま映し出しているものが多いのに気づく。

十八歳人口の減少で冬の時代を迎える各大学が、受験生の確保に懸命になっていることは理解できるが、ホテルかアミューズメント・センターと見まがうばかりのキャンパスで、楽しそうな学生生活を送っている姿をアピールすることで受験者数が増大したとしても、それで大学の社会的使命が果たせると言えるだろうか。企業のマーケティング戦略をそのまま借用して、大学マーケティング論を展開する意見もある。企業が採用しているコーポレート・アイデンティティ(CI)を借りてきて、ユニバーシティ・アイデンティティ(UI)を検討し、シンボルマークやシンボルカラーを設定した大学もあるようだ。

確かに、これまでの大学にはマーケティング論的観点が見え落していたことも事実である。経営は理事者側の責任で、教員のあずかり知らぬことである、学生が理解できようができませんが、自分の論理だけを展開して授業を終わるといふ教員が存在することも事実である。企業が顧客のニーズをもとに商品を開発し、多くの販売努力を積み重ねてそれを販売し、アフターサービスにも努めるといったマーケティング活動には、見習うべきところが多い。しかし、企業のマーケティングと教育機関である大学のマーケティングが同一であつてよいはずがない。

大量生産—大量販売時代の申し子であるマーケティングのテクニクをそのまま大学に適用し、受験生（顧客）確保のために美しいキャンパスや楽しい学生生活といった表面的な情報だけを流していたのでは、真の大学広報とは言えない。PR三原則に基づいて点検するならば、広報ではなく、入試広告と判断することができる。これまでの大学広報のほとんどは、この入試広告に偏つていたと考えるのは私だけではあるまい。

### 三 大学の本質は教育・研究にある

一般に大学の評価は、入学試験の偏差値によることが多い。偏差値の高い大学はよい大学であり、低い大学はよくない大学と評価されるのである。こうした風潮が偏差値による

輪切り受験の弊害を生み、多くの批判を受けていることも事実である。収容能力に限界のある現在の日本の大学では、入学希望者をすべて入学させるわけにはいかず、なんらかの方法で受験生を選抜しなければならぬ。優秀な学生、将来伸びる可能性をもった学生をいかに選抜するかに、各大学は様々な方式を採用してきた。入学試験の成績という唯一のモノサシだけでなく、推薦入学や一芸入試の制度、外国人学生や帰国子女・社会人などを異なったモノサシで入学させる制度の採用等、多様な選抜方式が採用されてきた。

しかし、いかに優れた学生が入学したとしても、大学四年間に十分な教育が行われなければ、大学の社会的責任を果たしたことにはなるまい。大学の本質が「教育・研究」にあることに異論を唱える者はいないであろう。この教育・研究の現状を一般社会に広く知らせることが、大学広報の使命なのである。私立大学にはそれぞれの建学精神があり、学風がある。また、それぞれの専門領域で研究を続けている教員スタッフが、一定のカリキュラムのもとで大学教育を行っている。こうした各大学の教育内容や特色を、多くの人たちに認識してもらうことが大切なのである。美しいキャンパスや楽しい学生生活をアピールし、イメージやムードで受験生を集める時代は、そう長くは続くまい。大学冬の時代に生き残るカギは、教育・研究をいかに充実し、それを多くの人たちにアピールすることである。

#### 四 キーマンをつくる広報活動

では、具体的にどのような手段で、どのような人たちに広報活動を展開すべきだろうか。大学広報の目標とすべき対象は、極めて広範囲にわたる。直接的には学内関係者と学外関係者——受験生やその家族、高校や予備校の進学指導の先生方、OB、企業や官公庁の人事担当者などが対象となるが、広報の概念からすると、直接的な関係者はかりでなく、一般大衆にも平素の広報活動を展開しておく必要がある。このように訴求対象を広く考えていくと、コミュニケーションの手段は多種多様であり、いま流行の言葉でいうとコミュニケーション・ミックスが必要となってくる。一般企業においても、マスメディア広告だけで商品が売れた時代は去り、様々なセールス・プロモーションやイベントをミックスさせて、激烈な企業競争を行っている。

大学広報においても、マスメディア広告や広報紙誌・視聴覚素材を中心とした活動から、人間的な触れ合いを基盤とした広報活動に転ずべき時が来たように思われる。E・カツツやP・F・ラザースフェルトによるオピニオン・リーダー研究や、E・ロジャースの技術革新(イノベーション)の普及過程に関する研究を待つまでもなく、マスメディアの効果には限界がある。商品の存在や技術革新の存在を知らせるには有効であっても、実際に購買させたりイノベーションを採用さ

せるには、パーソナルなコミュニケーションが不可欠である。志望大学を決定するという重要な人生の岐路に立ったとき、単にマスメディア広告に接しただけで決定するだろうか。ほとんどの人は、必ずや身近な人や専門的知識をもった人たちに相談したり、詳しい情報を収集して慎重に検討した末に最終結論を出しているものと思われる。この相談を受ける人たちが、オピニオン・リーダーとかキーマンといわれる人たちである。

さきに挙げた人たちは、キーマンの核となる人であるが、これだけで満足すべきではない。むしろキーマンを育て、当該大学のファンを増やしていく方策を検討する必要がある。広報活動の原点は、活字や映像といったメカニク的なアプローチだけでなく、人間的触れ合いが大事であることはすでに述べたが、具体的には、公開講座や学園祭、大学を開放するオープンハウスなどのイベントである。大学を何度か訪れたり、教職員と直接話をする経験をもっただけでも、その大学への親近感が高まりファンになってしまうこともある。まして、公開講座などで何人もの先生から専門的な話を聞けば、その大学における教育・研究の実態をよく理解することができるであろう。これこそが大学広報の本質であると考えられる。相互交流・公共福祉・真実のPR三原則を照らし合わせるのと、広告活動に偏っていたこれまでの大学広報を、原点に戻って見直す時期が到来しているのではないだろうか。

# 父母広報の視点から

川 稔 (中央大学父母連絡会事務局)

## はじめに

平成五年以降に訪れる「十八歳人口の激減」という現象は、高等教育機関の、とりわけ経営基盤に直接影響する私学全体に、様々な課題と重い責務を与えた。この機に大学の広報のあり方がとりざたされ、特に学生募集広報に話題が沸騰した。各大学は、企業の戦略広報と見まごうほどにあらゆる手法を試み、かつてない競争を強いられた。また、独自の建学の精神や校風の見直しを図り、学部改革をはじめとした、新時代に対応する魅力ある大学づくり視座が急転回している。

高等教育機関に一見、危機感を抱かせた「十八歳人口の激減」という現象は、実は大学を本来のあるべき姿へと導く福音となったのではないか。

以上の点を踏まえて、コンシューマー（消費者）の代表である在学生の父母に対する広報とその必然性について、本学の業務活動を例に引きながら述べてゆく。また、父母広報がはたして学生募集に連動してゆくのかといった点まで言及したい。

### 一 父母連絡会の創設時から今日まで

- ① 一九七五年から大学主催の「父母懇談会」を全国各地で開催する。
- ② 一九八三年から任意加入制で「父母連絡会」を発足させた。
- ③ 一九八六年七月、山梨県の父母から支部を設立したなどの要望があり、父母連絡会の組織化を図った。
- ④ 一九八七年五月三十日に、設立された二十七支部に



よる支部長会議が初めて開催された。

⑤ 一九八八年度入学生から会則を改正し、全員加入制を実施。現在にいたる。

父母の意識は徐々に芽生え、ついに八六年に山梨県で第一号の支部が誕生した。そして、八六年から八八年までの二年の間に、全国を網羅する五十四支部に急成長してゆく。

—— P Rパンフが父母広報の確かなメディアとなった

全員加入制を実施した際に入学手続き者にあてた父母連絡会の P Rパンフの表紙には、次のキャッチコピーがいかにも手招きしているかのように描かれている。

「中央大学は入学が決まったお子様だけの大学でしょうか。いいえ。入学を陰で支え、共に苦労された父母の皆様も存在意義が言い尽くされているのだが……。」

続いて見聞きにはこう記されている。

「一緒に考えましょう、学生生活のこと、そして、就職活動のことなどを。大学と父母の皆様との情報交換の場、『父母連絡会』はそのためにあります」と。

この二つのコピーを押し出した P Rパンフは、父母連絡会の内容と役割が明確に示されている点で、注目すべき広報メディアとなった。

## 二 主な事業・広報活動

次ページ表1には現在、父母連絡会でかかわっている主な事業とその広報活動が記載されている。①～⑥は、父母連絡会の会費収入(年間五〇〇〇円)を反映した事業活動である。ここでは、それぞれの活動の側面を紹介し、父母広報のあり方を探りたい。

(1) 父母懇談会のある光景——茨城県支部の場合

懇親会で軽いスキップで無心に踊る婦人に父母連絡会の役割をみた

各支部にはそれぞれの貌かおがあり、行動体系も実に千差万別である。父母の職業もまたあらゆる職域にわたっており、支部長一人をとってみても、弁護士、高校校長、市会議員、書店経営、語学センター所長、エンジニア、結婚コンサルタント、住職と、多士済々である。

茨城県支部の前々期支部長であった山口氏の職業は、いまは亡き春日八郎の前座を務めた歌手でもある。個人面談もすんで、会は懇親パーティに移り、いよいよ山口氏の出番となった。四十代以降の方はご存じであろう、井沢八郎謡うところの「清酒白雪」の C Mソングを。山口氏は、自曲を数曲披露されたあとに、この C Mソングの最終節の「山は富士なら酒は白雪」を「山は富士なら大学は中央」と巧みに替えて、

表1 主な事業・広報活動

名 称	出席者・仕様等	内 容
①父母懇談会 *92年度実施分	54支部対象48会場で開催 期間 6月中旬～9月下旬 合計5,813名出席 (出席者1支部平均70名) *大学側出張者 91名 *学長・学部長・学長室長他教職員	13時～18時の時間帯 *配布資料「父母懇談会のおてびき」等 1.大学の近況報告・講話、学生生活 2.個人面談 3.懇親会(会費制)
②就職懇談会 *91年度実施分	54支部対象42会場で開催 1～3年次生の父母対象 合計2,401名 大学側出張者 30名	13時～18時の時間帯 1.最新の就職情報等 2.個人面談等
③機関誌の発行 「草のみどり」	発行回数は年10～12回、3万2,000部発行 特集号5回	支部により、キュンパスニュース、教養 講座、学術講演、名作のふるさと、随想等
④学生教育研究 災害傷害保険加入	内外学生センターの傷害保険に一括加入	正課中の事故が原則
⑤入会者記念品	「応援小旗」布製 8,500本作成 中大ロゴ入 「手提げ袋」紙製 8,500枚 " ロゴ入	スポーツの応援等、用途は広汎。 毎年企画は変わる。*入学時に配布
⑥支部交付金	54支部へ会員数に応じて還付する	
⑦キャンパス 見学会	年間約10支部が来校 各支部30～100名	1.講義聴講をはじめ、図書館、体育館等 の施設見学 2.記念植樹等
⑧支部への支援	各種スポーツ大会の応援、講師派遣、生涯教育の支援等バリエーションに富む 実施例 1.アイスホッケー 中大-日大の対抗戦 2.箱根駅伝競争 3.全国学生相撲選手権等	
⑨学員会(OB組 織)との連携	1.学員会主催の学術講演会の参加に対する支援 2.吹奏学部演奏会の支援 2.学員会主催ホームカミングデーの参加 3.父母懇談会、就職懇談会等への参加・交流等	
⑩その他	法人・教学を含めたすべての業務の窓口である。	

1992年12月1日現在

表2 学生生活についてのアンケート結果 調査期間1991年6月15日～6月30日  
社団法人社会経済国民会議調査

東京の近郊大学 国・公・私立大学生993人の回答から	
そうおもう一満足度	そうおもわない一失望度
1.年の置けない仲間ができた64.7%	1.スポーツで心身がきたえられた47.9%
2.サークル活動などでの交流59.8%	2.恋人ができた 47.2%
3.幅広い教養がみについた 39.6%	3.就職指導がしっかりしていた 41.4%
4.学問の楽しさがわかった 39.0%	4.わかりやすい講義がおおい 37.2%
*いずれも男子学生がおおい	

表3 第9回 日経ビジネス「私立大学広報特集」1992年7月27日号の挟み込みハガキによる回答499人の回答 (40代が42%をしめ、部・局・課長職が大半)

企業の経営者やビジネスマンは、今後の大学のありかたで、大学内部に対する要望として①国際化や情報化教育の充実②大学の個性化③入試制度の多様化等を望んでいる。

社会とのかかわりについては、①社会・企業との関係強化 ②研究成果の公表  
③リカレント教育の充実  
④公開講座・セミナーの開催が今後重要であると回答している。

「あまり・まったく重要でない」の比率が高い項目は、①大学の多角経営化  
②卒業生組織の強化  
③寄付基盤の充実  
④寄付講座の開設

大喝采の嵐となった。

そのとき会場の中央に突然、一人のご婦人が踊り出た。ラメ入りのダンスシューズに履き替えて、恍惚とスキップを踏み、曲に合わせてみごとに舞うその光景に一同しばし、啞然となったが、次の瞬間に、感激の拍手がそのご婦人に送られた。私ははっと思い、次のフレーズが思い浮かんだ。――

「父母連絡会は入学を陰で支えたご父母の皆様のためにあるのです」――頭の中で何回もこの名フレーズを繰り返し、心の中でご婦人にメッセージを送った。「とりあえず学問の最高学府に無事ご子弟を送られ、あなたの役目は終わりまします。今度はあなたが楽しむ番です。いいえ、当然権利があるのです。父母連絡会はそのためにあるのです」と。

## (2) 就職懇談会風景

北海道経済センター九階は、札幌支部主催の就職懇談会が白熱化している。

平成四年十月十日(土)、植原<sup>うえはら</sup>支部長はこの日のためにメーカーをはじめ、金融・マスコミを含めた地元有力企業六社を招聘した。世界の頂点に立った日本経済のパブルは無残にはじけていま、景気は急速に下降している。本年度開催された懇談会ほどの会場でも、将来に対する不安を反映しているのであろうか、昨年を二割ほど上回る出席者を数え、一・二

年次生の父母が目立っている。

――人事担当者が抱く大学総合ランキングの調査結果が十月にまとまった(日経広告研究所調べ、調査期間一九九二年七月八日～七月二十三日)。首都圏・近畿圏に本社が所在する上場企業八四六社の人事担当セクションへのアンケート回答である。各項目に対して、当てはまる大学名を日本国内の国・公・私立すべての大学を対象として五校を挙げ、一位から三十位までの大学が列挙されている。項目は四つに分けられているが、中央大学の評価はそれぞれ七位から十四位にランクされている。四つの項目の中で「採用したい大学」の評価では第七位(父母はすべてに一位でないとは承知しないが)にランクされており、今後の好材料となる。――

大学側の就職スタッフは、企業訪問から得た地元の最新データと、好感度の大学評価材料を携えて父母に説明することになる……。

札幌支部の就職懇談会は、役員をはじめとするご父母と、大学側と学員(OB・OGの総称)の三者の連携がみごとに結実された、最良のモデルケースである。

## (3) キャンパス見学会随想

――大学オリジナル中大まんじゅうをお土産にどうぞ

文系学部全学移転という快挙をなし遂げ、多摩地区に壮大なスケールのキャンパスが誕生したのは一九七八年のこと、空から見るとまるでロケット基地のようだと言われた。

父母連絡会の支部が多摩キャンパスを訪れるのは、年間十にも及ぶ。〇〇支部は大学のアカデミックな内容を見たいという。ECセンターから、続いて図書館を案内し、貴重書庫も見ていただく。講義も実際に聴講してもらい、勉強していただく。やはり最後は第一体育館か……。こうして、各支部の要望に応じたスケジュールを組んでみる。中央大学すべてを知っていたためには、好感度のニューソースはなんでも利用する。

ある受験雑誌のアンケートで「魅力的なキャンパスはどこ?—高校生一〇〇人対象—」で本学が一位に評価されていた。以下、東大・早大・青山学院大・国際基督教大と続く。高校の大学見学バスツアーの際、大型バスが一気に入構できる至便さにあるのか。自然に囲まれた「田舎の近郊大学」といわれてきたが、エコロジープームや自然環境問題が問われる中で、逆に功を奏したのか。

進学相談会ONキャンパスに父母をお誘いしたら、進学動機は決定的となろう。また、学部から大学院まで一貫して、同一の場所で学べる利点にあることも力説しよう。二十一世紀をにらんだ表れとして、新学部の設立・新学科の増設等ポリシーの話題にはこと欠かない。

疲れてキャンパスにたどり着くご父母へは軟らかい話題も伝えよう。三十四年ぶりに総合優勝を果たした相撲に触れる

際に、毎日新聞の読者の投稿の川柳が目に入った。

そういえばりえちゃんふんどしすぎだった——秀逸句。貴花田と宮沢りえの婚約発表が紙面をにぎわしているおり、この一句を引用して日本一を披露する。剣道・射撃、それにトレンドのサッカーは十二年ぶりの快挙と、スポーツも全般にわたって好調である。

応援団の手薄の中、ご父母が代わって応援してくださいと頼めば、即父母連絡会作成の応援小旗のCマークが花と咲くだろう。昨日電話で『草のみどり』に恋人の作り方のノウハウを載せていただけないかという相談があったが、恋の駆け引きを大学に求めているのは特別なケースではなさそうだ(表2参照)。子弟の衣(医)・食・住について触れるとき、まず学生食堂は日本一の規模とメニューの多さで食堂研究会の折り紙つきであることと、生協の売り場はデパート並みの商品がそろい、一度はご覧くださいと伝えよう。東京ドームの十八・五倍を有するキャンパスのゴミ対策に七十一名を委託し、要した経費は二二〇〇万円強であること、落とし物も年間一五四件で一〇九万円に上ることもお伝えしよう。

希代のジャーナリスト・長谷川如是閑は、一八八五年創立当時の新校舎で学び、校舎のイメージを「ルネッサンス式の赤煉瓦づくりですばらしく宏壮でもあり、装飾的でもある、立派な建物だった」と回顧している。このキャンパスにセン

スのうかがえるアメニティのある空間や、モニュメントがあればなどと、ご一行の到着を待ちわびながらあれこれと随想し、頭の中でキャンパスをひととおり歩いてみる。

たっぷり半日以上かかってスケジュールをこなし、帰路につく間際の時間に、私はこうご父母に伝える。「大学オリジナルの中大まんじゅうをお土産にどうぞ！ その味や甘からず……」と。

ご一行を送り出すと、初冬の夕暮れの空の向こうに、明年四月の開校を待つ「総合政策学部」の建設現場のクレーンが、そびえている。その日は決まって売り場からまんじゅうは消えていた。

以上、本学父母連絡会の主な事業活動の一面を紹介した。ほかに年十二回発行の出版メディア『草のみどり』を通しての情報提供がある。

そして、それぞれの事業活動の課題も山積している。

### 三 今後の課題——団魂の世代以降のご父母が台頭する時

代の対応として

東京周辺地域のご父母の数は東京都（東・西・南・北・多摩支部の五支部に分かれており、多摩支部は四三七二名に及ぶ）、千葉県一九六九名、埼玉県三〇八一名、神奈川県四七七八一名で、計一万八八〇〇名、総数二万九一四二名の実に六四・五

%を占める、これらの支部は現在最もピークであり、今後その分、減少傾向も著しい（こうした現象は首都圏に位置する大学の共通の悩みである）。父母の大学に対する関心度も年々強まってくる（例えば、入学式・卒業式に父母の出席者が年々多くなり、会場の手当てが必要となっている）。

表3 『日経ビジネス』の団魂の世代を中心としたアンケートの回答を参考にすると、東京都周辺支部に対する父母懇談会の内容も、従来の「成績の公表」や「大学の近況報告」といった単一的な情報提供だけではすまなくなるであろう。また、学生の父母の年代層も団魂の世代以降の年代（進学率一七%から三八%）が台頭し、進路（就職）への関心度も強まる中で、これらのコンシューマーは大学に対して積極的な提言なり提案をして、大学を側面から刺激するだろう。父母広報はそのとき、違った局面を迎えると思われる。

すでに次年度に向けて、首都圏を中心とした新企画を検討している。

### 四 二万九〇〇〇（学生）+二万九〇〇〇×2（父母）

+三十八万（OB・OG）の支える大学

一九九二年五月二十五日の読売新聞（夕刊）のあるコラムの大見出しで「大学版P・T・A発足」という記事が目についた。よかれあしかれ、父母会の話が載ったのは初めてで、

進学相談会ONキャンパスが発足したときもマスコミは、「青田買い」と報じた。しかし、進級や進学へのドロドロとした政策的な意図をもったPTA組織とは断じて異なるのである（前章節の「父母懇談会のある光景」をお読みいただきたい）。

父母に対する広報は、直接学費を納められた消費者（コンシューマー）ご父母への当然の報酬であり、大学が父母に近づけば近づくほど、その度合いに応じて父母もまた大学に接近する。

父母連絡会会長の池田氏は、各支部の懇談会を視察するために六カ月の間、休職願いを会社に提出するという。全くもって「中大病」である。この十一月に長野で開催されたアイスホッケーの中大対日大戦の新睦試合を実現させたのは、この中大病にかかった池田会長の情熱のたまものであった。いわば「父母」の存在は個の大学のアイデンティティの象徴であり、父母会は、個々の大学の相互に楽しく集う「ファンクラブの会」であると定義したい（マスコミはここを把握すべし）。

偏差値の高い低いといった、大学の区別などありはしない。子供の大学がどれか一つの分野で一番になれば、無上の喜びを感じ、子供の大学もまんざらではないなど合点する。そしてその思いは、父母共通の真理である。

冒頭で、父母広報は学生募集に連動するかといった命題を掲げたが、次のように結びたい。

大学が父母に対して真摯な贈り物をささげれば、父母はそ

のリアクションとして自然発生的に一人ひとりの口々から大声で大学を支援し、PRするパブリシティ集団の権化となる。大学の屋台骨を側面から支えるご父母と「ファンクラブの会」に大学が参画するのは、もはや必然的であり、そのかわり方のイロハが「大学の評価」へとつながる秘策となりうる、と言つてよいだろう。

——本学の学生数は二万九〇〇〇名で、父母の数はその二倍の五万八〇〇〇名となり、OB・OGを足すと合計四十六万七〇〇〇人となる。このスケールで大学を支えることになる。——

### おわりに

父母を対象とした組織は、ここ数年の間に増えつつあるようだ。古くは昭和二十年代に組織化された大学もあれば、昨年産声を上げた大学もある。その名称も父母会をはじめとして、父兄会・保証人会・保護者会・教育後援会といういろいろ、組織も外郭団体から大学独自のものまで多岐にわたっており、活動も様々である。しかし、組織の大小の差こそあれ、現状と将来のめどは大同小異であろう。

近々各大学に連絡をとり合つて、情報交換会を実現したいと思う。そのおりに、父母に対する広報の取り組み方もまた明らかにになると思われる。

言い尽くせない諸問題を抱きながら筆をおく。

# 大学改革と広報

／山岸 駿介（朝日新聞編集委員）

## 情報と大学研究の過疎

「大学は教育と研究の府」である、と世間も大学人も信じて疑わない。筆者も、理系・文系いずれの学問分野を問わず、この世の中のわからないことを研究するのが大学の役目だと思っている。だが世の中が複雑過ぎるのか、研究者が非力なのか、わからないことだらけである。

なかでもわからないのが「大学」で、とりわけ財政・教育・研究の分野がわかならい。この三つがわからなければ、大学があるということがわかるだけで、「大学とは何か」などとても恐ろしくて論じられない。

立命館大学が「総長の給与でもなんでも、学生が聞きに来たらすべて答える」と宣言したのは異例中の異例で

ある。

国立大学も私立大学と似たようなもので、最近公表された「東大白書」で、東大の決算規模が一九九〇年度で一七一九億円。国立大学特別会計予算額に占める割合で見ると、ほぼ五%であることを明らかにした。その割合は五年前と比較すると半減している。この数字は東大が初めて公表したもので、文部省も個別大学の予算規模など説明していなかった。

情報が出なければ、研究する者などいない。財政を例に挙げたが、研究・教育も似たような状況である。だから大学を研究する者は、極めて少ない。しかも、いま最も求められているテーマに取り組んでいる研究者は、皆無に近い。大学は自らを「研究の府」と呼びながら、足元の研究を避けてきた。大学など、そこにいる者ならわ



かる、外部の者が知る必要はないと思っていたのかどうか知らないが、現実はその形に進んできた。

その報いは、大学にいま現れている。法人化論・民営化論さえ出ている国立大学の行財政制度を改革しようにも、具体的にアイデアを出せる人がいない。自己点検・自己評価やカリキュラムの改革をしようにも、その分野の研究者は教えるほどである。経験と識見だけでこれらの事柄を処理できると大学人が考えているのなら、企業や経済の研究だって同じことで、何も税金を注ぎ込んでまで大学で研究していただかなくとも、企業や経済界に任しておけばいいということになりはしまいか。

国立大学が貧乏物語を嘆き、私立大学が私学助成の大幅拡充を世間に訴えても、情報を出さないのだから、世間はどんなに困っているのか、わかりようがない。大空に拳を突き上げて叫んでも、空気が微動だにしない。

### 大学広報の難しさ

そんな中で、大学の広報マンはよくやっていると思う。何しろわからない大学をPRするのだから、並たいていの努力や力のできることはない。イメージを手っとり早く売ろうとすれば、金がかかるのは当然でもある。

大学で入試広報や一般広報に携わる人たちに会って感心さ

せられるのは、優秀な人材が多いことだ。こうした人事配置をしているところをみると、大学の経営陣の間に、広報の重要性に対する認識が深まってきたことがうかがえる。

残念なことに筆者も多忙な身。酒酌み交わしながら大学の現実を嘆き、未来に夢をはせるほど親しく付き合っている広報マンはあまりいないので、実際にはどうなっているか知らないが、優秀な人材ほど社会や組織がつくり出す矛盾に敏感で、改革に情熱を傾けるタイプが多いものである。

しかも、広報という大学全体を見渡せるポストに身を置いていけば、なおのことではあるまいか。それだけに大学は、そうした人材を機能的に使っていく必要がある。

本来、広報とは企業では社長、大学なら学長や理事長がやるべき性格の仕事である。しかしそうはいっても、広報が苦手の学長もいるし、新聞記者はゲジゲジより嫌いだという理事長がいてもおかしくはない。また多忙な職である以上、トップを補佐して一定限度、トップの意向・方針を説明する広報マンが絶対必要なことに変わりはない。

そうであれば広報マンは、トップの分身と考えなければ仕事ができない。分身とはこの場合、できる限りトップと同じ情報をもつということである。

去年の夏、私立十七大学広報担当者研修会に参加した。最近送られてきたこのときの報告書を見て、会議での討論の要

約のうまさに舌を巻いた。この一点ですべての力を推し量ることは無理にせよ、私大広報担当者のレベルの高さは相当なものであることを改めて知った。

ここで討議された危機広報の問題でわかったことは、前述したとおり、広報マンがどこまでトップと同じ情報を共有できるかにあるということだった。不正入試とか、大学関係者が海外で事件にあったとかという問題だけではなく、通常の大学広報を充実させていくうえでも、これは必要不可欠のことなのである。大学には数多くの委員会があり、すべてに出席することは無理にせよ、主要な会議には顔を出せる体制になっているかどうか、それぞれの大学広報の死活を握っている。

### 入試広報から教育内容広報へ

上智大学の武内清教授は、大学広報の流れを、最初は施設・設備を充実してそれを広報する時代から、イメージを売り出す時代になり、いまは大学の研究とか教育内容を充実して、それを訴える時代になってきたと見ている（大学入試センター「これからの入学広報」）。

筆者は、現在という時点でいえば、施設・設備・環境のPRも、校名を変更したり、タレントやヌードをポスターに使うイメージ広報も、入試を変えてその異色さを訴える入試広

報も、すべて混在し、大学は何を訴えれば効果的なのか、どこに重点を置くべきか、確信がもてない状況の中で試行錯誤を繰り返しているのではないかと見ている。

その中で、新聞など活字メディアが積極的に取り上げたのは、入試広報の分野だった。入試改革を求めめる社会的な背景があり、学生集めに効果的なのがわかった大学側の熱心な取り組みもあって、入試改革をめぐる報道は、その大学のイメージアップに貢献した。

だがこの数年、あらゆる手を使い展開された入試改革は、どれほどの実りがあったのか判然としないままに、幕引きの時期を迎えている。そして入試改革にとって代わり、新たに登場してきたのが、文部省の大学設置基準の改正によっていや応なく取り組みだした教育内容の改革、とりわけカリキュラムの改革である。

ただこれが、大学広報にとってどれだけ効果的な素材になるのかは未知数である。しかし十八歳人口の減少に伴い、大学が変貌期を迎えているだけに、教育内容の改革をどうアピールしていくかは、重要な問題であることは間違いない。

### 教育内容を伝えられるか

教育内容を伝えることは、実はベールに包まれた大学の身を伝えることを意味する。大学の入り口や環境のよさを広

報するのと違い、大学が裸にならなければ難しい。よさも悪さも明らかにされて初めて世間が理解できるという性格のものである。したがって、大学がどこまでこれに取り組めるか、外部の者が考えても、その難しさは容易に想像できる。

教育内容を改革しましたと、大学案内のパンフレットにカリキュラムを載せる程度のことを考えているのならなんでもないが、それでは社会に向けて伝えたことにはならない。その大学の欠点はどんなもので、それを改革するためにこんなプログラムを作りましたといわなければ取材しても書きようがない。実態の分析が的確で、苦勞して作った改革案がユニークでドラスティックなものだとわかったときに、初めてその大学のイメージアップにつながる。

多摩大学は「勉強しない者は退学させる」ということで、世間に広く知られた。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスなどの学生による授業評価など、教育内容からむ大学改革の報道はすでに始まっているが、まだ序の口である。取材した者の立場で反省しても、まだ報道自体、底が浅い。入試改革の報道と違い、教育内容の改革を伝えることはかなりの知識と表現力を必要とするのである。

マスコミは大学の出口と入り口しか報道しない、といわれて久しい。中身の問題を伝えることは情報過疎の問題だけでなく、いまの日本のマスメディアの実態からいっても難しか

った。しかしこれからは、そうはいかない。我々も努力を迫られるし、大学の側もマスメディアに書かせるよう仕向ける必要がある。

その場合、予想される問題がいくつかある。一つは、現在の大学を説明する資料を大学は用意しなければならぬ。例えば「東大白書」のようなものである。個別大学だけでなく、大学全体、あるいは学問分野ごとの状況を説明できるものも必要になる。

改革をするのは個別大学だが、それが他の大学と比較してどうなのか、同じような動きはこの大学にあるのか、それを解説・評価できる人や組織がいる。入試改革では受験産業がやってくれた。大学にそうした力も組織もなかったからである。教育内容の改革では、そんな恥ずかしいことはやめにしてはどうか。

ではどうするか。それは大学が考えることだが、いまのようにならぬ大学が出す大学改革の資料すら一カ所に収集し、閲覧できる体制になっていない状況では無理な注文かもしれないが、日本の大学改革の状況をどこで把握し、だれが解説できるのか。

大学研究の貧困さをいつまでも引きずっていることは、大学の明日のためにも得策だとは思えない。大学広報の原点はそこにあるような気がしてならない。

## 理事長に就任して／佐波 正一（国際基督教大学理事長）

過日、孫の通っている小学校の手工芸展覧会を見る機会があった。一年生から六年生までの作品を一堂に集めてあった。一つひとつを順に見ながら、筆者の小学校時代のころを思い出しつつ感じたことは、そのころと比べると、いずれの作品も実に伸び伸びとしており、また創意に満ちていたことである。特に一年生の画などは、大きな画用紙一面に想像力の赴くままに自由奔放に描かれており、まことに感心させられた。

日本の教育は、戦後の教育改革で戦前に比べてよくなった面も多くあるが、一面においては平均値が重視され一定のバンド幅に入るような教育が行われた結果、せつかく才能に恵まれた子供がいても鑄型にはめられ、入学試験の関所をくぐり抜けていくうちに、定型化されて創造性の芽も摘みとられてしまうというきらいがある。日本の社会は、元来がムラ社会といわれているが、現在問題になっている横並び性も、こうした学校教育が手伝っているのではないだろうか。

日本の経済が戦後ここまで急成長を遂げたのは、狭い国内市場で激烈な競争が行われ、戦争に勝ち抜くためには相手より少しでも生産性を上げる、そして少しでも早く新製品を開発する、少しでも品質を確保する等の努力が積み重ねられ、その結果として国際競争力が高まったことによるところが大きい。

一つの国で一つの業種にこれほど多くの企業がひしめいている国は、他に例がない。ある企業が新製品を市場に出すと、日を置かずに他の会社が同工異曲の製品を開発する。安くてよい商品が容易に消費者の手に入るの、それ自体悪いことではないが、国全体としての効率から考えると、首をかしげざるを得ぬ面があることは否めない。まして、環境問題や資源問題からの制約を考えると、将来とも同じ路線を維持できるかどうかは疑問である。結局は、創造性の高い技術開発を行い、他の追随を容易には許さない特徴ある技術や製品で、独特の分野を開拓するほかに道はない。



さて、わが国の科学や技術について、基礎研究の重要性が訴えられ、大学の研究環境の劣悪さが指摘をされるようになり、この面での国の予算の充実が求められているいま、大学と名のつく教育施設をみると、その数は全国に五〇〇以上もあるだろうが、これもまた横並び社会の縮図である。時代の要請や世の中の需要にこたえるといえばそれまでだが、あまりにも特徴に乏しいような気がする。

一方、科学技術の分野での国際貢献の重要性が内外から指摘されており、これはわが国の世界の中での地位を考えれば当然のことであるが、近年の海外諸国との研究者交流が、関係省庁や産業界の努力によって増大しつつあることはまことに喜ばしい。しかし、財政的側面での条件整備も必要だが、本来はわが国に優れた研究者がおり、学問的に魅力ある研究が行われ、「桃李言わざれども下自ら蹊を成す」というような状況ができることが、まずもって基本であろう。家庭・社会・学校と三拍子そろって、自分の頭で考え、自分の足で歩くことを尊ぶような教育環境をつくっていくことが重要であるゆえんである。

米国の新しい大統領となるクリントン氏は「変

化」を訴えて当選した。東西冷戦構造の解消、経済のグローバル化の進展、貧富の格差の拡大等の客観的情勢の急速な変化に対応して、米国以外でも国の施策や政治構造、企業の戦略や行動等も変革を迫られている。大学といえどもそのらち外ではない。

筆者が社長をしていたときに、社内で「スピードと感度」ということを訴えた。市場や消費者の変化を高い感度でいち早くとらえて、これに応ずる技術や製品の開発・生産をスピーディに行うべきことを言ったものである。企業と大学とはおのづから人員構成も異なるので、必ずしも同日に論ずることはできないし、ましてや理事長に就任してまだ日も浅い身には正鵠を射ぬ恐れ多分になしとはしないが、大学、特に私立大学はこれから「冬の時代」を迎えるといわれているなか、十八歳人口の変化はしばらくおくとしても、現在進みつつある世の中の変化や時代の要請に対して、はたして大学はスピーディな対応をしようとしているのであろうか。企業経営と学校経営はおのづから異なるものであるが、経営主体である理事会と教学の中心である教授会との間の意思疎通が十分行われ、経営と教学が適当なバランスのもとに運

営されている大学は、はたしてどのくらいあるのだろうか、はなはだ疑問である。

大学の中の人事制度にしても、国の人事院勧告に横並びの一律的なベースアップが行われているのが通常で、主体的な評価や考課の入り込む余地はほとんどない。企業でも、年功序列的な制度から能力重視のシステムに変わりつつあるのに比し、大学はほとんど無競争社会である。「学問の自由」という砦の中でムラ社会的になり、閉鎖的になっているのではなからうか。大学設置基準の改訂により、カリキュラムの作成の自主性や自己

評価制度等が採り入れられることになったのは一大改革ではあるが、これを生かし活力に富んだ大学にできるかどうかは、大学自身に課せられた大きな責任である。

政治・経済・技術等あらゆる面での国際化が進みつつある世の中で、どういう人間が必要とされているかを見極めながら、自らを変えてゆく自主性に富んだ努力がなされなければならない。そしてそれは、理事会と教授会の双方に課せられた問題であろう。

## 法網の中にありて／岡村 了一（明治大学理事長）

昭和三十一年に「預金等に係る不当契約の取締に関する法律」というのができた。いわゆる導入預金問題が新聞紙を騒がせたころのものであるが、その第二条あたりを一度お読みいただきたい。この罪に問われた人があって、何しろ最高懲役三年という罰則もついているので、青くなっている。本人にこの法文をよく読ませたが、全くわ

からないという。私もいく人かの弁護士が熟読してみても、明確に理解したい文章である。読み手の頭が悪いのだといわれればそれまでだが、どうも専門家でさえこの始末で、いわんや一般人が二読、三読したくらいではさっぱり理解しがたいような法律だ。こういうもので国民を取り締まろうというのは、刑法の大原則である罪刑法定



主義の根底の精神に反するのではないか、国民をむやみに綱にかけられるものだという事で、檢察官のした公訴を却下するよう求めたことがある。三十年近い前のことで、却下の申し立ては通らなかつたが、私には愉快な思い出になっている。

まあ、このような特殊の事例は別として、一読ただちに文意明瞭なもの、例えば「檢察官、被告人又は弁護人の請求により証拠書類の取調をするについては、裁判長は、その取調を請求した者にこれを朗読させなければならぬ」(刑事訴訟法第三〇五条)というように、中学生でもわかることについても難癖がつけられるという場合が最近あったが、公開法廷で裁判をするという大原則(憲法第三七条)をも思い合わせれば、立法院に身を置くものが自ら定めた法文の平等な適用について、これを不満としてたけり立つがごときその言葉や、また放映されるその姿を見ると、むしろおぞましきというようなものさえ覚えた。

いったいに近代の日本人は、治者も被治者も法規好きになってきたが、その傾向は明治以後、特に、第二次大戦後顕著のように思われる。もとより現代国家として、法治国の思想は、その重要な基礎であり、「法の支配」ということは、近代文

明社会において強い支持を受けてきた考え方である。しかし、そのことと法令がいたずらに多岐冗漫化することとは別の話で、ただいま自由先進国家といわれている国々の中で、この国のように国民を管理するための法令手段、ほとんどいたらないという国は珍しい。明治大学の先輩である故三木武夫氏や故飛鳥田一雄氏とその生前会談したことがあるが、両氏は、多くの議会人を含め国民の大体もこの状態を重視しないのは情けないことだと、慨嘆していたものである。

だいたい、日本の議会人のうち、何人が世にいわれる立法院というものの沿革なり使命なりをよく認識しているのか、はなはだ疑わしい。明らかに官僚支配の国家体制のもとで、大部分の法令規則について、ろくに異議を挟まれることもなく立案施行されていくという状況は、単に慨嘆などというよりも妙な癒着の発生を憂慮させる。国の組み立て方について再考すべき時が来ているように思う。

いずれ改憲の時も来よう。格別のイデオロギーから申しているのではない。施行のあと半世紀もたてば、どんな憲法でもひずみが生じてくる。大正期、時の帝国議会においてすら、陪審法案審議

のおりであったか、当時の憲法には地方自治の一  
文言もないことを挙げ、施行後相当年月も経たこ  
とであるしという理由で、堂々改憲論を唱えるも  
のもいた。今日的な問題としては、例えば私学の

関係では第八九条の改正は喫緊の要事であるし、  
このほか種々重要な事項があるが、私は明治立憲  
以来のわが国の実情にかんがみて、立法院の名実  
に沿う人格見識共に秀でた人材を多く集めるた  
め、議院内閣制の廃止（国会議員は國務大臣になれ  
ぬ）は、この国の歩行を正すため切実な問題であ  
ると考えている。ただいまでは政務官といえど政  
務次官だが、昔は参与官まで国会議員がなること  
になっていたので、その獺官運動の醜状は戦前政  
党の信用を落とした一つの原因ともなっていた。  
公正な予算審査、厳選された事項についての立  
法、厳正な行政府の監視ができてこそ、民選議會

の名実を兼備したものといえよう。このようなこ  
とを言うのも、欧米にその例を見ない、職業を国  
會議員である等と称して平然としている昨今のわ  
が国の状態を眺めたうえでのことである。

ところで私は昔、明大総長であった故鶴沢総明  
博士の晩年、その講義を受けたが、いまその中の  
一情景を思い出した。博士はあるとき、西哲の古  
諺を引用した。「廉恥心は法の禁ぜざるものをも  
自らに禁ず」と。法と道徳との関係から、望まし  
い理想国家像について言及されたときのことでも  
あったかと思う。

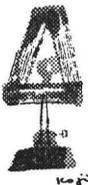
旧時代の日本人のもっていた、少なくとも尊ん  
できた廉恥心の回復こそ、いまや国人各自の努力  
目標であろう。世相今日のごときにあつては。い  
わんや教育・学問の場にかかわる者にとって、こ  
れは至高の目標の一つと言わなければなるまい。

## 心の貧しきについて考える／横井

ここ数年来「生活が豊かになったのに、心が貧  
しくなった」という言葉をよく聞きます。流行語

弘美（名古屋学院大学理事長）

のようになっていきます。もともとは、生活が貧し  
いと心が貧しくなるというのが、社会の常識でし



た。「貧すれば鈍する」とか「衣食足りて礼節を知る」という言葉があるとおりです。ところが、生活が豊かになったのに、逆に日本人の心が貧しくなったというのです。経済的に貧しいということとは確かにつらいものです。このつらい貧しきやひもじきはほとんどなくなりました。それなのに心が貧しくなっている。なぜだろう、おかしいというわけです。

この点を最初に指摘した日本人は、私の知る範囲では、東大名誉教授の大塚久雄氏です。氏は二十六年前の一九六六年十二月、東大での講演で次のように述べています。「経済が高度成長を遂げ、経済的貧困があたかも解決されたかに見えたそのとき、精神的貧困『心の貧しさ』が社会的規模で広がってきた」と『生活の貧しきと心の貧しさ』所収、みすず書房・一九七八年。

「心が貧しい」というとき、もともとの意味は、自分が人並みではない、だから恥ずかしくて人前に出られない、そのことから人間としての品位を失っているということなのですが、さらに進んで、傲慢な心、かたくなな心、学ぶ心を失っている状態、また、自己中心、損になることは決してしない、得になることならなんでもする、

自分だけよければいい、という心の状態を、「心が貧しい」といっていいのでしょうか。

ですから反対に、心が豊かだというとき、それは謙虚で、ゆとりとユーモアがあり、協調心に富む、他を思う心をもっているということでしょう。「衣食足りて礼節を知る」はずのところ、今日そうではなくなっているということです。

同じ趣旨を、ドイツのマックス・ウェーバーという有名な学者が九十年ほど前にすでに指摘しています。「資本主義の精神は、近代の資本主義文化を作り出したが、それが到りつくであろう究極のところでは、精神のない専門人、心情のない享楽人 *Fachmenschen ohne Geist, Genussmenschen ohne Herz*（『心の貧しさ』）が大量的に作り出され、人々のあいだに広がっていく」（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫）

ところで、言葉の遊びのような「ずいそう」になって恐縮ですが、「心の貧しい」という言葉を聞くと、クリスチャンならずとも、あのイエスの「山上の説教」の中の「このころの貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである」（マタイによる福音書第五章三節）を思い起こします。私は一信徒に過ぎませんから難しい神学的解釈は

わかりませんが、実はこれがなかなか難物です。なぜって、それなら心の豊かな人たちは不幸せなのかとなりますと、まさかそうではないでしょうから。

虚心になんでも素直に受け入れることのできる人は幸いである、と解釈する人も多いのですが、木村尚三郎東大名誉教授は、「心の貧しい人たちにつづいて挙げられている人たちを見れば、悲しんでいる人たち、義に飢え乾いている人たち、義のために迫害されてきた人たち、などである。すると『心の貧しい人たち』とは、心に飢えや乾きを覚え、あれもしたいこれもせねばと思いがながら、現実には満たされない思いで生きている人たち、ということになる」と書いておられる（日本経済新聞「名言の内側」のコラム、年月日を書き込むのをつい失念してしまいました）。

もうお一人、犬養道子氏は、名古屋YMCA九十周年記念講演の記録冊子『今・考える』の中で、「心貧しいというのは、ひざまずくことを知っていないということ」と述べておられる。

私は、前出の大塚久雄氏の解釈に倣って、これは心の貧しいのがいいのだということではなくて、後段の「天国は彼らのものである」から見

て、心の貧しい者も、神を信じることによって、やがては真に心の豊かな者になる可能性が確実にある、だから幸いである、と読んでいます。

生活が豊かになったといわれても、豊かになつた実感がないということも、一面事実です。でもぜいたくになり過ぎているという一面もあります。私たちの食料品の半分は輸入品です。原油など一次エネルギーの九割強は輸入に頼っています。

いまの豊かさを維持するためには、国際協調のための経費として十兆円は必要でしょうし、高齢社会に対応するのにも十兆円が必要です。大変なことです。これからは自分だけよければいいではダメで、他人を思い、他国を思う心、つまり豊かな心をもつことが強く要請されています。ただ私たちが目先の利益にとらわれて、それに気がつかないだけのことです。いや気がつこうとしないのかもしれない。



# 中京大学活性化の軌跡

— 外部情報を改革のエネルギーとして

梅村 清弘（学校法人梅村学園総長・理事長）

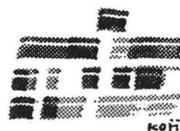
## 大学経営、私の理念

「大学冬の時代到来」が叫ばれている。本年以降、十八歳人口が減少の一途をたどる現実には、確かに私学の経営基盤を揺るがしかねない重大な事態である。そこで、「いまこそサバイバル対策を」といわれる昨今だが、私たちの受け止め方はそうした発想とは異なる。

一九八〇年、中京大学学長に就任して以来、私は学内各レベルの会議で「現状に満足することは後退に直結する。つねに十年先を見越して行動せよ」と繰り返し返してきた。気負いで言うのでもなければ、具体性を欠く夢物語として言うのでもない。大学が直面している問題は、十八歳人口減だけではな

い。現在及び将来における日本のあるべき姿、その中で大学の役割……と、全体を俯瞰し、長期的な視点に立つての取り組みが必要なはずである。編集部からいただいた本稿のテーマの一つである「外部情報の収集」は、二十世紀の中京大学をそのような考えに立つて構築するため、私たちが最重点を置いてきている行動指針の一つである。

中京大学は、一九八〇年に立案した二十年計画に従って、というよりは、当初の想定より二、三年早いペースで学部増及び研究科増、教員スタッフの充実、研究・教育施設の整備を進めてきた。その効果がしだいに現れ、志願者数は平成元年、近隣大学のトップに躍り出た。以後、その開きがさらに拡大しているのを見ると、長期展望に立った努力を重ねるう



ちに中京大学の未来へ向けての道が見えてきた、というのが率直な実感である。

そうかといって、今日のような不透明な時代に、十年先という遠い将来を予見して行動するための情報が、座して得られるものではない。教学側にも呼びかけて、私は、できる限り国内外での見聞を広め、国境を越えて人脈をもつように努めてきた。一般の事務職員についても、海外研修プログラムの学生らに毎年、数名を同行させ、視野を広める機会を与えている。これに加えて今年度は、事務職員海外研修の新しいプログラムの第一弾として四名を欧州へ派遣し、大学・研究機関を視察させた。

一昨年（一九九一年）、大学設置基準の大綱化をうたった文部省令改正以来、大学の体質批判が以前に増して聞かれる。

“象牙の塔”という言葉は、内に閉じこもりがちな大学コミュニティへの批判として存在することを忘れてはならない。以上のような認識に立っての自己革新であればこそ、ここでいわんとするところが“生き残り”を超えた次元のものであることを、ご理解いただけるものと思う。

### 八学部体制で迎える創立四十周年

梅村学園の中核をなす中京大学（八学部・学生数一万二二六八名、大学院六研究科・同一四三名）は、一九六六年以来二十

年間続いてきた四学部体制（文学部・法学部・商学部・体育学部）に加えて、一九八六年から一九九一年までに四学部を設置、八学部と倍増した。新設学部は、社会学部（一九八六年）、経済学部（一九八七年）、情報科学部（一九九〇年）、経営学部（一九九一年）で、これらの新学部の名称が示すとおり、社会の多様化、グローバルな国際化、情報化の進展、学術研究の高度化に対応するものであることは言うをまたない。

このような発展を象徴する一つとして、中京大学人工知能高等研究所に触れておきたい。産学協同を柱としてつくられたこの研究所は、本学情報科学部二十六名、他学部数名の教員に加えて、富士通、日本電装等わが国の代表的な企業の研究者四十余名を集め、共同研究が進められている。人工知能についてのわが国唯一の研究所であり、海外の研究者とも活発に交流している。

こうした流れの中で中京大学は平成六年、創立四十周年記念事業を実施する。なぜ四十周年なのか、について、中京大学の軌跡を振り返りながら説明したい。記念事業計画が浮上した一九九〇年から九一年にかけては、学長就任時に立てた〈中京大学活性化二十年計画〉の後半十年に入った節目にある。総合大学としての規模・内容の充実へ走り続けてきた前半十年は、振り返って感無量のものがある。そして後半十年の半ばに迎える創立四十周年の節目を、これまでの発展の

仕上げの機会ととらえ、二十一世紀への跳躍台とするのは自然の成り行きであり、学内にも幅広いコンセンサスが形成されている。

記念事業の中心は、現在、建築工事が進んでいる名古屋キャンパス・センタービル（地下一階・地上九階、延べ床面積約二万二〇〇〇平方メートル）である。このビルには、教室、ゼミ室、開架式図書室、AVセンター、書店、食堂等の学生厚生施設、法人本部、大学事務局、放送大学愛知ビデオ学習センター等を予定しており、さらに名古屋・豊田両キャンパスを一体化するコンピュータ・ネットワークの拠点とする方向で学内での検討が進んでいる。

中京大学名古屋キャンパスは、名古屋市東部丘陵の一角を占め、近隣の名古屋大学・南山大学・名城大学と共に、緑に恵まれたアカデミックな文教地帯を形成。地下鉄駅から至近距離にあり、センタービル完成の暁には、近未来的なデザインを備えたランドマークとして、都市景観の面からも注目を集めることとなる。

### 学長就任を機に改革断行

本稿のもう一つのテーマは、「改革のため、学内でどのように行動し、実行に移してきたか」についてである。中京大学活性化の足跡を理解していただくため、ここで一九八〇年

時点に戻ることとしたい。

一九七〇年を頂点とする大学紛争以来、中京大学は深刻な慢性赤字体質にあった。学長（梅村学園理事を兼務）に就任すると同時に、創立以来二十五年間引き継がれてきた経営路線を一八〇度転換をした。

財政が苦しい第一の原因は、あまりにも低く設定された学費にあった。窮状を打開するため、学長就任から二年がかりで、先に触れた「中京大学活性化二十年計画」を立てた。さらに、八一年四月からの学費改定に際して、『中京大学の学費について——教育研究の現状と課題』（四〇〇字×二五〇枚）と名づけた説明資料を、理事会で作った。資料は「大学を取り巻く情勢」「教育・研究体制改善の諸課題」「財政の現状と問題点」等に触れている。

以後、この小冊子をほぼ隔年に発行。原稿枚数も三五〇枚、四〇〇枚、七〇〇枚、八〇〇枚、九〇〇枚と増え、一九九〇年十二月発行のものは一三〇〇枚に達した。また、資料のタイトルは、一九八四年から『中京大学の現状と展望』とした。

この『中京大学白書』を使って、教授会・教職員組合・事務局職員を対象に、多いときには四カ月間で毎回二時間ずつ、約三十回の説明会をした。

## コンセンサスづくりへ教学側と連続会議

学長に就任した一九八〇年には、とりわけ集中的に教学側と話し合いの場をもった。四つの学部と教養部の学部長・教授らと中京大学の現状と将来展望、学費の位置づけ、財政計画等について質疑応答と論議を繰り返した。私が進行役となり、理事会・事務局側からは法人事務局長・大学事務局長・財政担当者・学務担当者らが出席。最初の二、三回は学長室で、三、四回目からは、教授会で説明してほしい、との申し入れに応じ、こちらから出向いて毎回およそ二時間ほど話し合いをした。このロングラン討議を通じて、教学側の意向・考え方を十分に理解できた。

学長時代の八年間、私は月に三十数回の会議、根回しの打ち合わせを一〇〇回前後行った。教授会・教職員組合に対して、何回、何時間、説明会を開かせてほしい、と申し入れ、納得してもらえるまで説明した。こうしたことではだいたい理事会と教学側との相互理解が深まった。

私が、石川忠雄慶應義塾大学塾長にいまも深く感謝申し上げていることがある。当時、弟光弘（現・松阪大学学長）と共にたびたびお会いした。その折、「週に一回、常任理事会で昼食をとるとか、研究科長・学部長と食事をするといいですよ」との助言を受け、即座に実行した。大学の発展期で話題

も豊富にあり、毎週食事をしながら意見を交わすので、開放的な雰囲気の中で意思疎通が極めてスムーズに運ぶようになった。

## 衛星中継実験から放送大学誘致へ

前に述べたように、一九八六年から一九九一年にかけて社会学部・経済学部・情報科学部・経営学部の四学部を新たに設置した。これらの学部新設にあたっては、教員・事務職員が先進的な近隣大学や関東・関西の大学を積極的に視察して回り、各大学からご指導をいただいた。

国内視察と併せて海外も見て回った。一九八六年から八九年にかけて、私は教員と共に、米国のマサチューセッツ工科大学(MIT)、ハーバード大学、カーネギー・メロン大学、ウイスコンシン大学、カリフォルニア州立大学、ワシントン州立大学、米国宇宙衛星大学(NTU)、ハワイ大学、IBMワトソン研究所、AT&Tベルテレフォン研究所、オーストラリアのプリズベーン教育大学、さらにはスウェーデン・コンピュータ・サイエンス研究所にまで足を伸ばした。この視察で基礎科学研究に取り組むアメリカの大学・企業の底力を実感するとともに、宇宙衛星教育の進展ぶりに目をみはった。

中京大学が目指していた情報科学部・人工知能高等研究所の設置にあたっては、理系学部をもたないこともあって、当

初、全く未知の分野へ踏み出すことについて学内に不安の声が強かった。このため、各学部を代表する教員・幹部職員、建築・コンピュータ関連企業代表の十七名からなるアメリカ視察団を編成。二週間にわたり、MIT、DEC社、カーネギー・メロン大学、スタンフォード大学、ノースカロライナ州立大学、カリフォルニア大学バークレー校等をつぶさに見て回った。このとき、コンピュータ科学の高度化、大学・企業コミュニティにおける情報化の滔々たる流れを全員が実感し、情報科学部設置についての学内のコンセンサスが一举に形成された。

この視察はその後、三菱電機、宇宙通信の全面バックアップによる通信衛星スーパーバード経由の宇宙中継実験へと進展した。一連の実験プロジェクトの中で、一九九〇年八月に米国スタンフォード大学と中京大学を国際通信衛星インテルサット及びスーパーバードで結んで行った、E・A・ファイゲンバウム教授の宇宙中継講義は全国三十余カ所に中継され、おそらくわが国でも初めての先進的な試みとして関係方面の注目を集めた。このようなパイオニア的努力が認められて放送大学愛知ビデオ学習センターが本年度、中京大学内に設置された。このセンターの存在は、社会に開かれた生涯学習の拠点としての中京大学の飛躍を、大いに助けるものと確信する。

### 事務組織活性化へ企業から人材導入

大学の事務組織は、社会からの刺激に乏しく、ぬるま湯的な環境になりやすい。学長としての改革推進の一段段として、外部の血を極力入れたいと考えた。私は当時四十二歳。中京大学創立者である父梅村清明との間には三十年の開きがあり、その間をつなぐ年代層が極端に少なかった。事務局スタッフについて、人生経験に基づくバランスをとることが必要との判断から、付き合ひのあつた新聞社・金融業界から、私より十歳ほど年長の数名を中京大学へ迎えた。その後、さらに年齢幅を広げて、三十五〜五十歳の方に鉄道・不動産・マスメディア・旅行業その他様々な各業界から来ていただいている。現在も、企業で実力を発揮してきた人、いま発揮している人材を導入し、活性化を図っている。近年は、とりわけ二十五歳から三十二歳を中心に企業から中途採用しており、これは今後も続けたい。

事務職員は以前、梅村学園の卒業生が過半数を占めていた。三割以内にせよ、と事務局に指示して、現在、ちょうど三〇%になった。同じ学園のOBには、どうしても先輩・後輩の上下関係がつきまとう。上下の関係よりも、横断的な人間関係のほうが、組織として効率的に機能すると信ずるからである。

## 事務業務のマニュアル化と電算化

学長時代に、事務部門の業務分析をマネジメント専門団体・中部産業連盟(名古屋)の助言を得て行った。これには事務部門から二十数名、管理職はほとんど参加し、延べ三〇〇時間ほどをかけて事務を分析、マニュアル化した。作業を通じて、事務の実態を正確に掌握することができ、この資料に基づいて給与体系を整備した。

また、一九八六年五月、学部増の先陣を切って設置された社会学部誕生の年に、外部委託による事務電算化の具体的な作業に着手。八八年三月には一連の電算化プロジェクトが一段落した。社会学部に入学志願者の人気が集まったこともあって、中京大学への志願者数は一九八五年(四学部)の一万一三九四名から、一挙に一万六八五〇名、四八%増。経済学部を新設した翌八七年には二万二八六二名、前年比三六%増と急上昇した。その後も志願者数は学部増設のつど急カーブで増え続けていったことを思うと、まことにタイムリーな電算化であった。

## 学内対話、いつでもどこでも

私はあらゆるレベルでのコミュニケーションに努めている。学園の常任理事会を月に一回、昼食をとりながらの理事

懇談会は毎週開いている。さらに理事長主催で開く会議は、月例のものが評議員会、学部長・研究科長が出席する理事長昼食会、管理部長会、課長会。週一回のものには理事長・学長懇談会、法人打ち合せ会がある。会議が集中する木曜日は、定例のものだけでも午前九時から午後三時まで五、六回の連続会議となる。その間にも飛び入りがあり、十五、三十分に七、八回の会議になる。申し出さえあればだれにでも、たとえ五分、十分でも会うような心がけている。こうしたことが全学的に知られてきて、教員へのコミュニケーションが極めてとりやすくなった。

一昨年、八学部となったのを機に、いっそう風通しをよくするため、各教授会に出かけて一時間ないし一時間半、年に三回、説明をすることにした。教養部を含めて教授会は九つ。十年間続ける予定なので、合計三〇〇回になる。事務職員に対しても一年に三回、中京大学の現状・将来像についての説明会を開いている。いつでも、どこでも対話することを基本としている。

天然資源に乏しい日本を支えるものは人的資源。潜在的な人間の能力を開発するのが、我々大学人に課せられた責務である。今後とも、二十一世紀の人材養成に貢献できる研究・教育体制の整備を進めるとともに、人類にとって新しい可能性を切り開く学部・研究所づくりを模索していきたい。

# モンタナ大学にみる教員の自己点検・自己評価

／浦田 誠親（東洋大学教授）

地理学のJ・B助教と知り合ったのは、向こうが話しかけてきたからである。一九九一―九二年度の客員交換研究員として、東洋大学から州立のモンタナ大学に着任して間もないある日、大学のカフェテリアで昼食を終えて立ち上がったところへ、ひげ面でしごくラフな服装の彼が、私を日本人とみて近寄ってきた。彼は地理学といっても環境や森林のことに関心が深く、その関係で日本の大学や木材産業界との接触を保っていると話した。日本のある研究者に出す手紙のことで私に相談したい、というのが彼の用件であった。

これをきっかけに親しくなったあと、彼は環境や開発について自説を私に熱心に語ってくれたことがある。若いころの彼がバンクーバーの大学で中国語を勉強したり、書を習ったりしたことも知った。彼は東洋に関心の深い人だった。研究旅行で夏に北海道へ行ってきた、と言っては土産話をしてく

れた。「北海道の持続可能な開発」と題し、彼が大学で研究発表をしたとき、私も聴衆の中にいた。彼は研究熱心な教員だという印象を、私はもつようになっていた。

帰国が近づいた三月半ばに学生新聞『モンタナ・カイン』の記事を読んでいて、私は驚いた。同助教が学年度末に解雇されると書いてあったからである。その記事の中で彼は、解雇を不当とし、それは所属している教養学部内の「ボス政治」による恣意的な措置であると非難し、再審査を求めかねない言葉も残していた。一方、解雇予定の通知を出した教養学部長は、「ボス政治などんでもない」と否定し、解雇理由はB助教教授の授業のやり方に一貫性がなく問題があるからで、たとえ再審査委員会に訴えられても反論する証拠はそろっていると、受けて立つ姿勢を示した。

モンタナ大学の場合、教務担当の副学長が、いくつものプ



ロセスを経て学年度が終わる前、各教員に対し翌年度の契約継続か解雇かを最終通告する。解雇の通知を受けた者のうち、B助教授のように異論を差し挟む者には再審査の機会が設けられている。しかし、雇用の種類は大別して、終身在籍（テニユア）か特定期間（プロベシヨン）のどちらかであり、テニユアのない者は、日本に比べてもともと不安定な地位に置かれている。

とは言っても、大学教員のクビは人形のそのように恣意的に簡単に取り換えられるものではない。解雇には相応の根拠がなければならず、それは被解雇者を納得させうる中身をもっていなければならない。再審査で簡単に覆るような解雇理由であってならないのは当然である。一方で、大学教員の活動は多岐にわたり、内容は複雑であり、もともと評価の対象となりにくい性質のものであるから、評価は単純にはできない。解雇を正当化するほどの点検・評価基準や制度をきちんと調べておく必要がある。雇用の責任者が恣意や感情に走ることは禁物であるし、さらには、解雇の対象となった教員に対する情報公開、本人による異議申し立て、それについての公正な審議・審判機関も用意しておかねばならない。

私はアメリカの大学教員、しかも親しい人がクビになりそのような状況や、公開された当事者同士の激しい言葉のやりとり

を見聞してまず驚いたが、同時に教員の点検・評価制度が実に細かく作られ、実行されていることに二度目の驚きを感じたのだった。

教員の活動・実績についての点検・評価は、毎年度きちんとしたスケジュールに沿って進められる。私が在籍した一九九一―九二年度は、次のような日程が組まれていた。

言うまでもないことだが、点検・評価にはまず何よりもデータが必要である。そこで十一月十五日までに、各教員は前年度の活動報告を、学部長または学科主任及び教員評価委員会に提出する。ちなみに教員評価委員会は、各学部ないしは学科に置かれ、最低三人の教員と表決権のない学生オブザーバー一人によって構成される。

一方、やはり各学部ないし学科に設置される学生評価委員会（この意味は、学生が教員を評価する委員会である）が、同じく十一月十五日までに、当該の学部ないしは学科の各教員についての評価報告書を作成し、学部長ないし学科主任の署名を得る。ちなみに学生評価委員会は、学生及び大学院学生三人ないし七人で構成され、それに学部長ないし学科主任が任命する教員オブザーバーを一人加える。教員オブザーバーは学生評価委員会の討議に全面的に参加し、情報を入手する権利を保証されているが、表決には加われない。学生評価委員会

は、通常の授業評価表あるいは学生が独自に作成した評価表、学生の証言などをもとに、教員の授業と学生相談の実績を点検・評価する。

次いで、十二月十五日までに教員評価委員会は、各教員の年間活動報告書、学生評価委員会の報告書をもとに、自分が所属する学部ないしは学科の同僚を点検し、

①雇用継続 ②昇給 ③昇格 ④テニユア

に値するかどうかの評価を下し、報告書をまとめて学科主任と学部長に提出する。教員評価委員自身の点検・評価はどうするのかというと、当人の順番が来たとき退席して他の委員にゆだねることになっている。点検の対象となる項目は次のとおりである。

一、授業の遂行

二、学生相談

三、学術的な業績、創造的な業績

四、学会などへの参画、専門業績に対する受賞、専門分野の講演

五、学外の諸機関・委員会・学校などへの貢献、諮問委員会での活動、学内各委員会での活動

六、助成金・契約に関連する研究活動努力、学生の研究指導、業績発表に付随する専門分野の研究努力

七、一から六までにわたる学際活動

このあと、各学科主任（ないしは学部長）は一月十五日までに、それぞれの教員が提出した年間活動報告書、学生評価委員会と教員評価委員会の報告書、その他の資料を点検して、各教員が、雇用継続・昇給・昇格・テニユアに値するかどうかの判断を下す。結果はそれぞれの教員に提示のあと、学部長に提出する。

一方で、全学教員評議員会内に基準委員会を設置し、学科主任ないしは学部長は同委員会に教員評価の諸記録を提出する。基準委員会は、教員評価のプロセスと内容が公正かどうかを点検し、遺漏を発見したときは、二月十五日までにそれを学科主任または学部長に指摘する。

学部長は、それぞれの学部・学科が設けている細則・評価諸記録、その他追加的な証拠をもとに、各教員について評価と勧告を書面で作成し、三月十五日までに教務担当副学長と各本人に伝達する。

各教員は、学部長から受け取った評価と勧告について異議があれば、十日以内に書面で学部長に再審査を請求する。

学部長は四月十日までに、再審査請求に基づく修正に応じるか応じないかを本人・学科主任・教務担当副学長に書面で通告する。

他方で大学内に再審査委員会を設置する。同委員会は、全学教員評議員会が任命する三人、学長が任命する三人、教員組合が任命する一人の計七人で構成される。学部長の通告に不服の者は、通告を受けてから十日以内に再審査委員会に再審査を求め、再審査の結果は五月四日までに教務担当副学長に提出される。

教務担当副学長は、再審査委員会の裁定・勧告を含め、すべての評価記録に基づいて、最終判断を下し、各教員の雇用継続・昇給・昇進・テニユアに関する勧告を五月二十五日までに州大学理事会に提出するとともに、各教員にもそれを通告する。

およそ以上のようなプロセスを経て、雇用継続を打ち切られる者は学外に去らねばならない。一方で、雇用を継続される者については、次の三種類の給与査定が下される。

- 一、特別昇給Ⅱ教育、研究・創造的活動、大学の行政・運営の三分野のうち、少なくとも二分野で通常以上の業績を示した者及び三分野のうち一分野で傑出した業績を示した者に与えられる。
- 二、通常の昇給Ⅱ教員の大多数は、通常の昇給に値すると評価を受ける。
- 三、通常以下の昇給Ⅱ雇用契約に定める責任を果たしてい

ないか、職務の遂行が劣る者に適用される。

このような毎年の細かい点検・評価を免れるのはテニユアをすでにとっている教員である。しかし、テニユアをもって教員でさえ安泰の身分には置かれておらず、場合によっては資格取り消しの対象になりうるので油断はできない。

テニユアの申請資格は、モンタナ大学その他の大学で五年ないしそれ以上大学教員としての実績があり、さらに五年のうち三年はモンタナ大学に在籍していなければならない。審査の対象になる項目は、教育、研究・創造的活動、大学の行政・運営参加などである。このあたりまでなら、資格を満たす人は少なくないと思われる。事実、以前はこの大学に五年も在籍し相応の働きをしていれば、テニユアをとるのは割合簡単だったといわれる。しかし、近年は文教予算の締めつけなどで年々難しくなっているとのことである。ちなみに私が交換研究員として在籍していたジャーナリズム学部では、終身雇用契約をしている教員は全体の三分の一に過ぎなかった。テニユアの取得は、労使協約が定める基本的な条件のほか、学部・学科の細則や予算枠などにもよるので、その資格保持者とそうでない者との比率は学内を通じて一定しているわけではない。

テニユアについて、ジャーナリズム学部ですでにそれをも

ついていたシャロン・パレット準教授は、「私がテニユアの申請を出していたころ、家庭で主人との間にそのことをあまりにも頻繁に話題にしたらしく、小さい娘も意味がわからぬままにそのことが気になったようでした。あるとき『お母さんとお父さんがよく話している ten-year ってなんのことなの』と聞いたのですよ」と、笑って彼女自身のエピソードを語ってくれた。テニユアをとるときの緊張感が家庭にまで伝わっていることが、これからも想像できる。

日本へ一度研究留学したいと言っていたパトリシア・レクステン助教は、しばらくたって「テニユアをとる機会がきいたので、まずこれに全力投球ですよ。ほかのことはすべてあと回しよ」と私に話した。キャンパスでは「こんどだれそれがテニユアの申請を出した」と話題になる。テニユアはアメリカの大学教員にとって大きな節目である。

モンタナ大学教員組合とモンタナ州との団体労働協約は「テニユアを得た被任用者の権利」を次のように定めている。「テニユアは各学年度の任用を毎年更新する権利であり、この協約に定める別途の場合を除き、テニユアを得たいかなる教員も任用期間中に解雇されることはなく、また翌学年度の任用更新取り消しを通告されない。各人の任用期間と条件は、毎年の個人雇用契約の中で書面により定める」

このように、テニユアを得た教員は雇用の継続について安定した身分を一応保証されていることは確かである。しかし、その安定しているかに見える身分も、実は相対的なものにと過ぎない。それをとれば定年まで教員としての雇用が保証される座り心地のよい椅子というわけでは決してない。テニユアは「終身在籍権」と訳されているが、実態を調べてみると、そうした訳語は誤解を招きやすいものであることがわかる。

テニユアをもっている者も、每学期末の学生による授業評価はもちろん免れない。ただし、通常の教員が毎年受けることになっている教員評価委員会の点検・評価は、テニユアをもっている教員の場合、通常二年に一度でよい。しかし、前述のように、職務遂行で劣り「通常以下の昇給」という給与査定を受け、それが三年続くと、テニユアをもっている教員も教員評価委員会によって再審査される。同委員会は、該当する教員を全学及び学部ないし学科の基準に照らし、教育、研究・創造的活動、大学の運営・行政参加の三点につき点検する。そのうえで同委員会は、

一、テニユアの一年延長とその年度末における再点検  
または、

二、最低一年間のテニユア停止とその後における再点検を勧告し、これを学部ないし学科の教授会の表決にかけ、そ

の結果を学部長に報告し、学部長が決定を下す。

このように、大学教員の大きな到達点であるデニユアも、うっかりすると転落の可能性が待ち受けている。一般的な印象として、アメリカの大学教員は負担が軽いことを人にうらやましがられるような職業とは思えない。日本では俗に「乞食と大学の先生は三日やったらやめられない」といわれるが、アメリカの大学教員は責任も負担もむしろ重い職業ではなからうか。経営学部長の秘書、キャシー・ダーリントンさんは、こんな話をしてくれた。「夏休みに入って施設課から学部の研究室の壁を塗り替えるという通告があったのです。そこで先生方に研究室を空けていただける予定を伺って回ったところ、研究室を使うという先生方が多く、壁を塗り替える日程が立てられなくて困っているのですよ。それにしても普段から感じていることですが、ここの大学の先生たちのようによく働く人々は珍しい」

私は、臨床心理学のジャネット・ウオラシャイム教授に「アメリカの大学は夏休みが一〇〇日余りもあってうらやましい」と言ったことがある。すると「夏休み中は、研究や執筆、新年度の授業準備に追われます。一〇〇日余りという長いようにみえますが、それでも足りないと思っています」と真剣な顔で反論された。よく知られているように、アメリカ

カの大学教員の間には「(研究業績を)発表しなければ、消えるのみ」という言葉がある。

モンタナ大学で、私は多くの先生方に「この大学の定年はいくつですか」と聞いてみたが、ほとんどの者が「さて何歳でしたか、よくは知りません」と答えた。実はアメリカでは定年を設けることは違憲とされ、理屈のうえでは何歳になっても働けるそうである。しかし、そう長く勤める人はあまりいない。たいていの人は早めに辞める機会をうかがっている。モンタナ大学で七十近くになってもまだ現役の教員は二人に過ぎないとのことである。

早めに大学を辞める先生方には二種類があると思われる。第一は、まだ健康で元気があり、大学以外で積極的に活動し、収入を得る領域をもっている人々、第二は、加齢に伴って大学教員の責任や負担に耐えられなくなった人々である。

経済学のデニス・オドンネル教授は、まだ五十歳前後と思われ元気にあふれる人だが、早くも退職を考えていた。彼は地元では経営コンサルタントとして有名で、バンコクなど東南アジアへ何度も足を運んだ経験がある。私がモンタナ大学にいた一年間、彼は大学から休暇をとりコンサルタントの仕事に専念していた。早期退職を考える理由を彼はこう説明してくれた。「大学は、教員の外部の仕事が一定限度を越える

ことを認めません。大学教員は生きがいのある職業ですが、実情として給料は安い。高額な子供の教育費など考えると、収入を増やす必要があり、そこでジレンマが生じるわけです。この大学は、三年を限度として無給の休暇をとることを認めていますので、私はその間に大学に残るか去るか考えを決めたいと思っています」

前途のジャネット・ウォラシャム教授は非常に親しくしていただいた方で、まだ五十代の半ばと推定されるが、一九九一年の秋学期をもって退職した。同教授は全米でも著名な臨床心理学者で、巨大な組織をもつアメリカ心理学会の重鎮である。彼女は在職中、一年のうち三分の一は旅行していると話していた。元来多忙なうえに、地元ミズーラ市内に臨床心理のクリニックを開いたので、もはや大学を続けることができなくなったのである。

カリフォルニア生まれの日系二世で微生物学者のミツル・ナカムラ教授は六十代後半の方だが、「私は人生を自分なりに楽しみたいので、六十歳前に大学を辞めました」と語った。ナカムラ教授はその後、特別講義の招請を受けて東西ヨーロッパから南部アフリカを含めた世界各地の大学を回っている。私は彼の自宅で、ハンガリーの大学教育に対する貢献をたたえる特大の表彰状を見せてもらったことがある。その

種のものとしてはアメリカ人として初めての受賞者に選ばれ、大変名誉なことだったと伺った。

このように、大学以外で力を発揮する余力を残しながら早めに退職する人々はよいとして、学内の様々な評価に耐えられなくなり、意に反して退職する人々がいても不思議でない。ある教授は私にこう話した。「毎年の評価が続いてかんばんしくないと、自然に居心地が悪くなるものですよ。またモンタナ大学では、大学の質を維持・向上させる必要上、この大学にぜひ欲しいと思われる優秀な若手教員に来てもらうために、古参の教員よりも高い給与を出すことがあります。年齢も高く勤続年限も長い者が、若手の新人より給与が安いという逆転現象が生じているわけです。そういう状況に置かれた古参の者は、やはり居心地が悪くなりますよ」

この給与逆転現象は、やや目立ち過ぎになってきたので、州当局は一九九二―九三年度の初めに、該当する古手教員の給与をある程度手直しした。しかし、この大学の給与体系が年功序列になっていない点には変わりない。大学教員にも、給与体系の面である種の競争原理が働いているわけである。大学教員の重い責務や制度化された細かい点検・評価、さらには競争関係などを考えると、能力や体力の限界を早めに感じる人も出ることだろう。また年をとったらもっと楽な生活

を選びたいという人も出て当然だろう。

テニユアをとった教員でさえ、点検・評価の例外たり得ないし、テニユア取り消しもあるうると先に書いたが、そのような不名誉な措置を受けたあとは、居残るにしても引退するにしてもあと味が悪いに違いない。この点に関連して、モンタナ大学は、早期退職を希望する職員に名誉ある撤退の道を用意している。それは部分退職というもので、その道を選べば、正規の教員ではなくなるが、別途に大学との間に個人契約を結び、一定コマの授業を受け持たせてもらう、研究室も残してもらおう、それに日本ではちょっと考えにくいことだが、教授会への出席権も与えられる、などの形をとって大学に残る。収入は大幅に減るが、大学教員としての負担は軽減され、しかも便宜や名誉は残される。

公的年金受領の年齢に達している者はその支給を受ける。ほかに大学が奨励している個人年金制度があり、加入している者はこれからの収入も見込める。それに授業の手当も入る。これらを合わせても現役時代より収入は減るが、物価の安いモンタナではまずまずの生活ができる。現役大学教員の重い負担を考えると、そのほうがましということになる。

ある教授は、教員の点検・評価についてこんな裏話をしてくれた。「お互い同じ学科に所属して一定の年月を過ごせば、

人情も働く余地がある。論文をなかなか書けないでいる人がいるとすると、『いまあの人は大きな研究テーマに取り組んでいるので、結果が出るのを少し待ってあげよう』と言って当人を弁護し、それが通ることもある。しかし、そういった同情論が何度も通用することはありません」

モンタナ大学の教員社会は、多少の柔軟性や融通性を備えているが、基本的にはしっかりと自己規律が構築された社会であるように思われた。教育・研究に意欲や情熱を持ち続ける人々にとっては、緊張感を伴った働きがいのある職場に違いないが、安楽な職場でないことは確かである。むしろ、給与に比べて負担が重過ぎる職業と言える。そのため、アメリカでは大学からは優秀な人材が、待遇・給与のまじな実業界に逃げる傾向がある、という話はしばしば聞くところである。

私がモンタナ大学で所属したジャーナリズム大学のチャールズ・フッド学部長は、交換研究者として熊本大学に一年間いた経験の持ち主で、日本の大学の様子もかなりよく知っていた。一年間を通じ見た目にも多忙を極めるフッド学部長は、日米の大学の違いについて私と話し合ったとき、「アメリカの大学教員は忙し過ぎる。日本の大学のゆったりした雰囲気はうらやましい。なんとか足して二で割る方法はないものだろうか」と、つくづくという思いを込めて語った。

# TOEFLとTOEIC

— 英語能力テストから見た日本人の英語能力

／三枝 幸夫 (早稲田大学教授)

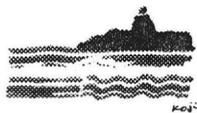
## 信頼できる英語能力テストとは何か

日本の国際化に伴って、英語に対する関心はますます高まっている。それと同時に、いろいろな英語能力テストが現在実施されている。そのうち、どのテストが信頼できるかと問われると、最も簡単な見分け方は評価結果をスコアで示した英語能力テスト、と私は答えることにしている。

現在実施されている英語能力テストのほとんどは、合格不合格で評価されている。しかし、多くの場合、その評価基準は大学卒程度とか、高校終了程度のようにあいまいであり、テストの妥当性の検証すらしめない傾向がある。つまり、主観的評価に頼ることが多いので、信頼性に欠ける恐れがある。

これに対して、スコアによる評価は、数字を用いるので、あいまいさを排除せざるを得ない。公表されたスコアが、テストのたびに変動するわけにはいかないからである。本来であれば、合格不合格のテストは、まずスコア評価で妥当性を検証したうえで、合格基準点を決定すべきものである。もちろん、英語能力は複雑であり、数量だけで完全に定義することはできないが、少なくとも科学的な手順だけは踏む必要がある。

TOEFLとTOEICは、スコアによって評価を行う典型的な英語能力テストであり、英語能力を科学的に測定するという意味では、共通評価基準となりうる、現在では最も信頼することのできるテスト・システムである。



## TOEFLとTOEIC

TOEFL (Test of English as a Foreign Language) は、アメリカ・カナダの大学に留学を希望する外国人学生を対象とした英語能力テストで、現在、日本では、毎月受験することができる。一九九〇—一九九一年度の全世界の受験者総数は七十四万一〇〇〇人に上り、そのうち、日本人受験者数は約十万人を数える。開発・運営を担当しているのはアメリカの公益法人ETS (Educational Testing Service) である。

テストは三つの Section からなり、問題数は全部で一五〇問、試験時間は一〇五分である。測定できるスコア範囲は二〇〇～六七七 (実質的には三〇〇～六六〇) と比較的狭いが、これは大学入学適格者を選抜するというテスト目的のためであり、やむを得ない。入学最低スコアは普通、五〇〇～五五〇とされている。

TOEIC (Test of English for International Communication) は、英語を使って業務を行うビジネスマンを対象とした英語能力テストである。現在は年四回実施され、日本を中心とした受験者総数は年間五十万人にも及んでいる。TOEICの特色は、企業による一括団体受験が多いことである。特に最近では、新入社員に受験させる企業が年々増えてきており

(平成四年度は約七万人)、このあたりを受けて、大学生の間にも受験者の数がしだいに増えてきている。開発を担当したのはやはりETSである。

TOEICは Listening と Reading の二つの Section からなり、問題数は各一〇〇問の計二〇〇問、試験時間は一二〇分である。TOEICの測定できるスコア範囲は一〇～九九〇であり、TOEFLと比較すると、スコア範囲がかなり広い。これは、それぞれの業務部門の要求する多種多様のニーズに合わせて、幅広い、種々の異なるレベルの英語能力を測定可能にするための工夫である。TOEICは、それだけ細かいレベルの英語能力が測定できるわけである。

### どのように英語能力を測定するか

——TOEICの場合

英語能力は Listening, Speaking, Reading, Writing の四技能から成り立っている。このうち、TOEICでは、Listening と Reading の技能について多肢選択の客観テストを行う。Speaking と Writing についてのテストは行っていない。しかし、その場合には、Listening と Reading で四技能を測定できるという理論的根拠を証明しなければならない。TOEICの検証結果によると、Listening と Speaking

Reading と Writing の相関係数は共に〇・八三であった。

これはかなり高い相関関係である。つまり、これは Listening と Reading のテストによって、英語能力の四技能をかなり高い精度で測定できることを示している。

もちろん Listening と Speaking、Reading と Writing は、互いに関係し合っているが、それぞれ独立した技能であるので、Listening と Reading で四技能を完全に測定できるわけではない。あくまでも高い相関が認められるということであって、完全に一致するというわけではない。その精度の度合いを判断するためには、決定係数（相関係数の二乗）を利用すればよい。この場合の決定係数は〇・六九である。すなわち、Listening (Reading) スコアによって、約七〇％の確率で Speaking (Writing) 能力を予測できるということを示している。

この七〇％の確率を十分と見るか、不十分と見るかによって、判断は変わってくる。十分と見れば、TOEIC スコアだけで四技能を判断するであろうし、もし不十分と見れば、インタビュー・テストを行って Speaking 能力を直接測定したり、英語を書かせることによって Writing 能力を測定するであろう。ただし、これらは主観テストであるので、測定誤差が大きくなる可能性が高い。そのため、複数の試験官に

よってそれぞれ評価を行って、バラツキをなくすなど、細心の注意と手順を踏む必要がある。

英語能力をスコアで示すためには、前述のように、スコアに変動があってはならない。四〇〇はつねに四〇〇でなければならない。これを可能にするのが、テスト間のスコアの均一化を図るテスト・スコアの等化 (Test score equating) という方法である。ただし、この場合にも当然、測定誤差が考えられる。TOEIC の標準測定誤差は±二五 (TOEFL は±一四) である。つまり、約六八％の確率で、四〇〇の英語能力は三七五〜四二五 (TOEFL は三八六〜四一四) の範囲内にとどまる可能性がある。もし、さらに正確に約九五％の確率を求める場合には、測定誤差は±五〇 (TOEFL は±二八) となり、四〇〇の英語能力は三五〇〜四五〇 (TOEFL は三七二〜四二八) の範囲内にとどまると考えなければならぬ。

このように、英語能力を数字で示す場合には、点としてのスコアではなく、ある範囲をもったスコア幅として判断しなければならない。英語能力というとらえにくい能力をとらえるためには、五点差・一〇点差といったわずかなスコア差に一喜一憂することなく、測定誤差を考慮したスコア幅の感覚をもたないと、英語能力を正しく理解することができない。

## 測定された英語能力についての誤解

TOEFLで高点をとると、アメリカの大学でいい成績を取めることができる、と考える向きがあるようである。もちろんこれは誤りで、高いスコアは英語運用能力のあることは示しているが、学業成績については何も約束していない。同じことは、TOEICについても言える。TOEICスコアが低いからといって、海外業務ができるとは限らない。

この誤解は、さらに次の誤解を生む。それは、TOEFL（またはTOEIC）スコアが高いと、すべての点で、ネイティブと同じ英語能力をもっていると思う誤解である。確かに、英語運用能力についてはネイティブ同様のレベルにあるとは言えるであろう。しかし、だからといって、英語能力の内容も同レベルにあるとは言い切れない。例えば、普通、外国人の語彙数はネイティブよりはるかに少ないが、語彙数の測定はTOEFL（TOEIC）では行われていないので、たとえ高点をとっても、語彙数はネイティブスピーカー・レベルにあるとはいえない。また、たとえ高点をとっても、難しい内容の英語が理解できるとは保証しない。なぜなら、特定の話題、複雑な構文理解の測定は行われていないからである。このように、高いスコアは英語の知識の豊富さを示しているのでは

なく、限られた英語の知識の範囲内で、いかに英語を自在に使える能力があることを示しているのである。したがって、教養ある成人にとっては常識と思われる政治・経済・社会・文化などにかかわる語彙をもたず、内容を理解できなくても、高いスコアをとることができる。

TOEICの例でいうと、十四歳の男子が九三〇をとったことがある。また、十七歳の女子が九三五をとった例もある。共に、アメリカに八年間滞在した経験をもつが、これは成人でなくても高点をとれることの証拠である。彼らが成人の語彙・内容に関する知識をもっていたとは考えられない。高いスコアは、英語運用能力を示しているのであって、英語内容を示しているのではないことを十分理解しなければならぬ。

また、客観テストは英語能力を測定できないという批判をときどき耳にするが、これについてもひと言説明しておく必要がある。TOEICの場合は、先に述べた検証調査を行うことによって、その信頼度はすでに実証されている。例えば、TOEICのListeningテストと直接実施したListeningテストとの相関係数は〇・九〇であった。したがって、客観テストだから信用できない、という単純な議論は通用しない。

## TOEICから見た英語能力

表1に示したのは、大手企業に就職した大卒新入社員のスコアである。これからもわかるように、三年間の英語能力はほとんど変化していない。特に、平成三年と四年は三七三と全く同一である（これからもTOEICの測定精度の高さがわかる）、このスコアは文系・理系を含めたものであるが、一般的にいうと、文系のスコアのほうが理系よりも約一〇〇高いことが知られている。

このスコアが高いのか、低いのかを判断する目安として、企業が社員に対して期待するスコアを参考のために挙げる

表1 大卒新入社員のTOEICスコア

L=Listening, R=Reading, T=Total

		L	R	T
新入社員	平成2年度	192	177	369
	平成3年度	203	170	373
	平成4年度	203	170	373

(「TOEIC Newsletter 39」より)

表2 大学生のTOEICスコア

		L	R	T
大学生	海外経験者	414	342	756
	海外非経験者	286	264	550

(「TOEIC Data and Analysis 1-38」より)

と、新入社員が四五〇、営業及び技術部門が六〇〇、海外部門が六五〇となっている（「TOEIC活用実態報告6」）。ちなみに、英語を業務に使うことのできる最低実用レベルは、六〇〇であると思われる。したがって、例えば、ある企業では、海外出張に六〇〇、海外駐在に七三〇を最低基準としているケースもある。

この期待値標準スコアと比較すると、表1の新入社員の実際の平均スコアは企業の期待を全く満足していないことがわかる。企業としては、社員教育を通じて、これをさらに六〇〇以上に引き上げなければならないのである。

表2に示したのは、大学生のスコアである。このスコアの場合、新入社員のスコアよりはるかに高いのは、新入社員の場合は、企業に強制的に受験させられた結果であるのに対して、これらの大学生は自ら進んで受験したためである。つまり、これらの大学生はすべて、自分の英語能力にある程度自信があるために受験した人々である。また、当然といえば言えるが、海外経験者と非経験者との間のスコア差はかなり大きいのは注目すべきである。特に、Listening スコアに大きな差が見られる。これは、実際経験を積まないと会話能力は伸びにくいということの証拠であり、学習だけではなく、実際経験の有無が重要であることを示している。

表3 TOEFLスコアの国際比較

July 1989 through June 1991

国名・地域名	受験者数	スコア
オランダ	2,566	605
デンマーク	1,348	594
トリニダードトバゴ	74	594
ベルギー	1,525	593
オーストリア	1,317	592
スウェーデン	3,028	590
西ドイツ	14,828	589
：	：	：
中 国	144,535	531
：	：	：
ベトナム	4,929	511
：	：	：
韓 国	77,004	504
台 湾	106,115	503
：	：	：
タ イ	33,051	491
：	：	：
日 本	225,939	484

(「TOEFL Test and Score Manual, 1992-93」より)

TOEFLから見た

日本人の英語能力と今後の問題点

表3に示したのは、二年間にわたって、アメリカ・カナダの大学に応募した世界各国からの留学生のTOEFL平均スコアの一覧表の一部である。日本は応募した一六二カ国中、なんと一四九位と驚くべき低きである。応募人数が最も多いので、質の低い学生も数多く含まれているというのが大きな理由であろうが、それにしても経済大国日本にしては低過ぎるスコアである。

この表から判断すると、月並みではあるが、学校教育を含

めた日本の英語教育は、やはり大きな欠陥を抱えていると言えそうである。英語と同一語族に属し、ライフスタイルも似ているヨーロッパ諸国はともかく、同じアジアの各国にも大きく差をつけられているのはどうしたことであろうか。これらの国と比べて、日本における英語教育が特に劣っているとはどうして考えられない。むしろ英語教授法などは研究も盛んであり、英語教育に関する関心も高い。それではなぜ、日本人の英語能力がこれほど低いのであろうか。

私見によれば、日本ではあまりにも英語教授法という方法論にとらわれ過ぎ、目先の小さな効率を考え過ぎているような気がする。外国語教育は、言語に接触する時間を増やし、生活体験を通して実際に使ってみることに初めてその成果が得られることはだれでも知っている事実である。その意味では、学校教育では、英語を「勉強する」のは中学レベルで終了し、高校レベルでは「経験する」ことに徐々に移行し、大学レベルでは、学際的な人材の登用を含めて、英語による専門教科の講義・演習などの設置を行い、完全に勉強から脱却して、英語を「経験し、手段化する」ことに重点を置く。英語教育が必要であると思われる。英語学習の最終目的は、英語を目的とすることではなく、英語を手段とすることである。

# 津田塾大学における就職指導の今とこれから

／西山 京子（津田塾大学学生生活課長）

今年の夏の就職活動は、バブル崩壊の後遺症で、女子学生にとっては厳しいものであった。各大学では、来年度に向け、新たな就職指導をすでに始められているであろう。

本学でも、一層厳しさが増すことを予想し十月下旬から、三年生向けの就職オリエンテーションを開始した。学生が自分の適性・能力を活かして、長く働けるような職場を見つけれられるよう、様々な就職指導プログラムを準備している。

以下小規模な女子大学の例であるが、本学の就職指導の特徴について述べてみる。なお津田塾大学は、学芸学部の中に英文学科（二四〇名）・国際関係学科（二四〇名）・数学科（一〇〇名）があり、卒業見込み者の約七％が進学で、九〇％弱が就職である。

## 「自己分析」の重視

本学の就職の特徴は、学生の自己分析に重点を置いていることである。わかっているようであまりわかっていない自身をよく理解したうえで、自分に合った企業を探すようにと指導している。就職指導としては、ほかに業界・企業についての指導と、就職活動ノウハウについての指導があるが、特に自己分析に力を入れているのには、いくつかの理由がある。

第一に、自分に適した職業を選ぶためには、自分についての正しい認識をもつことが不可欠である。

自分が何をやりたいのかわからない学生や、的外れの企業選択をする者が、バブルのころから目立ってきている。こう



した学生は、知名度の高いブランド企業を、一種のファッションのように、自分の適性を深く考えずに選択している。自身自身についても、安易にいわゆるキャリア・ウーマンに自分を重ねるといふことをしている場合が多い。自分の個性を無視して、世間的な基準で企業や職種を選んでいるのである。

就職活動の初めに自己分析を十分に行い、自分のタイプや適性を理解しておくことが、周りの意見に左右されず、自分に適した企業を選びやすくすると思われる。

第二に、自己分析により、就職活動全体がスムーズに進むことである。

最近では、女子学生にも大量の就職情報誌やダイレクトメールが送られるようになり、学生の手元には企業情報があふれている。こうした中から学生は、自己の判断で必要で確かな情報を取捨選択しなければならぬ。自分の興味・適性がわかっていけば、この作業は格段に軽減される。

また自己分析は、そのまま面接試験の準備となる。リストアップした自分の特徴を、企業が求める人材に照らし合わせ、志望動機とすればよいのである。面接においては、企業そのものを十分に研究していることも大切だが、自分自身を肯定的に分析し、人間的な成熟度を見せることもまた重要である。

第三に、「自分を知る」ということは、自分らしく生きる

ことにつながる。

就職活動の時期に、自分を振り返り、ぼんやりとでも自画像を描いてみることは、その人の心の財産となり、将来にわたって自分に適した生き方を選択していくきっかけとなり、力となるであろう。またありのままの自分を知ることにより、自分らしさをさらに伸ばし、足りないところを補う努力ができるであろう。

こうした自己分析、自分を知ること重点を置いた指導をするというのは、本学が女子大学であることに由来するかもしれない。人生の選択肢を数多くもつ女性は、ことあるごとに何を選択するかで心が揺れ、自分らしく生きることを常に求めているからである。

男子学生の場合は、一般的に「仕事をしなければならぬ」という選択の余地の少ない人生が控えているため、就職活動では、少しでも条件のよい企業に就職し、自分を会社に適応させていくことが多いように思う。その点が組織にそれほど従順になれない女性と少々異なるが、しかし男性の場合も、自分の本音に気づかず、仕事に自分を合わせ過ぎて破綻したり、入社直後に本音に気づき早期退社したりするケースが、最近では増えていくと聞く。男子学生もまた、職業選択の際、自分をよく知ることが大切になってきているので

’92年 就職向け“自分を知るセミナー”（’91年12月19・20日に実施）

◎3年生対象 定員30名、参加費2000円 ◎（主催）学生生活課 （協力）保健センター

★1日目

項目	時間	ね ら い
①第一印象ゲーム 受ける印象、向いて いそうな職業を互い に言い合う	60分	・自分がどういう印象を他人に与えているかを知ること ・面接時に自分が相手にどういう印象を与えるかを知る ・自分の雰囲気はどういう職業に向いているかを知る
②職業興味検査(3種)	60分	・自分がどういう価値観を持って就職に臨もうとしているかを知る
昼休み (60分)		
③正解のあるコンセン サス実習 NASA 「月で遭難した時に どうするか」	120 分	・与えられた課題を全員のコンセンサス（意見一致）によ って集団決定をする過程で、自分がとりがちな役割、自 分自身のコミュニケーションのあり方、リーダーシップ のとり方、協力の仕方を体験的に知る
④実習についてのふり かえり	110 分	・ゲームの中でグループの自分がどういう動きをしていた かについて、他のメンバーからフィードバックを得る

★2日目

⑤ *自己分析シートを 書いた感想	60分	・書いた時点で自分が気にかかった点（長所が見つからな かった等）について発表し、それについて他人のフィード バックを得る
⑥自己紹介文を書く	60分	・突然にテーマを与えられて文章を書く練習にもなる
昼休み (60分)		
⑦自己紹介文発表	90分	・自分自身の発表したものについて、良いところ、足りな いところについて全員のフィードバックを得る ・他人の自己紹介文を聞くことにより、自己表現の多様な 方法、効果的な表現を知ることができる
⑧自己紹介文感想	15分	・⑦をやったの感想を全員でシェアする
⑨職業リスト説明	30分	・卒業生が就いているような職種で、比較的学生が知らな いものについて学生生活課より説明
⑩やってみたい職業	60分	・指名した相手に自分の向いていると思う職業をいって もらう。これは学生の職業についての知識が少なく、うま くいなかった

\*自己分析シート（B4サイズ4枚、前日に配布し家で記入してくる。）

(1)小学校から大学までの自分の好きだった科目、特技、スポーツ、本等9項目について  
記入する

(2)現在の自分の興味、関心、信念、大学における専攻分野等

(3)大学生活、クラブ活動、アルバイト等から得たこと

(4)性格について——先生、親、兄弟からの指摘と自分の記憶

未来について——20代から50代までの自分のイメージと目標

はないだろうか。

### 就職向け「自分を知るセミナー」

「自分を知る」ということを具体的にどう指導するのか、試行錯誤の連続であるが、一昨年(一九九一年)十二月、保健センターの協力を得て、このセミナーが実現した(別表参照)。学生相談カウンセラーと就職担当者が、お互いの立場から話し合い、津田塾生の個性に合ったプログラムを目指した。

実施にあたっては、ゲーム感覚でやれること、他人から見ただ自分を知ることともに、自分自身を見つめることが可能なこと、就職活動にそのままつなげられること等に留意した。参加者からは、就職内定後、次のような感想が寄せられている。

「早い時期に自分自身を見つめる機会が与えられたことで、その後自分の進路を考えるのにとでも役立った。特に自分の特性を知ることができ、教員になろうと決心するきっかけにもなったと思う」

「自分を過小評価しがちであったが、これに参加することで、他の参加者がよいところを引き出してくれたので、自分に自信がもてた」

「スチューデントを考えていたが、自分はそういうイメージでないことがわかり、早い時期に進路変更を考えることが

できてよかった」

このセミナーは、内容的にはかなり満足のいくものであったが、運営上参加者を限定せざるを得ず、それが問題である。

ただ、セミナー用に作成した自己分析シートを使って、自己分析をした人を対象に模擬面接を行っている。五人一組みのグループ面接であるが、約二〇〇人の学生が参加している。

### これからの就職指導

本学の就職指導は、以上述べたように自己分析を特徴としているが、学生が自分に適した職業を選び、就職後もミスマツチを起こさないためには、自己分析と企業研究のバランスのとれた指導が必要であろう。

本学の場合は、企業研究についての指導がこれからの課題である。現在は学生の自主性に任せ、一般的な指導しかしていない。総合的・系統的に日本経済の構造や、企業・業界の動向について解説し講義するようなプログラムの必要性を感じている。

本学における就職指導は、毎年見直しの連続ではあるが、学生が就職活動を一つの経験として終わらせず、これをきっかけに自分に対する見方、社会に対する見方を身につけて、卒業後も豊かに自分を成長させていけるような、そんな可能性を与えるのであれば、と願っている。

○これからの学問

# 宗教が問いかけるもの

——大都市近郊の宗教センター——生駒からの報告

／三木 英 (英知大学助教授)

## 一 大都市近郊宗教へのアプローチ

大阪の街のどこからでも、東方に屏風のように連なる山並みを見ることが出来る。屏風は京都盆地の外れ、淀川のほとりの男山に発し、奈良盆地の集水路・大和川畔へと至って、大阪・京都・奈良の府県境をなす。南北およそ三十五キロ、東西の幅五キロ、そして標高は最高値六四二メートルの山系、これが「生駒」である。

大阪市の中心部から近鉄電車に乗れば、三十分程度で西側山麓に着く。直線距離にしておよそ十五キロ。日曜祝日ともなれば、多くのハイカーたちの憩いの場となる、大都市近郊のオアシスである。この生駒がいま、不思議な靈気を醸し出すスポットとして、注目を集めている。「神さぶる生駒高嶺」

(『万葉集』)と古歌にも詠まれた地に、現代も神々が多数ましまし、都市住民が篤く信仰し願いを託してあまた訪れるというのである。

生駒の宗教についての報告は、昭和初期に民俗学者・赤松啓介が栗山一夫の名で踏査し発表したもの(『大阪及び附近民間信仰調査報告』『民俗学』第四卷・昭和七年、他)が唯一といって誤りではあるまい。そこでは、おどろおどろしい庶民の信仰が描かれている。これに刺激され、生駒の宗教の現在を調査しようという計画が持ち上がった。計画推進の主体は、宗教現象に関心を寄せる関西在住の研究者たちからなる「宗教社会学の会」である。宗教社会学の会は、昭和五十六年より調査を開始した。そしてそこで、あたかも異文化に接したかのような、カルチャーショックに似た衝撃を経験す



る。何しろ、近代化・合理化・都市化、そして宗教の世俗化について学び論じてきた研究者たちである。呪術から解放されていない世界が、しかも時代の先端を行く大都市の近郊に見られるなら、既存の理論や概念は見直されねばならない。時代を導き、そして我々を導いてきた「知」が、揺らぐのである。

第一期調査の成果は、『生駒の神々』と題されて昭和六十年に出版された。この刊行が契機となつて、生駒が関係学界はもとより、テレビや雑誌等のマスメディアにも頻繁に取り上げられ注目されるようになるのである。そして続いて第二期・第三期と調査研究は積み重ねられ、現在に至っている。

調査からは、生駒全域に約六〇〇の社寺があることが判明している。その七割が、大阪に面した西側斜面にあることもわかつている。そして生駒を訪れる人々が年間延べ一〇〇〇万人にも及び、その多くが定期的に参詣する固定信者であることも推定されている。

以下では、生駒へ誌面を借りて案内しよう。ただし、生駒は広く、枚数は少ない。そこで、筆者が調査において直接に関与した地区に限定することをお断りしておく。

## 二 生駒の神々

### (1) 朝鮮寺

近鉄電車奈良線に乗って出かけよう。まず、額田駅で下車

する。山側、額田谷へと急な上り坂を歩くと、すぐに巨石を祭祀する大石教会に到着する。明治中期に創設された単立宗教法人で、ご神体に祈れば、そこに宿る「大石明神」が霊示を与え、病を癒してくれるという。

そこから約二十メートルばかり先には、信貞寺がある。さらにそこから十メートル程度離れたところにある不動寺と共に、奈良県吉野に本拠を置く金峯山修験本宗末の寺院であるが、日本の仏教寺院というよりは「朝鮮寺」と名づけられたカテゴリーに属するものである。

周知のように大阪府には、日本全体の三割にあたる二十万近くの韓国・朝鮮人が住んでいるが、朝鮮寺とは、その婦人層によって信仰され、その依頼によってシャーマニズムの巫祭を行う寺院のことをいう。本堂のほか、北斗七星を中心にした虎を従えた山神と海の神である竜王とを祀る七星堂と呼ばれる小堂があり（本尊と星・山・海の三神を同一建物に祭祀する場合も多い）、賽神場があるのが、通常の朝鮮寺の構成である。

そしてシャーマニズムの巫祭を「賽神（クッ）」というのである。「クッ」は何か不幸があったとき、また何か祈願をするときに催される独特の巫俗である。シャーマンが諸神諸霊を招き、特に生者の妨げをなすような祖霊をもてなし、災いを及ぼさないようにして霊の世界へと帰ってもらうのであ

る。この儀礼は、大規模なものになると一週間以上もかかり、費やされる費用も五〇〇万円に及ぶという。

生駒には、六十強のかかる寺院が存在する。消長が激しく、もちろん地図には掲載されず、また外観が普通の民家とほとんど変わらないため、総数の正確な把握は困難であるが、一地域にかくも集中している例は、全国どこにもない。いま我々が歩いている額田谷にはまだ七つ。次に下車する予定の額田の北隣の石切駅から生駒山頂へと通ずる辻子谷には十二。額田より南、近鉄瓢箪山駅裏の鳴川谷、服部川駅裏の山畑・服部川地区、さらに高安山下の黒谷には四から九つの朝鮮寺が「生きています」のである。

このほか、寺には滝行場がしつらえられ、また白鷹大神・黒竜大神といった神名、あるいは修行に励んだ人物の霊名を刻んだ「お塚」がひしめいているが、滝行場とお塚は生駒の必須アイテムである、と言っても過言ではない。朝鮮寺に限らず、あらゆる宗教施設に、また谷治いの道にそれらを見ることができるはずである。

信貞寺・不動寺の二つの朝鮮寺を過ぎしさらに登ると、ようやく住宅地がとぎれて山に入る。山道を進んでゆけば、谷川わきの狭いところに、いくつか家が建っているのを見られる。朝鮮寺である。立ち寄らずに急坂を登り、金峯山修験本宗大阪別院・天竜院に着く。駅から寄り道せずに（頑張っ

て）歩いたとして三十分。額田谷の宗教施設は、ここで終点である。

## (2) 修験道寺院

天竜院というより長尾の滝といったほうが、通りがよいかもしれない。生駒を代表する自然滝で、弘法大師修行の伝説を残し、江戸期の高僧・慈雲尊者が山居した庵の跡も、滝の傍らに残されている。天竜院の前身は、この滝を行場として明治末年に建てられた参籠所なのである。現在は本尊八大竜王を祀る本堂のほかに、藏王堂・末光稻荷社・阿弥陀堂・信徒会館・寺務所、そして岩窟に密着して建てられた錦成竜王祠をもつ。山中に起居して神霊と交わり、験力を修することの本義とする修験道の寺院には数多いが、天竜院はその代表格である（先述の二つの朝鮮寺は便宜上、修験道の宗派に帰属しているといえよう）。

著名な滝行場であるがゆえに、多くの人が訪れる。その中には、季節も時刻も問わず滝に行をする熱心家も少なくない。滝によってケガレを祓い、滝が象徴する竜神等の神霊から力をもらい、山を下って市中に入り顧客（クライエント）の困苦に対処する霊能者リシャーマンが、確かに存在するようである。また、霊能力はなくとも、宗派の教師資格を得て一般信者を指導する宗教的活動家も、少なくはない。天竜院に保管されている信者名簿をもとに実施した質問紙調査によ

れば、全体の一六%が自分で教会を運営したり、講を指導したりしている。将来教会をつくることを予定している者も含めれば、二四%にも上る。そして彼らの導きゆえか、一九七〇年を境に修験本宗に入信する人の数が、漸増していることが調査結果から知られる。七〇年以降入信者の三分の二は女性が占め、彼女たちが自身の家族を巻き込んで、さらには友人知人に働きかけて次代の活動家になることも、明らかになっている。

シャーマン(教師資格保有者)たちは、都市の俗なる世界と生駒の聖なる世界とを媒介する存在である。彼らが核となつて形成される集団は、従来の地縁・血縁という運命的フアクターを集団形成の原理とする氏神―氏子関係や檀那寺―檀家関係と同じではない。かといって、教義によつて結ばれ布教することを第一義とする組織的な新宗教のたぐいでもない。いふなればネットワークと表現するほかないルースな結合が、生駒において見いだされるのである。

### (3) 石切神社

生駒の名瀑を眺めてひと息ついたら、もと来た道に戻る。電車に乗り込み一駅、石切駅で降りる。駅から石切神社まで、七〇メートルほどの緩やかな参道を下つてゆく。神社側とは反対方向、山頂へと通ずる辻子谷筋も朝鮮寺や滝行場が点在する一見の価値ある地区であるが、割愛する。

駅を出て少し歩くと、尼僧姿や神職姿の古い師たちを、目にするはずである。彼らと彼らに依頼するために並ぶ人を見て神社に向かおう。

参道は左右とも店舗が並び退屈しない。先の古い師と同業の、運命鑑定・祈祷の看板を掲げた店が多いのは、石切周辺の特徴であろう。「病氣の原因が一〇〇%わかる」「必ず治る」と書かれたのぼりが風にはためく。漢方薬店も多い。参道途中にある「耳ナリの神様」は、その隣の漢方薬店の経営になるものである。関西方面では「赤マムシドリリンク」によつてその名を知られる坂本漢方の本店も、ここにある。やはり宗教に乗り出しており、参道沿いの「石切大仏」と「石切大天狗」という二つの宗教施設を法人化し運営している。

その他、地藏や不動明王を祀つた小祠もそここにあり、線香の煙が絶えない。

平日にこの道を歩いたとしても、その人通りの激しさに驚くだろう。日曜祝日の混雑ぶりが並ではないことが、想像できる。人出をあてこんで食堂や衣料品店が軒を連ねており、どの店も、参詣者の大半にあたる中高年層の女性を見据えた品目をそろえている。「おばあちゃんの(関西版)原宿」のありさまである。

石切神社は幕末以降、「デンボ(腫れもの)の神さん」として近在の人気を得、鉄道の開通とともに大流行して、今日見

るような宗教法人・神道石切教へと発展を遂げたものである。どんな病氣にも「よく効く」と、年間三五〇万人の崇敬を集める大神社である。境内に足を踏み入れるや、驚くような光景が視界に飛び込んでくるだろう。お百度を踏む群衆が、そこに存在するのである。お百度といえは人目を避けるようにして深夜に一人で、というイメージは粉碎される。日曜や神社の祭日ともなると、二〇〇人以上が本殿と鳥居の間を声を発することもなく、ひたむきに細い楕円状になって回っているのである。人々の熱気を感じずにはおれない。調査によると、参詣者の二〇％が楕円に加わっているはずである。そしてその五〇％が、病氣平癒を願っているのである。

石切周辺をにぎわす人々の七〇％は、少なくとも月に一度以上はやってくるという固定信者である。しかし彼らのうち、神社の祭神の正式名称を知る者は極めて少ない。神道石切教の教義についても、同様である。神社が主導する組織への加入率も、低い。制度化された宗教と関係せずとも、自らの自由意志でもって織りなされる庶民信仰のしたたかさが、かいま見られるようである。

#### (4) 生駒聖天Ⅱ宝山寺

石切神社と共に生駒における最大手といえるのが、「聖天さん」と親しまれ、年間三〇〇万人を動員する宝山寺である。宝山寺へは、石切駅へと戻り電車に乗り込んでさらに一

駅、生駒山系を東西に貫く生駒トンネルを抜け出た奈良県側にある生駒駅で降りる。駅前からケーブルカーに乗り換え宝山寺駅で下車。そこから徒歩およそ十分である。

宝山寺は、湛海律師が十七世紀に開創した寺院である。本尊は不動明王ながら、湛海の勧請した大聖歡喜天（Ⅱ聖天）への深い信仰によって特徴づけられる庶民の寺である。聖天は絶大な御利益を与えてくれる商売の神なのである。庶民の篤信のほどは、境内を本堂に向かって歩いてゆくとよくわかる。道の両わきに石柱が立ち並び、奉納された金額が彫り込まれているのだが、壹千円・貳千円の数値が少なくないのである。本堂の横にはブロンズの不動明王像があるが、そこには奉納・壹億円の文字さえ見える。

聖天の縁日である毎月一日と十六日には、多くの参拝者が訪れる。境内の混雑ぶりは一日のほうが激しく、さらに一日の深夜の出入には圧倒される。平成三年十月三十一日の二十三時四十五分から十一月一日の一時二十分まで、九九二人の参拝が確認されているほどである。日中の参詣者が劣らず多数であることは言うまでもない。その中で、輪袈裟を首にかけた高齢の男女が目立つ。彼らは講のメンバーたちである。講は境内に専用の詰め所を有し、またおみくじやお札・線香・ろうそくなどを販売して寺院業務をアシストする榮譽をもつなど、寺院との密接な関係を保ちながら、独自に行事を

立案し実行する俗人だけの集団である。それに参加する人々は講元を中心に、仲間と共に信仰に励み、精神の修養に努めようとする人々である。それ以外に、仲間たちとの交流を楽しみに入講する者がいることも軽視できない。ここでは、宗教が親睦のためのメディアとして選ばれているわけである。

### 三 非合理なるものの復活

そろそろ生駒の地をあとにしよう。まだまだ歩き足りない気分である。こうして歩き見てきたところに、生駒の宗教が集約されているとは思えない。おそらく、今後調査されて発見されることを待つ何かが、まだ存在していることだろう。とまれ、生駒の神々がこれまでに投げかけてくれた問いかけを受け止めておきたい。

近代主義者はかつて、こう予言したはずである。シャーマニスティックで現世利益的な民俗宗教が、その非合理性ゆえに、早晚消滅するであろう、と。この予言に、生駒の神々は否という。生駒に向かう人々として、最初から神々を訪れたのではない。悩みの解決を求めて、病院をはじめ世俗の、都市の機関を頼ったはずである。そして満たされなかったがゆえに彼らは都市の周辺に、生駒へと向かったのである。そこには心身の痛みを共に苦しみ、共に泣いてくれる仲間がいた。お百度や滝での行は、人生が社会に流されるものでなく自分

で形成するものであることを、確信させたことであろう。人々の組成がネットワーク型であるのも、それが合理的に編成された組織とは異なるからこそ、採られるのである。とはいえ、人々の生活の基盤は、あくまで近代的な都市にある。神々が教えてくれたものは、非合理なるものが合理性とは両立不可能な敵対するものではない、ということなのである。世界は呪術から解放され尽くさず、ふたたび聖化されるのだろうか。そうであるとしても、それは単なる過去の再現ではない。合理主義を補う形での復活であることを、これからの人間と社会を研究する学問は、忘れるべきではないだろう。

● 宗教社会学の会による調査成果は、次のとおり。

・ 宗教社会学の会編『生駒の神々——現代都市の民俗宗教』創元社・一九八五年

・ 塩原勉編『日本宗教の複合的構造と都市住民の宗教行動に関する実証的研究——生駒宗教調査』昭和六十・六十一年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、大阪大学人間科学部・一九八七年

・ 塩原勉編『現代日本におけるネットワークの研究——宗教行動と社会的ネットワーク』平成二・三年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、大阪大学人間科学部・一九九二年

講義を考える

# 授業に対する十の試み——「国際法Ⅰ部」の実践報告

／波多野 里望（学習院大学教授）



「男は、強くなければ、生きてゆけない。男は、優しくなければ、生きていく価値がない」。ハードボイルド小説に登場する探偵フィリップ・マローの有名なセリフである。

テレビのコマーシャルなどにも時どき使われているから、ご存じの方も多かろう。私は、これを次のようにもじって使っている。「授業は、楽しくなければ、聞いてもらえない。授業は、厳しくなければ、聞かせる価値がない」

しかし、授業で学生を楽しませるといのは、けっして容易なことではない。ことに学習院大学法学部の場合には、国際法Ⅰ部が、

- ① 選択必修科目である（法学部には「必修」がない）
- ② 配当年次が、入学したての一年生である
- ③ 一クラスの受講生が五〇〇名を超える

ので、その難しさが倍加される。そこで、私は次のような工夫・努力を試みている。

## 一 一年間の授業日程表を年度初めに配る

すべての学生が年間を通して授業に全出席してくれば、これに越したことはないが、なかなかそうは問屋がおろさない。学生が、授業よりも麻雀やサークル活動に引かれる原因の一つは、毎回の授業のテーマがあらかじめ具体的に知らされていないことではなからうか？ そう考えた私は、「×月×日の授業では何を取り上げるか」「そのテーマに関する記述は教科書の×頁と×頁に載っているのか」を明記した通年日程表（いわゆる「シラバス」とは異なり、

授業内容は書いてないが、日割りについてはシラバスより詳しい)を作り、学年初めに全受講生に配ることにした。

それも、「海洋汚染」とか「戦争の違法化」とかいった月並みなタイトルでは、学生にとって魅力に乏しいと思い、

「外交特権」↓「青ナンバーは『天下御免』?」

「宇宙」↓「静止衛星軌道は『満員御礼』」

と、なるべく「やわらかいタイトル」をつけてある。

また、「一度休むと講義の続きがわからなくなるので、その後もずるずると欠席してしまう」という学生が多い。

そのため、授業は、「読み切り講談」にならって、毎回、

「一話完結」方式をとっている。そして、休講をした場合

には、その日の分の講義は、日程表で年度末にあらかじめ組み込んである「予備日」に補講することとし、次回以降の授業日程には変更を加えない。

したがって、学生たちは、安心して、「面白そうだな」

と思う授業のある日だけ選んで「つまみ食い」をすること  
もできるわけである。

## 二 話し方に留意する

内容がどんなにすばらしい講義であっても、教師の話が

よく聞き取れないようでは、一文の値打ちもない。

(1) したがって、私は、まず「声」について次のような点に留意している。

①自分が「この程度でちょうどよいだろう」と思うのより、少し大きめの声で話し、「よく聞き取れるか、どうか」を最後列の学生に時どき確かめる。

②マイクを使う時は、持ち方が悪くて雑音が入らないか、口に近づけ過ぎて呼吸音が入っていないか、確認する。

③声の「大きさ」は十分でも、声に「張り」がないと、教師の話すことが学生の頭(心?)に浸透しにくいので、「語勢」が落ちないように体調を整えておく。

④さらに、声に「艶」があるほうが、聞く側にとっては心地よい。しかし、「艶」の有無は生まれつきの部分が多く、かんたんに変えるわけにはいかないから、私は「せめて、自分ののどに適当な湿り気を与えておこう」と、夏には冷たい麦茶、冬には温かい紅茶の入った小さな魔法瓶を、教室にいつも持っていく。

(2) しかし、こうして声をいくら整えても、かんじんな「話し方」がまずくてはなんにもならない。したがって、その点については、次のように心がけている。

①学生に覚えてもらう必要のある「専門用語」以外は、

難しい言葉（特に専門的な略語）を使わない。

② わかりにくい言い回し（二重否定など）は、なるべく使わない。

③ ワン・センテンスをなるべく短くする。

④ 発音やフレーズの区切りを明確にする。

⑤ 特に「語尾」をはっきりさせる。

⑥ できるだけ「ゆっくり」話す。ただし、最近の若者は、速いテンポを好む傾向があるので、聞き流してもよいと思われる部分はアップテンポにして、授業にメリハリをつける。

### 三 板書に留意する

教師の話はよく聞かなくても、黒板に書く文字が小さくて読みにくいと、学生がイライラするので、板書する場合は、次の点に留意している。

① 最後列の学生にも十分に読み取れるだけの大きさの字（教室の広さによって異なるが、数百名収容する大教室の場合には、二十五センチ角ぐらい）を書く。

② いくら大きくても、字が「薄い」と読みにくいので、「筆圧」を十分に加えて、「濃い」字を書く。

③ いくら「濃くて大きい字」であっても、照明の関係で「線が細い」と読みにくいことがあるので、そのような場合には、長さ二センチくらいのチョーク（手ごろなのがなかったら、長いチョークを適当に折って作ればよい）を寝かせて使い、太き二センチの字を書く。

### 四 学生から目をそらさない

私は、「授業とは、教師と学生との真剣勝負である」と考えている。したがって、講義をしている間は、学生からけっして目をそらさない。板書をする時でも、学生のほうに顔を向けたまま、右手をひねるようにして肩越しに字を書く。

もちろん、授業が単調にならないよう、時には、意図的に教科書に目を落としてその一部を読み上げることもあるが、それは、一回の授業のうち、せいぜい三回までとし、九十分のうちの五分以内にとどめる。

しかし、教師がいくら学生に顔を向けていても、学生が条約集や六法全書を見るために下ばかり向いていたのでは、両者の間のコミュニケーションが盛り上がらない。そこで、学生が下を向かなくてすむように、授業の中で参照すべき

条約や法律は、あらかじめOHPに起こし、教室の大きなスクリーンに映し出す。

また、私の視線が一カ所に固定・集中しないよう、教室の隅々まで万遍なく目配りをするには言うまでもない。

## 五 OHPとスライドの活用

### (1) OHPの長所

OHP(オーバーヘッド・プロジェクター)には、次のように多くの長所があるので、私は、平均して毎回五十枚くらいのOHPシートを使っている。

①ラジオとテレビとを比べてみればすぐわかるように、講義も、聴覚だけに訴えるより、視覚と聴覚とに同時に訴えたほうが、学生の頭に入りやすい。

②地名や国名なども、地図の上で示してやると、学生としては、イメージをつかみやすく、記憶にもよく残る。

③耳で聞いただけでは理解しにくい言葉(遼河性資源・降河性魚種など)や紛らわしい言葉(司法と私法など)も、スクリーンに映し出せば、誤解されにくい。

④教科書では文章として書き流されていることも、表や図にして示すと、学生に理解しやすくなる。

⑤OHPを使うと、使わない時のおよそ二倍の情報量を同じ時間内に学生に伝達できる。

### (2) OHPの使い方

このように、OHPはまことに便利なものではあるが、シートの作成にやや時間を要するのが難といえれば言うようしかし、いったん作成してしまえば、その大半は、その後何年も使えるので、けつして損ではない。特に、次の点に注意すれば、よりよいシートを作ることができ、また、使用の効果も上がる。

①シートに書く字は、二センチ角以上とする。

②色が飛ばないように字は黒で書くのがよいが、黒一色だとドギツイので、赤・青・緑などで、下線を引いたり縁どりをしたりする。特に地図の場合は、海の部分に水色を塗ると、陸地との境がはっきりして見やすくなる。

③黒とその他の色が混じるときはなるべく、色をつけるのは、シートの裏からのほうがよい。

③全部を一枚のシートに初めから書いてしまわず、何枚かのシートに書き分けて、それを順番に重ねていくと、時間的にも空間的にも立体感を出すことができる。

④画面の一部に注意を引きたい時には、指示棒を使って

スクリーンを指すのがふつうであるが、高いところには手が届かないこともあるので、適当な太さの編み棒で、シートの上を直接に指すほうが能率がよい。

⑤ 条約や法律の条文などは、いちいち書き写さなくても、拡大コピーをそのままシートに印刷することができる。

⑥ 書き損じた場合、使っているのが水性のペンであれば水でふくだけで消せるし、油性のペンでも、マニキュア落とし（除光液）かラツッカー薄め液を使えば落ちる。ただし、そのような液は揮発性なので、換気をよくしておかないと、シンナーを吸ったときと同じことになる。

### (3) スライドの活用

授業に変化をつけて、かつ、より強い印象を学生たちに与えるために、私が訪ねた難民キャンプや視察したPKOの活動の模様を、随時、スライドで見せることにしている。

## 六 Q & Aとティベート

受講生が五〇〇人を超える大教室ではあるが、それにもめげず、私は、学生との間でQ & A（質疑応答）方式を、できるだけ多用している。歴史的なテーマの時には無理だ

が、予備知識がなくても論理的に考えれば答えを出しうるテーマの時は、主として服装を手がかりに（名前はとも覚え切れない）どんどん指名をして質問をぶつける。

また、年に何回かは数人の学生を教壇に上げて、二組に分ける。そして、「北方領土」のときは日本かロシアかの、「竹島」の場合には日本か韓国かの立場に立って、議論を闘わせる。

## 七 ゲストを迎える

授業に変化をつけるために、機会さえあれば、いろいろなゲストを呼んでくる。いまままでに、友情出演してくれた外国人だけでも十人になる。現在は、宇宙開発事業団に勤めている国際法ゼミの卒業生に、毎年、最先端の情報を提供してもらっている。

## 八 学年末試験とアフターケア

学年末試験は、学生が、問題を読んでから「記述式」と「短答式」（五肢選択・穴埋めなど）のいずれかを選べるようにしてある。

「記述式」で「優」をとった者には、国際法ゼミ機関誌『ユスゲン』を呈呈し、また、「記述式」を選んだ学生が希望すれば、成績発表後に一人ずつ研究室に呼んで答案の講評をしてやる。

### 九 学生にも自己にも「厳しく」

私は、学生にできるだけサービスはするが、その反面、学生に対してもけっこう厳しい。授業中に私語やあくびをした者はその場で立たせ、場合によっては退室もさせる。そのかわりに、「自己にも厳しく」をモットーにして、「最新の正確な情報をつねに提供する」よう心がけている。そして、そのためには、OHPのかなりの部分を毎年書き直す（国連加盟国の数や、ソ連邦→ロシアなど）だけでなく、授業の当日の朝刊に載った記事をただちにOHPに起こすこともあれば、ニュースの正確さを確かめるために外務省などに電話をかけることも珍しくない。

### 十 学生からのクレームに対応する

以上のように、私は私なりに授業に対して工夫も努力も

しているつもりであるが、それでも、学生の側から見ると不満な点も多々あるに違いない。そう思うので、一学期の終わる二週間前に学生からアンケート（無記名）をとり、それまでの授業に対するクレームを自由に書いてもらう。そして、次の週に、それらのクレームに対する私の考えを述べ、「もっともだ」と思われる点は、二学期からでも、早速改めることにしている。

最近の例を挙げると――

クレーム①〓OHPのシートをめくるのが早過ぎて、ノートがとれない。

私の対応〓(a)シートを平均十枚くらい減らす。

(b)ノートをとるべき時とそうでない時を、その都度をはっきりさせる。

(c)ノートに写させたいシートの場合は、時間をたっぷり与える。

クレーム②〓OHPを使うために、教室が暗くて、目が悪くなった。

私の対応〓従来のハロゲンランプ式のOHPの代わりに、光源が数倍も強いメタルハイランド式の新機種を教務課に頼んで購入してもらい、教室の照明を落とさなくてすむようにした。

講義を考える

# 研究と教育の同一性

／高橋 正治（清泉女子大学教授）

—

歴史学者のマルク・ブロックは『歴史のための弁明——歴史家の仕事——』の序の冒頭で、次のように言っている。

「パパ、歴史は何の役にたつもの、さあ、僕に説明してちょうだい」。このように私の近親のある少年が、二、三年前のこと、歴史家であるその父親にたずねていた。読者がこれから読まれようとするこの本について私の言いたいことは、この本が私の返答であるということである。というのは、一人の作家が博学の人々にも、小学生にも同じような口調で話すことができるということほど立派な賛辞を、その人のために私は考えだせないからである。少なくとも、一少年のこの質問を——おそらく私

は即座には彼の知識欲を満足させることに、十分な成功を収めなかったのだが——私は喜んでここに箴言として記憶にとどめておくだろう。たしかに、ある人々は、これを素朴なきまり文句と考えるかもしれない。ところが反対に、私には全く適切であるように思われるのである。このきまり文句の提出する問題は——このなだめにくい年ごろの少年の厄介な正直さはあっても——まさに歴史の正当性についての問題にほかならない。

それ故、歴史家は以上のようなかたちで、答弁することを求められている。彼は内心いささかびくびくせずには、それを思いきってやれないだろう。その職業に生涯の大半をささげた職人の誰が、自分の生涯を賢明に用いたかどうかを考えたとき、いまだかつて良心のいたみを



感ぜずにおれたであらうか。だが、問題は同業者組合的なモラルの小さな配慮をはるかに越えたものであり、そこには、我々の西欧文明がごとく関係しているのである。(讀井鉄男訳、岩波書店刊)

学問を進めていくべき究極のところは、本来初心として念頭にあるはずのものである。学問はもともと、素人の問題意識から発生して、素人の中に回帰していく性格のものであるので、生きた学問というものは、一般の人々とともに生活している感覚の中で行われるべきものである。研究者にとって、専門外の世間一般の人は自分の学問の究極を問う人たちなのである。それは自分の初心として出発してきたところであり、かつ回帰すべき目標でもある。我々が大学に身を置くということは、専門的なことを教えるということ以前に、教育の場にいるということから、学生とどのような生きた学問の初心に根ざした情熱をもち、人間としての平等意識の中で交わらなければならない。それは学問と教育の同一性を意味する。

## 二

次に我々は、中学・高校のことを理解しなければならな

い。受験勉強に追われて学生は、多かれ少なかれ神経症になっっているのではなからうか。本質から離れたところで、学習目的もはっきりしない状態で機械的に行われ、自分の経験を参加させてじっくりと考察・工夫する暇もなく、教えられた考察法の中で、考察することもなく学習を進めており、そのような過程で優秀といわれる学生であるために創造性に欠けるということも出てくるのである。そのままの学生を前にしてなすべきことを強要してはならない。学生の地平に立って、その過程がどのようなものであったかを本質的なところで話し合い理解することである。情性的に点数評価を見慣れていけば、頭のよしあしの差があるような錯覚を起こすであろう。成績が悪ければ頭が悪いと思いつい込み自滅していく。人間の脳は二〇〇〇グラムはあり、脳の成分に優劣があるわけではない。いやなことをすれば一時間で眠くなるのに、好きなことをすれば疲れもせず、徹夜もできるのが人間である。それぞれの活力を回復させることが肝要なことである。同じ質の頭は使い方によって差が出るのであり、これは我々の学問の方法の問題でもあるのである。

ある学生は二年次のとき、思わずリポートを一〇〇枚書いたことに心を開かれ、卒業論文で『源氏物語』に関する

もの四五〇枚、西脇順三郎の詩について二〇〇枚を提出した。お互いに生活の中で無意識にしこりとしていているものを除き合うということが、いかに重大なことであるかがわかる。頭がよければいい知恵が出る、というような神がかりのことを思い込んではどうしようもない。考えるといふことは、知っている知識を組み合わせて新しい結論を出す営みという、当たり前の基本的なことから積み重ねて自覚していくことから始めなければならない。自分自身を完全に活用する根拠を探るのである。学問では頭を自覚的に使うのであり、我々が実践していることを分析して伝えればよいのである。このような、可能性を見透かすことによって正常な状態を回復するように講義を組み立てることが、私の最も念願していることである。

### 三

考えるといふことは、知識・経験の組み合わせであるが、わからないことも、欠けていた一つの知識が加わることによって条件がそろい解決する。それはどこにあるかわからない。学問の発達した現在では、従来の専門内だけの知識では間に合わないことが多い。その可能性の確率を高めるためには、様々な専門家との交流の機会をもつことで

ある。

我々の小規模の大学では、まず教育の結合が容易であるので、その具体的な場として人文科学研究所が造られた。例会によって各先生の話聞き、専門としているテーマ・分野を確認し、日ごろの話題として話し合えるようにした。その成果は最初から上がった。第一回例会で私が話したとき、アラン・J・ターナー教授が、それはキーツですと言われた。無一有一無で、そのとき初めて *negative capability* ということに関心をもつことができた。私の「生成の論理」が西田幾多郎の体系にほぼ重なることを教えられたのは、哲学の小野寺功教授であった。

このようなことがあって、その成果は数人の間にまたくうちに広がった。それは我々の間に感動をもたらし、研究室に閉じこもる生活から、会話の場に引き出されることになり、激しい討論の中で、子供のよううれしきの込み上げる交わりをもつようになった。騒いでいるので学生も好奇心をもって見に来るようになり、研究室に入り込んで聞き始め、話し、我々の仕事の手伝いも買って出て、仲間に入るようになった。考えてみれば、我々も学生時代に立ち帰った振る舞いをしていたのである。学生にも仲間意識をもってもらったことは収穫であった。そこでこれをさら

に積極的に、講義の形で、研究室を教室へもっていったように考えた。できあがったものだけを話すということのほかに、研究の現在進行形の形で授業をしようということにしたのである。最初は哲学の小野寺功教授、近現代文学の武田友寿教授、それに古典文学の私と三人で、一般教育の中の「総合コース」の授業として、「日本を考える」というテーマで講座をもった。

授業は、三人の教師は毎回出席して、自分以外の先生の講義も聴講する。一時間の講義のあとは質疑応答・討論となる。進行の仕方によっては、前の講義によって次の先生は考えに修正を必要とすることも起こる。この問題も早々に起こった。私が第一回を話したとき、武士道のことが出てきて、私は武士道に対し批判的な態度をとった。ところが次の武田教授は内村鑑三のことを取り上げ、その根本に武士道の問題を当然のこととして置かれたが、私の武士道に対する考えと違っていたので避けて通ることができず、修正の必要を感じられ、次の講義の予定を変更して扱わなければならなくなり、一週間きりきり舞いをして準備されたということであった。真剣勝負とはこのことで、一人で考えを組み立てるのではなく、その過程に討論が割り込んでくるのである。何が起こるかかわからないので、一番緊張

しているのは我々三人であった。ときには授業のことも忘れて夢中で討論することもあったが、学生は興味をもって、生きた学習として聞いてくれていたようである。

小野寺教授は西田幾多郎の研究者であり、京都学派の方々からも注目され、アメリカの学会でも京都学派の人々と共に代表として発表して好評を受けている人であるが、学生からわかりにくいといわれ、どのようにしたらわかるように話すことができるかということに苦労されていた。わかりやすさの追求は、研究のうえで新しい発見と深化と直結した問題であることを自覚され、一層の研究の進展を實現された。

完成された綿密な論理は飛躍がなく、万人のものになるはずである。これはいままでの学問をさらに発展させる契機となるのである。そして一年の終わりに三人がそれぞれたどった過程の図式は、極めて類似したものであった。互いの研究に影響し合って一層の安定感をもった。四十名余りの学生は、要旨を記述し、自分の考えるところを加え、四〇〇字原稿用紙一〇〇枚以上にまとめて提出した。

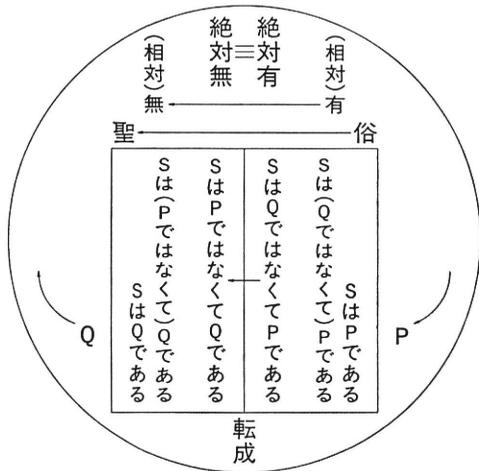
このことがあってから、学生と学問を通じての親密度を増し、仲間意識が強まり、大学生活がそのような形で展開するようになったのである。

これに味を占め、平成二年に第二回目として、前回の小野寺教授と私のほかに、シスター塩谷淳子教授にお願いで、「宗教と人間」というテーマで行った。講義内容は「人間の精神成長の問題を自覚の深化としてとらえ、存在の自覚への過程を考える」として紹介した。私は思考―思想―宗教という過程として考えているので、思考は変わりやすい不安定な考え、思想は個人の範囲では一定した考え、つまり「思想」の上には特定の名称がつく。特殊の名称がとれて普遍的思想となったとき、それが宗教ということになる。したがって普遍的真理を追究する学問は、すなわち宗教を目指すものと考えていた。そのような意味でこのようなテーマと取り組みたかったのである。

小野寺・塩谷の両教授はキリスト教神学の研究を進めている。私の「生成の論理」もそれらと酷似していた。私事になるが、私は文学研究の方法として、日本の古代中世の古典から「生成の論理」を抽象した。それまでの研究で一応すべて間に合うようになっていた。私は完成したと思っていたのである。ところが、その図は、図としては一部左右対称という点で欠点があった。しかし、間に合っていたのでそれにはあまり注意を払わなかった。七月初旬の暑いそれは、塩谷教授の講義の日であった。

日であった。話の中に、「出エジプト記」に出てくる「ありてあるもの」という言葉があった。ふと聞いていただけのようであったが、私は絶対無に對する絶対有という言葉の思いついた。それに従って、有の世界とだけ考えていたものが、相対有という言葉に変わった。にわかになら左右対称になったのである。文学研究をしていた者にとって、ある途中までの研究で事足りていた。しかし、それを図に表すと、その先の考察を促された。それだけでは止まらないのである。そこは哲学的な考察である。そしてこの最後のところは、まさに宗教の世界であった。そのところは抽象理論であって、まさに坂を転がる石のごとくに、あれよあれよと進展するのであった。その日は私の人生の大祭日であった。そのことについての説明をする余裕はないが、唐突ながらその図だけを次ページに挙げておく。

私は海軍予備生徒として出陣し、回天特攻隊に編入されるはずの訓練を受けていたことから、転換して文学部志望になり、哲学科ではなく国文科を選んで、「汝自身を知れ」というテーマで自前で考えようとしたのである。自分自身で納得のいくように独りで考え続けたのであるが、人生には意外なことが繰り返し繰り返し起こるものだと、つくづく感じている。



私はこの授業のおかげで画竜点睛ができたのである。実は偶然のことで、ここで書くのもわざとらしい感じがするのであるが、昨日、この授業に出ている卒業生から手紙を受け取った。授業で精神成長や生き方の問題を考える機会をもつことができ、弱い自分が力づけられ喜びを心から感じていた。しかし卒業して二年たったいま、実社会の中でつらい思いをし、自分との闘いに明け暮れている

が、あのときの力を借りたい。そこであのときのレポートを送ってくれるように言ってきた。四年次生に返却するのを忘れそのままになっていたのである。

#### 四

人文科学研究所はまた、学内の先生の交流に関する演出をするところでもある。春秋三回ずつ、土曜自由大学を開催している。一般のカルチャー講座と違って、例会の聞き手を拡大しただけである。自分のいまの学問が、どのくらい一般の人と語り合えるものかという厳しい実験なのである。あなたの専門に関して部外者の我々はこのようなことを聞きたいということで、テーマをこちらから要求していることも多い。それと取り組んで新しい道を切り開いたことに感動された先生もいる。

我々の大学は全体が研究所のようであらした学問ができ、だからこそ、そのまま講義の方法も本来的なものになることができただけである。学生も講義を原因とする交流を主とする本来の大学の姿をもつようになっている。

——それにしても、これは小規模大学で、学問の情熱と、すばらしい人格の先生方の集団であるからで、私はこの奇跡の中にいることを心から感謝している。

# 卓球

／ 荻村 伊智朗 (国際卓球連盟会長)

「モンタギュー伯爵様 ご招待状 次の日曜日の午後、ピンポンをいたしませんか。そのあと、ダージリンの新茶をご用意いたしております」

二十世紀の初めごろ、英国の上流階級の流行は、お茶会の招待状に「ピンポンの会」と書くことだった。いまも、無数の招待状が残されている。モンタギュー家の息子アイボアがもの心ついたところからの四半世紀、欧米は卓球ブームだった。

新世界アメリカ合衆国で、綿の長繊維を原料とするセルロ

イド球が発明された。コルクやゴムの塊を毛糸でくるんだボールを打ち合うゴシマは、あつという間に、セルロイドのピンポンにとって替わられた。たおやかなご婦人方には、柄の長い、羊皮を両側に張った軽いラケットで、音色も明るいラリーのピンポンがびったりだった。

同じころ、ピンポンの流行に感心していた日本人がいた。

明治三十五年、体育取り調べ係として英国に六カ月派遣された、体育学専攻の坪井玄道だった。文明開化を急ぎ、欧米



列強の日本進出にいかなる口実も与えまいとした明治新政府は、有為の青年たちを海外に派遣し、海外文化の吸収に努めていた。音楽取り調べ係として渡米した神津専三郎は、帰国して十二音階の音楽を教える学校を開いた。嘉納治五郎はスポーツを移植し、学校体育の場を活用して婦女子にも参加の機会を与えていた。

坪井がハタとひぎを打った理由の一つには、ピンポンは、老若男女を問わず普及できる、欧米エスタブリッシュメントの流行スポーツだったこともある。

帰国を前に、坪井は英国で一番有名なジェイクス社の卓球台・ラケット・ボールなどを三組求めた。帰路は船であった。インド洋を越え、長旅の末に横浜へ着いた坪井は、旅の疲れをいやすと、卓球台の試作にとりかかった。本郷は赤門の前、美満津運動具店が、坪井の指導のもとに、十台の試作に成功した。坪井は早速、自身が教鞭を執る東京女子高等師範学校・東京高等師範学校などで卓球を広め始めた。

卓球はこうして旧制高校、帝国大学、そして私学に広まり、やがて社会人クラブや官公庁、そして企業内スポーツへと波及してゆく。

坪井があとにした英国では、ピンポンは遊戯から競技へ発

展する。母のお供のお茶会でピンポン大好き少年になったアイボア・モンタギューは、ケンブリッジ大学生となり、大学卓球クラブのリーダーを務める。やがてモスクワ留学から帰った彼は、大学院学生のまま、一九二六年、ロンドンで九カ国の国際会議を招集し、弱冠二十六歳で国際卓球連盟を創設、初代会長に任ぜられる。以来在任四十一年、今日の卓球の「平和志向スポーツ」としての名声の基礎を築いた。

大正期に入ると、卓球用具メーカー三社の支配による三つの日本卓球協会が設立され、実学を巻き込んで対立し、ついには神宮大会参加を差し止められる事態を招く。

「家貧しくして孝子出ず」というが、大同団結がなった昭和十年ごろ、学生卓球界に偉才が現れる。天才にして努力家の早稲田の今孝、剣道から転向して学生チャンピオンになった関西学院の渡辺重伍、後に川崎製鉄の社長となり、日本卓球協会の会長を務めて第四十一回千葉世界選手権大会を成功させた東大の岩村英郎らである。

岩村らの学生卓球連盟幹部たちは、「目を世界に転じよ！」と大人たちの世界に警鐘を鳴らし、学生卓球ルールを国際式に変更する。これによって、日本の卓球選手の世界選手権大会出場は、名実ともに可能になってゆくのだから、岩村たち

の先見性はみごとであった。

二年後の昭和十三年（一九三八年）、ハンガリーの世界チャンピオンたち、サバドスとケレンの日本遠征が実現する。一月の寒い日、満場立錐の余地もない日比谷公会堂の舞台で、学生チームは思わぬ緒戦完敗に顔色を失う。見たこともなかったラバーラケット、シェイクハンドグリップ、そして消える魔球のフィンガースピンサービス。トップを承った立教大学の川村澄は、ケレンの最初の五本のサービス全部にノータッチの屈辱、そして惨敗。後にアジア大会監督として荻村・富田の世界制覇コンビを薫陶した川村は、舞台の袖で男泣きする。だが、後に球聖とうたわれる今孝が、第二戦からみごとな勝利を収める。そして、渡辺がこれに続く。

日本は勝った。しかし、欧州卓球の技術には目をみはるものがあつた。渡辺は伝統のペングリップを捨て、日本のシェイクハンドグリッププレーヤー第一号となる。多感熱血の学生卓球が日本をリードするかに見えたころ、太平洋戦争による中断が卓球界を襲う。

一九五〇年、「藤井選手の替え玉受験事件」が卓球界を震撼させる。日本選手権を四連覇中の天才藤井則和は、戦後の病苦に倒れた今孝の悲願「世界制覇」を実現できる最大のホープだった。初の全米遠征の直前、関学の卒業試験でのエー

スの不祥事で、遠征は中止され、岩村らが描いた『学生選手の世界制覇』は、見果てぬ夢に終わるかに見えた。

しかし一九五三年暮れ、日本卓球界は賭けに出る。翌五四年四月、卓球発祥の地、英国の首都ロンドンで行われる第二十一回世界選手権大会に、全員が無名の学生新人チームを日本代表として派遣することを決定したので。

紛糾した理事会で、豪気をもって鳴る名古屋の後藤理事は、反対派に対して言い放つた。「確かに日本卓球協会には金はない。だから、選手に集めさせればいいじゃないか。かくして当時一人八十万円、九〇年代の貨幣価値で一二〇〇万円の大金を、選手たちがそれぞれ冬空の街頭十円募金やカンパで調達することになり、辛苦の末、遠征が実現した。

「一生に一度の出来事だ。一年留年して、完全な準備をしよう」と、日本大学二年の荻村、専修大学二年の富田、三年の川井、大阪薬科大学の江口らが決議した。岩手大学の優等生の藤井基男は、「君は欧州型の練習相手としてどうしても欠かせない。君も留年しろ」と呼びかけられたが、彼は夜行列車で学年試験中を盛岡・東京間の往復を重ね、そのかいあって、留年はしなかった。

後藤は、学生選手たちの必死の錬磨と、世界を制する満々たる覇気を知っていた。そのくせに、出発を前にして新聞記

者たちにこう言った。「この連中は、ロンションだよ。えっ？ ロンドンへ行って、小便して帰ってくるだけさ」。満座の中での辱めを受けた若者たちは怒りを堪え切れず、「後藤を見返してやる！」と誓い合った。

後藤団長の背水の陣は成功した。心理的に千仞の谷に突き落とされた学生たちは自力ではい上がった。劣悪な対日感情が満場の観客を支配し、日本への嫌がらせも相次ぐ中で、平均年齢二十歳のチームは大健闘し、荻村の男子シングルスをはじめ、男子団体・女子団体の三種目に優勝した。春まだ浅いウエンブレーの氷雨の中、戦後初の日本人スポーツマンの英国遠征は大成功に終わり、敗戦にうちひしがれていた日本人の気持ち明るくしたのだった。選手たちは満場割れんばかりの拍手のうちで、モンタギュー会長から金メダルを、母君のスエスリング夫人から優勝杯を授与された。

猛烈な練習量を伝統とする学生卓球界は、その後も英才を送り続け、五〇年代から六〇年代にかけて、日本の卓球は世界に君臨し、技術情報の発信地となり、世界の卓球の発展に貢献した。

しかし、学園紛争が、猛練習の伝統を破壊した。日曜祭日の練習場は閉鎖され、ガードマンが深夜練習を謝絶した。学

生選手たちは最初の数年間、ジプシー行脚をして練習量の確保に努めたが、やがて少ない練習量になっていった。暁を卓球台の上で迎える練習熱心さは、学生卓球界ではいまや神話の世界。それとともに「勝てない日本」の時代が続いている。しかし、九〇年代に入って、十年前からスタートした早期教育の成果がはじまっている。

一方で、日本の学生卓球連盟が中心となり、世界の学生卓球界の交流が推進されている。コロンビア、UCLA、MIT、エール、オックスフォード、アルト・ハイデルベルグなど、欧米の大学との交流が、日本学生チームの遠征、相手校キャンパスでの対抗戦という形で盛んになってきている。

また一方では、かつての感激の遠征を共にした大学OB選手が中心になり、一〇〇〇名ほどの同志を世界に募り、貧困・政治的迫害・病气などに悩む昔の好敵手を支援する国際スエスリング・クラブも設立されて、二十五年を迎えた。ピンポン外交、統一コリア、南アフリカ組織の一本化など、国際平和への華やかな貢献の歴史の陰には、大学の枠を越えた同志的友情や連帯感が、表舞台に立つ役員たちを支えている。それは、一時期、同じ学生として自由に行き来し、切磋琢磨した体験と親近感がなせる業であろう。

# 温泉遍歴三十年

／原川 恭一（立教大学教授）



## か

これ四半世紀以上も前の話であるが、友と語り合い合って私は、「秘湯友の会」という会をつくり、意識的な温泉巡りを始めた。当時はまだ、昨今のように、「秘湯」という言葉が市民権を得てはいず、山峡やまがきに、山里に、海辺に、素朴な温泉があちこち点在していて、手つかずの自然が残っていた。

爾来私は、研究・授業の余暇を見つけては、会員と共に、あるいは一人で、もしくは二、三人の仲間と連れだって全国を巡り歩き、訪れた温泉の数は一、九〇〇カ所を優に超えるにいたった。十年ほど前、アメリカ南部に滞在したおりには、アパラチア山脈の山懐深く分け入り、外国の保養温泉を体験してきもした。けだし、病膏肓に入るといこうらだろう。

長いと言えば長いこの温泉遍歴にあつて、だが、不思議なほどに縁の薄い温泉というのがいくつもあった。藤原審爾『秋津温泉』の背景となつた奥津温泉に隣接する、般若寺温

泉もその一つである。中国山地から流れ出る吉井川河畔、奥津溪谷のほとりにひっそりと湯煙を上げるこの温泉は、かねてから泊まりたいと思いつつも泊まれなかつた幻の温泉、いわば蜃気楼のような一軒宿だった。一度は、みごとな「扇天井」の一室に旅装を解き、湯にまでつかりながら、豪雨による増水のために宿を替え、またもう一度は、予約なしに立ち寄つたため、空き部屋がなく涙をのんだ。

九九二年秋たけなわのひと日、だが私は、ついにこの宿に一泊する機会を得た。肌を染める鮮やかな紅葉の下、岩をかんで流れ下る奔流。その川中の小高い岩盤の上に建つわずか三室の離れ。大気は清澄で、食卓を調える女将も、変わらず雅びていて美しかった。文字どおりの蓬莱境である。聞こえるのはただ激しい水音だけ。日常の営みは遠く、そこにはとげとげしい文明も、人のさかしらもなかつた。無量の寂寞の中、暮れなずむ四囲の山々に目をやりながら、私は、来し方遠い日々にしみじみと思いを馳せた。



# 英泉・広重の 中山道六十九次散策

／永沢 満（豊田工業大学副学長・教授）

## 広

重の東海道五十三次の版画は有名である。旅行が非常に困難であった江戸時代の人々が、この版画であこがれの旅に思いをはせたことは想像にかたくない。東海道五十三次の商業的成功のあと、中山道六十九次の浮世絵版画も出版された。今度は英泉・広重の合作になった。

中山道は、東海道とともに、江戸と京都を結ぶ日本の大動脈であった。東海道が日本橋の基点から品川方向に向かい、海に沿って進むのに対し、中山道は日本橋から神田に向かい、信濃路・木曾路を通る山の道である。東海道は近代になり新幹線もできて大きく変貌したのに対し、中山道はいまなお江戸の香りを残し、有名な木曾路（妻籠・馬籠）をはじめとして散策の名所を多くもっている。

私は四十代のころ、ひどい不整脈に悩まされた。その克服のために、英泉・広重の版画帳を持って、よく中山道を散歩した。初めは、昔をしのぶとシャレたわけだが、そのうちに本性が出て、この画はどこを写生したのかと疑問をもつようになった。研究者として

の悲しいサガと思うこともある。各宿場を最低五回は歩き回り、その記録を一冊の冊子にまとめたころには十年もの年月が経過し、不整脈もほぼ治っていた。

## 趣

味の研究は楽しい。「広重はここに立った」と自分で確信したときの気分も爽快だが、人に説明するのも楽しい。来客に写真と版画を見せて、次のように同意を強要する。例えば、広重の小田井宿である。「この画はどこか変でしょう。旅人が野原を歩き交っている。なぜ、街道ではなくて野原を歩いているのでしょうか。それは中山道の道筋を見れば理解できる。中山道は小田井宿に入る前に弓なりに湾曲している。天気の良い日にはショートカットしたくなるのは人情である。この辺で撮った山の写真は画とそっくりでしょう」。これは簡単な例である。

得意とする場所は大宮・熊谷から守山・天津まで三十宿ほどである。特に英泉の盗作問題は面白いといわれる。しかしまだ全部を話したことがない。いつもエンドレスになることを心配して、家内に止められる。

# 「日本発」に燃える

ジャーナリスト 大宅 映子さんに聞く

聞き手／関谷 亜矢子

(NTVアナウンサー)

関谷 ICUを卒業されたのは何年ですか。  
大宅 一九六三年です。

## ICUでの生活

関谷 私は八八年ですから、二十五年先輩ですね。ICUではどんな学生生活でしたか。

大宅 一年生二〇〇人ぐらいしかいなかったわね。女子が三分の一ぐらいかな。私のクラスは二十人ぐらいで、女子が五人。NHKの平野次郎さんは同じクラスだった。二十人しかないし、かなり仲よかったわね。

一年生の一年間はフレッシュマン・イングリッシュがあつて、ほとんど英語だけだったんだけど、AFSで留学に行ってきた人は英語の実力が違ったね。当時は、アメリカの州で、日本人が数人という状態ですものね。

日本語は一切使えないし。だから、今の一年留学よりうまくなったんだと思うわよ。私の友達にも同時通訳とか、翻訳やっている人が多い。

関谷 留学するおつもりだったのに、お父様に反対されて……。

大宅 そう、させてもらえなかった。いままさに悔やんでいるのね、私。一年間留学し

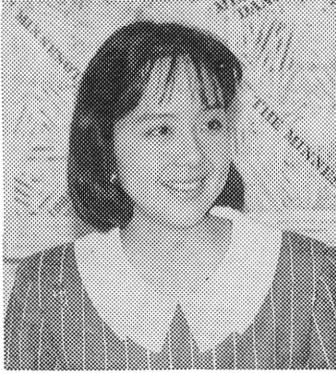
ていたらね。住んだと住まないのは大きな違いですよ、英語に関していうと。しかもICUに入ったら、英語のほうがうまいといったような人がいっぱいいるわけじゃない。私の学年の総代は、卒業式に英語で答辞をやっちゃったのよ。

かわいそうなのはうちの母で、私が未っ子なんで最後の卒業式だから泣きましょう、と思ってきたら、答辞が英語だったわけ。(笑) それでなんなのこれはって、がっかりしてた。まわりにうまい人がいると、しゃべりにくいもんですよ。それにICUって辞書を引いて、どうとかがつていう教育しないでしょ。大意をつかんで、速く読まなきゃ追いつかないでしょう。英語を恐れはしなくなっただけど、単語が増えた気がしないわね。でも楽しかったですよ。

関谷 ICUで四年間過ごされて、後々影響が出ていることはありますか。

大宅 あると思いますね。私はもともと個性を主張するほうで、みんなと一緒のほうに入るっていうことはしない子だけど、それがよけい強化されたと思います。自分で責任さえとれば、何やろうがいいっていうことですよ。日本と日本以外の国の差というのはそこ

せきや あやこさん



おおや えいこさん



にあると思うわけ。

私は高校時代にロカビリー少女だったけれど、学業をほり投げてたのではなく、学業はやったうえでロカビリーをやるのだから文句言わせない。ICUに入って、いろんな国から先生も、学生も来てるし、いかにもみんなが一緒じゃないという体験ができた。日本というのは何しろみんなが同じとこを見つけて合って、会った途端に「学校はどこらですか」「ご出身は」と、どこかに共通点を見つけて、それで「この人とは大丈夫」という関係をつくろうとするじゃない。そういう日本という国と、どこのだれかわからない人ともちゃん

と恐れずに付き合っている、それで社会全体をまとめているアメリカという国は、これは違うわいと思うわね。もともと私はそういう子だから居心地悪くなかった。

関谷 学生時代は楽しかったでしょうね。

大宅 楽しかったですよ。私はテニス部に入っていて、よく遊びましたね。いまだに「大宅組」とか、親分とかいわれています。

関谷 そのときのお付き合いがいまでも続いているのですか。

大宅 入学二十五周年記念なんていって、戸隠へ一晩泊まりの旅行をしたり……。

関谷 いいお仲間ですね。ずっと共学に通われて、男の子のお友達のほうが多かったと伺っています。

大宅 中学は国立、高校は都立駒場高校なんですけど、女の子のほうが多くて、成績もよくて、男の子は少なくていじけてるというかわいそうなパターンだったから、私は男の子たちの親分をやってたわけ。

#### 女だ男だの意識は

関谷 女だ男だを意識されなかつたのですか。

大宅 ですね。高校もだいぶん影響ありますね。男と同じにしてくれて叫んでいる女の子たちっていっぱいいるでしょう。あの人はいい男に出会わなかつたか、女だからって虐げられてきたわけよね。私は女だからって虐げられたことはないから。

関谷 うらやましいというか、たぐいまれという感じがします。

大宅 男と同じレベルまでいったって、うれしくもなんともないじゃない。女は女で男と違うんだから、男と同じことやっただけじゃ必要十分ではないと思ってるわけ。

関谷 違いを認めなければいけないわけですね。

大宅 それぞれのよさを生かして、はやり言葉じゃないけど、共生するのが大人の社会でしょう。

関谷 ということを私ぐらいの年齢になって、気づくと思うのですが。

大宅 中学ぐらい、もつと小さかったかもしれないですね。とっても変な子だったと思う。なんでも一人で決めて一人でやっていたから。末っ子だったせいもありますね。小学校四年生のときに小津安二郎の映画を独りで見に行っちゃったり。(笑)変なやつよね、考えてみたら。

関谷 小さいころから自然に自立していたのでしょか。

大宅 そうですね。末っ子というのもすごく楽だったし、女三人目でもう勝手にしろというスタイルでしたからね。

関谷 お父様が男のお子さんを最後にもう一人、なんて思っていたらお嬢さんで。

大宅 お気の毒に。

関谷 でもやっぱりお父様の影響は大きいでしょうね。

---

## 父、大宅壮一の影響

---

大宅 そうですね。一緒にいる間とか、若い間はわからなかったですけど。私のもの見方は、親父の影響を知らず知らずにかけていますね。

自分で自分を褒めるのは変だけれど、ここはこつちがゆがんでいるぞ、こつちもこつちゆがんでいるぞという総合判断が、私は自然にできる。どうもできない人が世の中にいっぱいいるらしいから、これはたぶん、親父からもらったものだろうなと思いますね。

関谷 お父様はバランスのとれたものの方をしていらつしやつたなと思われまますか。

大宅 うちでは新聞を六紙くらい取っていた。同じ事件をこの新聞はこう書いてるけど、これはこんなふうに書いてるぞと、何かのときに言われた覚えがあるんです。普通の家だったら新聞は一種だろうから、書いてあったことはまず信じるでしょう、私は信じないもの。全部自分の目で縦横斜め見たうえで、この辺が合ってるんだろうな、と考えるわけ。親父が新聞だの雑誌だの、赤鉛筆持って線引きながら読んでるのを見ていたし、活字の中

のありとあらゆる高等なものから、変な汚い情報まで全部うちには入ってて、どうぞご自由に、と見せられていたし。

関谷 子供から隠そうとなさらなかったのですか。

大宅 なしなし。いいテレビだけ見せようというのは全然ダメ。変なものを読むから、いいものと悪いものの区別がつくようになるんで、それを判断力つていうのよ。変なものや、危険とか誘惑とかが世の中にはあるんだから、なるべく早く早く体験させて免疫をつけさせて、自分で拒否するようにさせないと。それが自立でしょう、一人前の人間の。

関谷 お父様は、そういうものにお子さんをさらしていらつしやつたのですか。

大宅 そうそう、野人ですから。

関谷 雑草教育というふうにおつしやつていますよね。

---

## 親父の存在

---

大宅 育てられてるときは頭にきましたね。自分が手をかけられないことを正当化するために言ってると思ったもの。全部母任せて、何もしていないんだから。でも親父って悲し

い存在なんですよ、たぶん。いることに意味があるの。それらしい電波を醸し出していいばい。」「お前をこへ座れ」と言つて、人生の訓を垂れたりする必要はないですよ。きっと親父の存在なんか、死んでからじゃないと正しく評価されないとと思うのよ、かわいそうだと思うけど。

私たちが「うちには親は母親しかいない」みたいなことを言つたら、親父はすごく悲しそうな顔してたけど。

関谷 お父様と論戦を張れたのは、お子さんの中でも大宅さんだけだつていうふうに伺っていますか……。

大宅 まあ末っ子だからね。

関谷 そういう中でICUを選ばれて、卒業されたわけですが、なんにも疑問なく働こうと思つていらつしやつたのですか。

大宅 何しろ自分の食いぶちは自分で稼がなければいけませんと思つていた。でもなかったのよ、就職口が。それで大学院へ籍を置いたの。何しろ籍がないと格好が悪いじゃないですか。だけど三カ月でやめちゃつた。

関谷 それで、PR会社でアルバイトを始められたのですか。

---

## 仕事と家庭

---

大宅 就職口を探していたときに、アルバイトでよかつたら来ないかと言われて。

関谷 そこで活路を見いだされたのですか。ご自分がよく生かされる部分をかぎ分ける能力に優れていらつしやいますね。それから二十三歳のときにご結婚されました。

ご主人は、女性が働くことになんの違和感もなく、自分のことは自分でおできになるそうですね。

大宅 お母さんが偉かつたんでしようね。

関谷 女性が働くということが珍しかったところに、結婚しても仕事を続けられたんですね。

大宅 結婚して辞めるかという話は一切出なかったのよ。たまたま波長が合うから結婚することに決めただけれど、私は会社へ入つたばかりだったし、辞めるといふ話は全然なかった。ただど疲れましたね。仕事も、結婚生活も新しいわけて、本見ながら料理はするわ、掃除はしなきゃいけないわ、洗濯機回さなきゃいけないわつて。くたびれ果ててしまいました。

関谷 家事は大宅さんがなさつたのですか。

大宅 そう、ちょうどそのころ共稼ぎ論が出始めて、「月水金は私がやるから火木土はあなた」という分担論があつたんだけど、「お手伝いしていただいて、仕事と家庭が両立する」なんてイヤだと思つたから、私がしましたよ。明治の女から育てられたのを引きずつてるから。そのかわりご本人が自らのご意思でお手伝いくださる分には、ありがたくお受けする。でも「私だつて仕事をしているんだからあなたが手伝うのは当然よ」つていうのはイヤで、余力があるから仕事をするんだというふうに思ひたかつた。

関谷 この間の「国民生活白書」にも不思議なことに、夫の条件に家事ができることを挙げている女性つて少ないです。女性が働きたいという意識はすごく高いけれども、男性に家事を求めていないですね、本音の部分では……。

大宅さんは、お子さんも育てながら、しばらく専業主婦になられたのですが、まだお子さんが二歳ぐらいのときに会社をつくられたのですか。経営者でもあり、お母さんでもあり、奥さんでもあるわけですが、どうやってマネジメントしていらつしやいますか。

## 優先順位とバランス感覚

**大宅** それはですね、優先順位ということ

ですよ。日本の場合、優先順位というのと、いほうだけ取って、あとは捨てるというような感じになるでしょう。そうじゃない。やりたいことがたくさんあるならば、そのときどきで擦り合わせるの。子供が小さいときは親として扶養の義務があると思っておりますから、母さんが一番ですよ。いまでもそうです、本的には。気持ちのうえては私の役は母さんだと思っています。子供たちは「大きなお世話だ」って言いますけどね。親はなくても子は育つと本人たちは思ってるみたいよ。

**関谷** その当時は、お母さんの部分が侵されるようになったら、それ以上のことはなさ

らなかつたのですか。

**大宅** 子供が小さいころは、基本的には夜に仕事はしないと決めていましたが、座談会などの仕事が入ってしまいますよね。週に二回ぐらいは書き置きをして出ていっても、子供たちの顔つきは変わらないけれど、三回目ぐらいになるといやーな顔をするわけ。これは夜に仕事を入れられないな、と感じ始

めたら、「ごめんさい」と断る。

仕事を受ける時点で、そのときの一番大事なものを侵す危険性があるほどのことはしないという優先順位ですよ。

**関谷** バランス感覚で判断されたのですね。

**大宅** テニスをやめて三万円もらうよりはテニスのほうがいいと思うから、基本的には土・日は仕事をしません。私が過労死するまで働いたってだれも褒めてくれるわけじゃないでしょう。

**関谷** スーパーレディーといわれるのは嫌だとおっしゃるけど、仕事もでき、お子さんも育てていらして、すべての役割を楽しんでやっていたら、いい点がうらやましいと感じるところですね。それを可能にするには、考え方を変えないといけないでしょうね。

**大宅** 私は、女の人が社会へ出ていくのは大賛成。亭主一人と子供一・五三人のために人生八十年分のエネルギーを使えるわけがないから、何か社会との接点があったほうがいいと思う。問題はその働き方。男と同じ働き方をして、総合職になったら過労だというのは、バカげてると思うわけよ。男の働き方がおかしいじゃない。五時から働くのはやめて、五時には帰れるようにしようよ、という

パワーになってほしい。それを声にするためには、数が必要なんです。働きづめに働いて、退職したとたんに、産業廃棄物だとか、粗大ゴミだとか、ぬれ落葉だとか、ワシ族だとか、言いたい放題言われるなんてあまりにも寂しいじゃない。いまの状態はあまりにも会社に縛られていると思う。これを、時短と称して労働省が旗を振るというのは、私に言わせるかどうか考えても変です。「地域でこういうこともやりたいし、子供とこういうこともやりたいのに、会社に拘束されていてできない。しかも月給が十分ではない。交際費はいらぬいから、給料を倍にしてくれ」という声が、労働者の側から上がってこないのが私は、いいと思いません。

## 第三次行革審の専門委員になって

**関谷** そうですね。ところで、第三次行革審の専門委員になられましたね。もう私なんか大変期待をしております。

**大宅** ほとんどむなしなんですよ。諸恵の根源は、お上の大きなお世話だと私は思っています。こちらの生活者も悪かったの。お上がいいと思うものを、いいと思う数字のと

ところに並べてくださいと頼り切ってきたわけだから。それがいろいろなあかになってしまった。本当に生活者のためを考えてるお上というのはないんですよ、私に言わせれば。文部省は生徒のことを考えているのではなくて、学校の運営と先生の処遇を考えている。厚生省だって患者のことを考えていると思えないもの。だから私たち一人ひとりはお豊かさを実感できない構図になっていて、よっぽど数多くの声を出さない限り変わらないでしょうね。行革審といっている、役所はいままでもっている既得権を捨てるということとはあり得ない。

**関谷** 生活者としての目を生かしながら、風穴をどんどん開けていってほしいですね。

**大宅** 豊かさの実感というのは何かと違うときに、数字とか金とかそういうものじゃない。そういう数字に現れないところにある。季節感とかね。それなのに季節感を取っ払って、一年中ナスやイチゴが手に入るということがいもんだと、やってくれちゃったわけですよ。曲がったキュウリもダメ。確かに曲がったキュウリを並べたら買わないらしいのよ、消費者が。

**関谷** そうなんですってね、買わないから

ますすぐなキュウリを作るんですよ。まっすぐなキュウリを作るんですよ。大宅 スーパーに並べる前に、どれだけコストがかかると思う。いかに手間と無駄をやるか。割りばしどころの話じゃないですよ。

**関谷** 先ほど、数のお話がありましたけれど、アメリカには、女性があと何人いなければいけない、何%いなきやいけないという、いわゆるアフアーマティブ・アクションがありますね。

**大宅** 私はあれは賛成じゃない。逆差別だと思ふ。アメリカの活力を阻害した一つの要因。だって、女性だからということだけで明らかに劣っているのを持ち上げなきやいけないというのは、やっぱり変ですよ。

**関谷** 能力のない人が登用されて、やっぱり女はダメだと言われてしまうわけですね。

**大宅** 政府の審議会等が、女の人を一五%入れようといつて旗印を挙げているわけです。私は「婦人問題行動推進計画会議」の参与になったの。でも、この女性のこういう経験とか知識とか判断力が必要で、この審議会とって有用だと思うから、入ってくださいというなら話はわかるけれど、生物学上女だから入ってくださいというのはおかしい、それ

上の差別はないと怒ったわけ。「女ならいいんですか」と言ったら、「そうだ」と言つたのよ。

**関谷** そんなことを言う人がいるんですよ。

**大宅** いたんですよ。バカバカしい話がいっぱいあるけれど、おしなべて一五%女を入れるという話は、私はどうしても納得がいかない。私たちより一つ前の世代の人たちは、男と女と分けて教育されてきているから、男並みという人たちが多いのね。どうしてあんなふうに言うんだろうと思ふわけね。そんな言い方は、男の価値基準に引きずられてると思ふ。私は、「男と女は違うじゃない」と言つたのよ。男はどう逆立ちしたって人間製造できないし、しかも本当に自分の子かどうかわからないのを育てているんだから、気の毒な動物だと思ふわよ。(笑)

**関谷** アメリカだと、逆に小さいころから違ふということを持た込まれますよ。でも機会が平等に与えられます。その中でどういう結果が出ていくかが問題なんですよ。

**大宅** 教育の場が仲よしごっこをやっているから、困るよね。日本が世界に貢献するとか、共に生きるとか、スローガンは立派だけれど、本当に何ができるかといつたら、なんにもことを明確に言っていないし、言えないし、

リーダーはいないし。いまのままの教育制度  
だったらリーダーなんか出るわけないもの、  
出たらつづされるんだし。

### いまの大学は

関谷 いまの大学に対してはどういうふう  
に思われますか。

大宅 大学は最悪でしょう。能力的にも、  
施設の面でも。昔に比べて教育に関しては、  
全くインフレです。

関谷 教育のインフレ、そうですね。

大宅 明治の活躍した人はすごいじゃない、  
エリートだったんですよ。でも、エリートな  
んで言っただけで、冗談じゃないという変な  
平等主義が続いてきたわけ。でもエリートを  
育てないと、責任ある国家運営をする人た  
ちが出てこないのよ。

関谷 いまの大学に、提言、あるいは苦言  
などおありですか。

大宅 もう大学まできたときじゃ遅いから  
ね。小学校から変えてもらわないと。大学が  
なんのためにあるか、なんのために親が子供  
たちを無理して大学へ行かせるのかというの  
も考えたほうがいいと思う。昔は大学の先生

はちゃんと尊敬されたんですよ。いまや数は  
増えちゃったわ、ろくでもないのが大学の教  
授になってるわ、そうすると尊敬もされなく  
なっちゃうでしょう。尊敬されるべき職業と  
いうのはあるはずなのよね、看護婦さんとか  
お医者さんとか警察官とか。それがみんなサ  
ラリーマンにされてしまったでしょう。先生  
だってどう育っていくかわからない子供たち  
をお任せするんだから、もっと給料も払わな  
きゃいけないだろうし、待遇をよくして盛り  
上げていくようにしないと。そうすれば、ち  
やんと責任をもつてやってくれるものだと思  
う。

関谷 大変なだけで、尊敬されなかったら  
なり手がいないですよ。

大宅 結局、企業へ行ったほうが給料も多  
いわ、処遇もいいわって、そちらへいけない  
人が先生になっているんじゃない、それはいいわ  
けないでしょう。そのよくない先生たちをど  
うにかうまくやろうとすると、全国統一で管  
理するという話しかなくなっちゃう。そうす  
ると文部省がしやしり出る。ほんのちよつ  
とていいから、エリートとか、変わったやつ  
とか、面白いやつとか、できるやつを認めて、  
皆で伸ばすようにしないと。

関谷 お話を伺っていると、エネルギーを  
すごく感じます。お嬢さんにとつては、誇ら  
しいお母さんでしょうね。フアッションでも  
おしやれでいらつしやいますし。

大宅 娘たちはそれが一番うれいみたい  
ですよ。お母さんからいい影響受けたことは  
なんですかと聞かれて、おしやれだと答えた  
んですけど。もうちよつといいこと言つてく  
れないって言ったんだけど。(笑)

関谷 楽しんでいらつしやるんですか。

大宅 スタイリストをつけているんですか、  
と言う人がいるけど、こんな楽しいこと人に  
任せられませんよ。自己主張の一つだからね。

### 女性と結婚

関谷 結婚に関しては、九割の女性が結婚  
したいと思つて、子供も欲しいと思つてい  
るんだけど、実際は生んでも一人、逆に生  
まない、結婚もしないという人が増えていま  
すね。少子社会なんていわれています。最近  
の女性と結婚についてどう思われますか。

大宅 客観的に見て、結婚したほうがよく  
なるということがない。給料は全部使つて好  
きなことができて、海外旅行だつて行けるの

に、そういうのを全部捨ててどうしても一緒にいたい男がいらないんだから。それはしないだろうなと思います。経済審議会で、男に魅力がなさ過ぎるからだと言いましたよ。子供は生んでくれないと困るから、育児手当を五〇〇〇円増やすなんて、冗談じゃない。五〇〇〇円増えたから子供を生むなんていうものじゃないでしょう。この人の子なら生みたいと思うから生むのよね。私は結婚しないで独りて生きていくほど、自分が強いと思えないから結婚したけど、先ほどのお父さんの話と同じで、亭主もいることに意味があるんですよ。何かあったときに相談できる相手がいるかないか、というのは大きな違いです。友達でもいいという人はいるかもしれないけど、ちよつと違うだろうなと思うからですよ。四十になろうが五十になろうが、私は独りて生きていきますというだけの自信がある人はいないんだけど。だから、結婚する気があるなら、しないで頑張ってるよりは、したほうがいいですよ。

**関谷** 仕事の仕方についてはどうしてしよう。

**大宅** ある時期、仕事の道が細くなつてもしょうがないと思う。ただ、全部切っちゃうと社会復帰することがすごく難しいから、ち

よつともいいからつなげておくといいでしょうね。そうすると戻りやすいですよ。形を残しながら、もとの社会的な何かとつながってるというのは大切でしょうね。でも子供が二つになるぐらいまでは家にいる、という選択があっても私は別にかまわないと思う。子供にとつてもいいだろうし、いまなら戻れるようにやってくれている職種も、会社もあるしね。妻と仕事は両立するんですよ。問題は、母さんと子供なんです。子供というのは扶養しないと、少なくとも一年間はでしょうもないわけだから。最近はお母さんに預ける人が多いけれど、施設がもつと充実してくれないとダメね。

**関谷** 女性が望むことのトップは保育施設の充実と、労働時間の短縮でしたが、確かにそうですね。

**大宅** パートタイムがダメだとと言う人いるけど、あれは女性側のニーズに合った働き方なんです。フルタイムじゃないとともな就職じゃないみたいなのは私はとらない。ただ、権利はある程度保障しておいてもらいたいと思う。逆に働く側の意識を変えてもらいたいのは、一〇〇万円以上稼ごと扶養家族から外されるからといって、九十何万

円で働くのをやめるといふ根性はやめていたでいて、一〇一万円働いて税金払うというぐらいいやないと、女の人が社会へ出ていった意味がないと思うのです。

## 今後のプラン

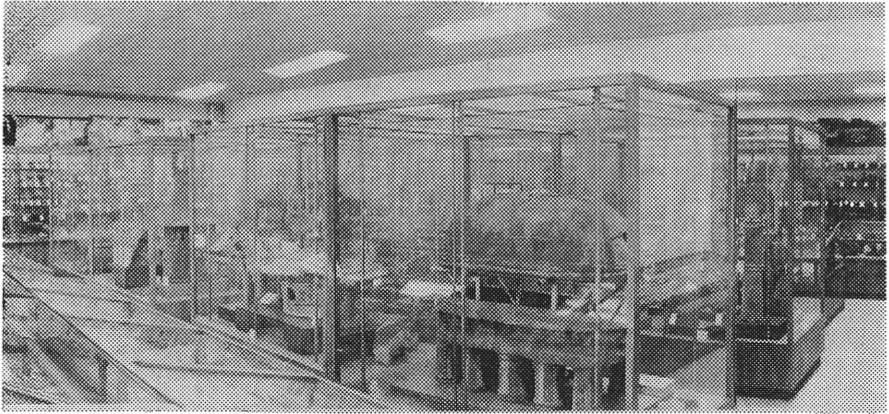
**関谷** 最後に今後のプランとか、夢をお聞かせください。

**大宅** 日本発の情報なり意見なり、説得術はどうしても必要だと思つています。情報量からいって、日本はいまだに輸入するところか、考えてみよう、よそはどう見ているか、みたいな。テレビなんかを見ていていつもイヤだなあと思うのは、日本の国の問題なのに外国人を呼んできて、「外から見えてどう思いますか」と必ず聞くでしょう、あれは恥よ。なんてそんな大事なことと外国の人に聞くかね。もつと日本発をもつて外へ行きたいわけ。

**関谷** いろいろとそそのための蓄積をされているわけですね。同じ女性として、いつも目標にしている方ですので、期待しています。

**大宅** そちらこそ頑張ってください。

**関谷** どうもありがとうございます。  
(一九九二・十一月十六日 大宅映子事務所)



私立大学の博物館

③

## 國學院大學考古学資料館

／青木

豊

(國學院大學考古学資料館学芸員)



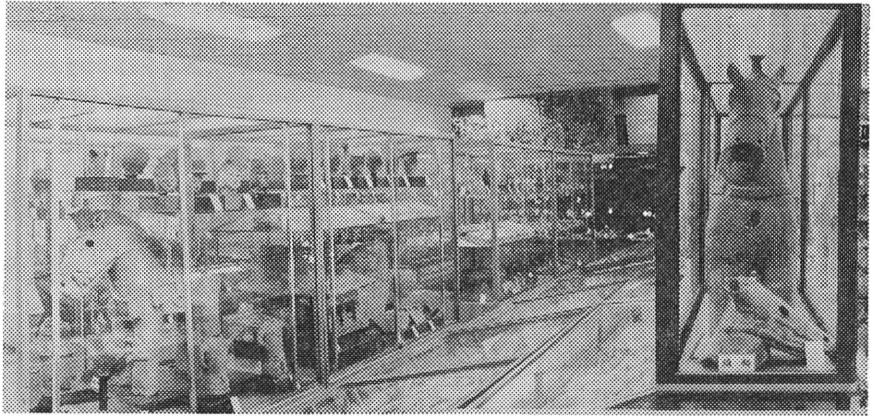
### 概要

國學院大學考古学資料館は、昭和三年四月に、現在本館名誉館長である樋口清之博士により、本館の前身である國學院大學考古学資料室として開設された。

昭和二十六年に博物館法の制定に伴い、早くも翌二十七年に博物館相当施設に認定され、昭和五十四年にはさらなる発展を期して、國學院大學考古学資料室から同考古学資料館へ名称を変更し、現在にいたっている。

本館は、國學院大學に付属する施設であり、考古学・博物館学の研究機関であるとともに、本学の考古学・博物館学専攻生の実習の場としての役割を果たしている。さらに、考古学・博物館学の一般社会への啓蒙にも努め、無料公開はもちろんのこと、一般市民を対象とした公開講座も開催している。

収蔵資料は、主にわが国の旧石器時代遺物・縄文時代遺物・弥生時代遺物・古墳時



代遺物・歴史時代遺物等の考古学資料を中心とし、それに国外考古学資料・民俗資料等も収蔵し、収蔵点数七万余点を数える。

展示室には常時約四〇〇〇点余りの資料を展示し、旧石器時代より歴史時代まで時代順に実物資料展示を基本としている。展示にあたっては、不特定多数の研究者・参観者の要求に応じられるよう一時期・一地域に偏ることのないように心がけ、収蔵展示としている。

次に、本館所蔵の代表的遺物の紹介を行う。

#### 徴隆起線文土器

本資料は、長野県須坂市石小屋洞穴出土で、縄文時代早期に比定され、わが国の最古の縄文土器に属する。

縄文土器は、わが国の歴史上最初の土の焼き物であり、その出現は革命的な事件といえるものであった。縄文土器出現以前、すなわち旧石器時代は、物を煮沸する容器がなかったので煮沸行為はなく、焼くか生で食する以外に方法はなく、おのずと食物対象も限定されていた。今日の日常生活の中でなべ・かまのない生活を想定すれば、縄文土器の有する歴史的意義がいかに多大であったかが理解できよう。さらに加えると、生食が困難な野生植物類や、焼くには不適當であるドングリ・トチ・カシといった粉食類も食物対象となり、その食物範囲は大幅な拡充をもたらすものとなった。

このような、土器使用による食物資源の多角的な利用と効率的な摂取は、縄文時代以前においては日々の食料獲得のためにもつばら費やされたエネルギーを一部温存し、生活自体に余裕を生じ、ひいては縄文文化の内容充実の大きな原動力となってい

微隆起線文土器



ったのである。

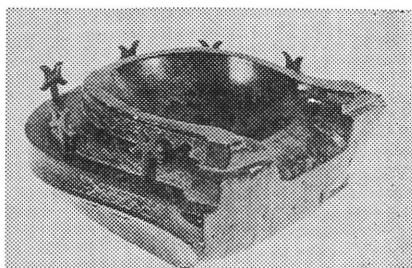
また、食料の増加は、人口増に直結するものでもあったことはいうまでもない。

### 石枕

本資料は、千葉県市原市姉ヶ崎二子塚古墳出土で、古墳時代（六世紀前葉ごろ）の所産で、国の重要文化財に指定されている。

石枕は、古墳に埋葬される遺骸の頭部を載せる目的で作られた石製の枕で、上面に馬蹄形のくぼみが設けられている。石枕の周円は三段の階段状に削り出され、その側面に直弧文が

石枕



描かれており、ほかに類例を見ない極めて貴重な資料である。直弧文とは、直線と弧線を組み合わせたわが国独自の文様で、古墳時代の石棺・大刀・鏢・埴輪等に表現され、その目的は特殊な呪術的意味を込めたものと考えられているが、その詳細はいまだ不明な文様である。

人と枕の関係をみると、まず人は、睡眠をとるとき枕を使用する。これは人間だけの習慣でもある。次に前句の実利面だけではなく、人間の最も重要な部分である頭に魂が宿ると考えた古墳時代人の産物でもあったのであろう。

すなわち、まぐらの語源は神霊が宿る——真座——であったと理解されるところから、死後の世界へも枕を携えたので

あろう。

### 埴輪馬

本資料は、埼玉県行田市出土で、古墳時代後期（六世紀）の所産である。

埴輪は、古墳時代後期になると関東地方でも盛んに作られるようになり、その数量は爆発的に増大するとともに、人物・動物・家・武器・武具と種類も増え、なかでも動物埴輪は馬・鹿・猿・犬・水鳥・鶏とバリエーションが豊富である。特殊などころでは、応神天皇陵の周濠から一般にいう埴輪とはやや異なる小形土製品であるが、鯨・イカ・タコ・フ

埴輪馬



グなどが検出されているのには驚かされる。

埴輪は、いうまでもなく日常生活遺物とは異なり、古墳の葬送の儀礼品として造形されたもので、なんとなく稚拙でユーモラスであり、牧歌的ともいえる情感さえ漂い、見る人を魅了する美しさと素朴感が存在する。

埴輪馬に関する記事が、『日本書紀』の雄略天皇の項に記載されている。概略は次のとおりである。

河内飛鳥戸郡の人・田辺史伯孫が、古市郡の人・書首加竜の妻である自分の娘のもとに孫の誕生祝いに行った帰りの夜道、誉田の応神天皇陵のほとりにさしかかったとき、赤毛の馬に乗った人に出会ってその馬の立派なものにほれ、馬を取り替えてもらい、喜んで家に帰った。ところが、朝になって昨夜の赤毛の駿馬が土馬に変わっていることに驚いて応神陵に行ってみたところ、昨夜取り替えた自分の馬が、陵側に立て並べてある埴輪馬に交じっていたというものである。

古墳時代の馬は、農耕馬ではなく貴人に乗せる乗馬であり、戦闘に用いる軍馬であって、当時の社会においては極めて重要なものであった。いずれの埴輪馬を見ても、高くたてがみを刈り整え、面繫おもむきを装着し、口には轡おびが見られ、各所に鉸具かこが認められる。背には鞍を装い、泥障あかりの上には輪燈あかりを下げ、尻繫しりがいには杏葉きょうようが飾られるなど、まさに儀杖用の化粧馬が表現されている。

## ●「加盟大学財務状況調査結果の概要」を公表

本連盟財政部会では、かねてより加盟大学の平成四年度「財務状況調査（平成三年度実績）」の結果を中心に分析を行っていたが、これを「加盟大学財務状況調査結果の概要」にまとめ、総会に報告の後平成四年12月15日に公表した。

同概要は、学校法人の会計処理と計算書類、大学部門の財務状況、法人全体の財務状況、補助金と学生納付金の関係、学生一人当たりの支出と収入、の五節に分けてまとめられている。

内容は次号で詳報。

黒津敏行氏（園田学園女子大学元学長・元連盟会員代表者）11月16日、老衰のため逝去。94歳。  
古賀繁一氏（成蹊学園理事長）12月14日、肺炎のため逝去。89歳。  
岡茂男氏（武蔵大学元学長）12月14日、多臓器不全のため逝去。72歳。

□恭賀新年。大学を取り巻く環境は近年大きく変わりつつありますが、進取の精神で、癸酉の新年が私立大学にとって飛躍の年になりますように読者の皆さんとともに祈りたいと思います。そして本年も旧年変わらない「大学時報」へのご支援を賜りましてありがとうございます。□二十世紀も残すところ、八年である。今世紀後半だけを見ても、あらゆる分野で激しい変動・変革があった。科学技術は、情報化社会をつくり、経済の分野は、国を越えてグローバルな活動となって展開されている。東欧の諸国は、市場主義を導入して新しい道を歩みつつある。その一方で、地球環境やエイズなど、人類にとって大変な難問が目前に立ちだかってくる。このような変動や変革、問題は、二十一世紀にどのような引き継がれ、学問・文化・社会、さらに大学のあり方にとどのような影響を与えるのだろうか。そこで、二

十一世紀に入るまでにどういうことをなすべきか、何を考えるべきか、大学の「現実と夢」の間の諸問題を確立し、将来を見据えた議論をしていただくとうと企画したが、「二〇〇〇年の大学・学問・社会」の座談会である。二十一世紀に向けて大学の課題は多いが、積極的な取り組みを願う。

□平成五年度以降十八歳人口が減少に向かうことから、大学は冬の時代を迎える、とマスコミが賑わして久しい。こういっただことが影響しているのか、ここ十年間に大学の広報活動は、拡大し多様化してきた。受験雑誌、新聞等の学生の募集広告の時代からテレビCM、旅行雑誌等様々なメディアを活用したアピールの時代へと変化しているし、広報紙の提供システムなどの手法も様々。ところが、こういった広報活動が、果して大学本来の機能である教育研究の観点から展開されているか、と聞いて疑問視する声もある。特集「大学の広報活動」は、大学における広報活動の歴史を考察し、二十一世紀の大学における広報活動のあり方を考えようと企画した。この特集は、い

本誌をご希望の方は……  
○連盟事務局広報課までハガキか電話でお申し込み下さい。  
○お申し込みの際は、住所、氏名、大学（会社）名をご明示下さい。  
○ご希望の方には、協賛協力金（年間五〇〇〇円）を負担していただきます。

ま広報のあり方を模索中の大学のみなならず多くの示唆を与えてくれる。□本号の「クローズアップ・インタビュー」には、大宅映子さんにご登場いただいた。大宅さんは、ICUのOG。企業や団体の文化イベントの企画プロデュースをはじめ、国際問題・国内政治経済から食文化・子育てまで守備範囲広く活躍されている方。関谷さんの質問に、同窓の誼か、パチッと、しかし論すような口調で話されていたのが印象的であった。男、女の「よきを生かして、はやりことばじゃないけど、共生」するのは大人の社会へ、大宅さんとは同世代の私などは同感。齒に衣を着せぬ話し振りは、聞いていて気持ちがいい。（野崎 政武）